

「Route H」グループ※合格実績（2010—2022）抜粋 ※最新情報はRoute Hのサイトでご確認下さい。

Harvard 28名 (12年連続)

Yale 38名 (13年連続)

Princeton 25名 (10年連続)

Stanford 12名

MIT 7名

Oxford 5名

アメリカ (総合大)

Columbia, Brown, UPENN, Cornell, Dartmouth, U Chicago, Northwestern, Duke, UCLA, UC Berkeley, UCSD, Georgetown, U Michigan, Georgia Tech, NYU, Tufts, Caltech ほか

アメリカ (リベラルアーツ・カレッジ)

Williams, Amherst, Swarthmore, Wellesley, Pomona, Bowdoin, Carleton, Middlebury, Haverford, Grinnell, Wesleyan, Mount Holyoke, Minerva ほか

イギリス

ICL, UCL, KCL, U Edinburgh, U Manchester ほか

オーストラリア

U Melbourne, U Queensland, U Sydney, The Australian National University ほか

カナダ

U Toronto, U British Columbia, McGill University, York University ほか

シンガポール

Yale NUS, NUS, Nanyang Technological University

その他

NYU Abu Dhabi, Peking University (北京大), U Hong Kong, Seoul National University, Hong Kong Science and Technology ほか

大学院合格 (高校生の飛び級合格 特別対応)

Caltech (カリフォルニア工科大)

日本

東京大、京都大、大阪大、東北大、九州大、早稲田大、慶應大、上智大、国際教養大 ほか

奨学金

柳井正財団海外奨学金、江副記念財団奨学金 (学術部門)、孫正義育英財団奨学金、グローバルバンクロフト基金奨学金、JASSO海外留学支援制度 (学部学位取得型)、船井情報科学振興財団奨学金

TOEFL® and TOEFL®iBT are registered trademarks of Education Testing Service(ETS). This brochure is not endorsed or approved by ETS.
SAT® is a trademarks of the College Entrance Examination Board, which does not endorse this publication.



海外・国内トップ大進学情報誌

Route Book



「世界中から進路を選ぶ」をスタンダードに。

日本の高校から12年連続ハーバード大、13年連続イェール大へ合格者を輩出する日本で唯一の進学塾「Route H」グループが
『出願対策』×『英語テスト対策』で日本の中高生のグローバル進路実現をサポートします。

「世界中から進路を選ぶ」をスタンダードに。

高校卒業後に日本国内の大学に加え、海外の大学を当たり前を目指す時代になりました。

「世界中から進路を選ぶ」という姿勢が広がる一方で、合格へのノウハウが一般化されるには至っていません。

そのノウハウは、毎年多くの海外トップ大学・国内グローバル系大学へ合格者を輩出している「Route H」グループへ蓄積されています。その確かさは、12年連続ハーバード大、13年連続イェール大合格者輩出という日本で唯一の実績が証明しています。グローバルな進路に挑む際の道標としてこの冊子をぜひお役立てください。

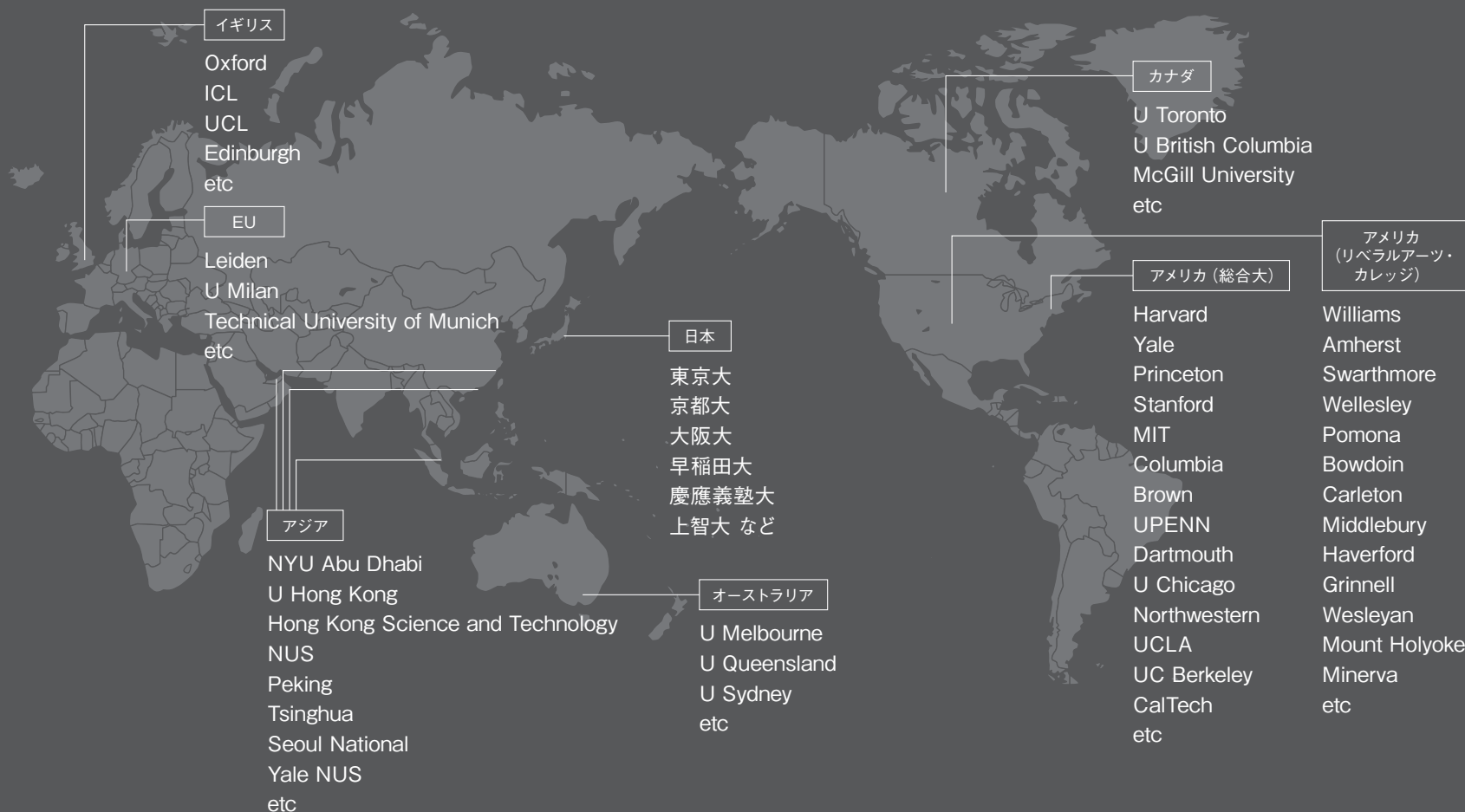
進学先もグローバルな視点から選ぶ時代。

あなたの未来を拓く挑戦を「Route H」グループが応援します。

「Route H」グループ講師一同

日本国内のトップ大のみならず世界のトップ大に広がる進学先

「世界中から進路を選ぶをスタンダードに」を体現する卒業生たち。その進路はアイビーリーグやリベラルアーツカレッジなど米国の名門大学をはじめ、イギリス、カナダ、オーストラリア、日本など世界各地へと広がっています。



Elite Research Universities

世界の名門大学

世界を代表する名門大学の多くは世界ランキングでも常に上位に名を連ね、入学志願者数は年々増える傾向にある。国籍を問わずに優秀な頭脳を選りすぐり学内の活性化に努める開かれた姿勢が世界中の高校生を惹きつけているからだ。合格率はいずれも低く超難関。その難度もますます高まりつつあるが、必要な対策を行えば日本からの進学も決して夢ではない。

Harvard University ハーバード大学

世界のトップを独走する私学の雄である。全米最古の大学で世界ランクで常に最上位にランクされる私立大学。留学生の入学基準は国内学生と同じ。Ivy Leagueに所属。



Yale University イェール大学

ハーバード、プリンストンと並ぶ不動の名門私立大学。全米で3番目に古い大学である。学生の出身国は70か国以上。Ivy League、IARUIに所属。



University of Princeton プリンストン大学

教育・研究の両立で名高い難関校。世界ランク上位の常連校。少数精鋭主義で知られ、ノーベル賞受賞者を多数算出。



University of Stanford スタンフォード大学

産業界を牽引する西海岸の最高峰。全米BIG 4の一角をなす名門。理系・文系を問わず世界的な名声を誇る。



所在地	MA USA	CT USA	NJ USA	CA USA
設立	1636年	1701年	1746年	1891年
公立/私立	Private	Private	Private	Private
留学生比率	26%	20%	23%	23%
合格率	4.63%	6.08%	—	4.34%
早期出願	Early Action (Restrictive)	Early Action (Restrictive)	—	Early Action (Restrictive)
英語スコア目安	SAT 1480-1580 / ACT 33-36 TOEFL 提出可	SAT 1480-1580 / ACT 33-35 TOEFL 100	SAT 1460-1570 / ACT33-35 TOEFL必須	SAT 1470-1570 / ACT34-36 TOEFL推奨

※留学生比率の出典は、World University Rankings

※合格率、早期出願の出典は、College Board

University of Columbia コロンビア大学

世界の頭脳が集まる都市型キャンパス。150か国から留学生が学ぶ。出身・所属のノーベル賞受賞者は過去70人以上を誇る。



The University of Pennsylvania ペンシルバニア大学

文教都市に建つ国際色豊かな名門。世界的に知られる世界最古の医学部を持ち、ウォートンビジネススクールも有名。



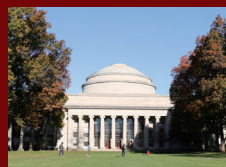
University of Brown ブラウン大学

教育力に定評ある東海岸の優良校。大学院進学率が郡を抜いて高く、すべての教員が学部課程と大学院の指導を兼任する。



Massachusetts Institute of Technology マサチューセッツ工科大学

世界に冠たる理工系エリート校。自然科学と工学系で名実ともに世界のトップ。ハーバード大学との単位互換制度あり。



University of Oxford オックスフォード大学

世界ランキング3年連続1位。11世紀末に設立された英語圏最古の大学である。イギリス伝統のカレッジ制を導入している公立大学。Russell Groupに所属。



University of Cambridge ケンブリッジ大学

世界屈指の名門公立大学の一つ。英語圏では、2番目に古い大学である。オックスフォードと同じく、イギリス伝統のカレッジ制を導入している。Russell Groupに所属。



NY USA

PA USA

RI USA

MA USA

Oxford UK

Cambridge UK

1754年

1740年

1764年

1861年

1096年

1209年

Private

Private

Private

Private

Public

Public

37%

21%

20%

34%

41%

38%

5.27%

7.66%

4.29%

6.69%

—

—

Early Decision

Early Decision

Early Decision

Early Action (Not-restrictive)

—

—

SAT 1460-1570 / ACT33-35
TOEFL100

SAT 1480-1570 / ACT33-35
TOEFL100

SAT 1460-1570 / ACT33-35
TOEFL100

SAT 1510-1580 / ACT34-36
TOEFL90 (推奨は100)

SAT 1480-1600 / ACT33-36
TOEFL100-110

SAT 1470-1600/ACT32-36
TOEFL100-110

※留学生比率の出典は、World University Rankings

※数値は目安です。詳細は必ず大学のオフィシャルページでご確認ください。

※英語スコア目安の出典は、US News

Times Higher Education World University Rankings 2023

世界大学ランキング

世界には、2万を超える大学が存在する。名門校の多くは世界でもトップに位置している。タイムズ社の世界大学ランキングを見れば英語圏の大学の評価がいかに高いかがわかる。その圧倒的な強さを支えているのは優れた教育研究レベルはもとよりそれを可能にする強大な資金力と活力を生み出すフレキシブルな制度、そして世界中から集まる有能な学生たちだ。

順位	大学名	国名
1	University of Oxford	イギリス
2	Harvard University	アメリカ
3	University of Cambridge	イギリス
3	Stanford University	アメリカ
5	Massachusetts Institute of Technology	アメリカ
6	California Institute of Technology	アメリカ
7	Princeton University	アメリカ
8	University of California, Berkeley	アメリカ
9	Yale University	アメリカ
10	Imperial College of London	イギリス
11	Columbia University	アメリカ
11	ETH Zurich	スイス
13	The University of Chicago	アメリカ
14	University of Pennsylvania	アメリカ
15	Johns Hopkins University	アメリカ
16	Tsinghua University	中国
17	Peking University	中国
18	University of Toronto	カナダ
19	National University of Singapore	シンガポール
20	Cornell University	アメリカ
21	University of California, Los Angeles	アメリカ
22	University College London	イギリス
23	University of Michigan-Ann Arbor	アメリカ
24	New York University	アメリカ
25	Duke University	アメリカ

なぜ今、日本の中高生は海外トップ大を目指すのか？

世界中から集まる学友とともにディスカッションなど、アウトプットの多い授業を受けることによって身につく知識・スキル、寮生活を通じて培われる人間力や世界に広がる仲間のネットワークに魅力を感じる中高生は多い。また、文理にまたがり副専攻やダブル専攻をすることも可能なため、自分の興味のある分野を追求できることも魅力となっている。

海外トップ大の魅力

ダイバーシティが生む活力

文化や世代の違いを超えて世界中から集まる学生の多様性 (diversity) が、大学に活力をもたらしている。入学審査で活動実績が重視されるのもそのため。多才な友人たちと切磋琢磨し、世界中にネットワークが広がることで、さらに「大学力」が高まることになる。

多様でフレキシブルな教育力

アメリカの大学では、1、2年次の教養課程で幅広く学んでから専攻を絞るため、カリキュラムは柔軟性に富む。他の国の多くは、選考を決め入学をし1年時から研究ができる大学が多い。世界の大学では、副専攻やダブル専攻で同時に2つの分野を学んだり、海外留学や他大学での聴講、単位互換なども盛んである。

学費援助を支える資金力

世界の大学の多くでは、優秀な学生を多く集めるため奨学金 [Scholarship] を留学生に用意している。授業料の一部を補助してくれる大学や生活費までカバーしてくれる大学など多岐にわたる。出願時には、「Scholarship」にぜひ挑戦してほしい。

理系・文系を問わず自らの
学びたい分野を追求できる
副専攻・ダブル専攻の一例

Computer
Science

Philosophy

Chemistry

History of
Arts

Statistics

Economics

豊富な選択肢とリソース

学業面のプログラムの豊富さに加え、課外活動やフィールドワークなどの選択肢が豊富でかつレベルが高いものも多い。レベルの高い教授陣や最先端な研究施設などトップ大の豊富なリソースを有効活用することをお勧めする。選択肢が多いため、個々のニーズに合わせた最適な学業や活動を選択することが可能である。

寮生活で培われる人間力

多くの新入生が寮生活では、他国の学生との交流の中でそれぞれの価値観を知り、多様性や異文化理解を深めることができる。また、高度なコミュニケーション能力を身につけることもできるのも魅力だ。様々な国の学生と交流を深めることによって各国の研究や就職情報なども得ることができる。

ディスカッションで切磋琢磨

規模の大きい大学では、教授の「講義」以外に、助手 (TA) が担当する少人数授業 (チュートリアルやセクションなどと呼ばれる) があり、講義の受講を前提に、ディスカッションなどで仲間と切磋琢磨しながら科目に対する理解を深める仕組みが徹底している。

US Liberal Arts Colleges

US Liberal Arts大学

近年、リベラルアーツ教育への関心が高まっている。その背景には、高校在学中に学問の専攻を確実に決めて進学することへの不安感や大学入学後に興味関心が変わることへのリスクを感じている学生が増加していることがある。リベラルアーツ大学は、総合大学同様、自分自身の興味のある学問を探すために様々な分野の学問を大学1、2年で選択して学ぶことができる。そして興味を持った学問を3、4年で専門性を深めていくことが可能である。また、少人数クラスの中でディスカッションを中心とした授業を展開することも人気の理由だ。

リベラルアーツ・カレッジ・トップ5大学(ランキングは変わる場合があります)

Williams College ウィリアムズ大学(マサチューセッツ州)

リベラルアーツ・カレッジの最高峰。
オックスフォード型のチュートリアル制度を採用し、
教授との1対1の議論で学生を徹底的に鍛え上げる。

Amherst College アマースト大学(マサチューセッツ州)

ウィリアムズ大学と長年のライバル大学。
5大学コンソーシアムを組んでおり、学生はコンソーシアム内で
5,000以上のクラスから履修クラスを選択できる。

Pomona College ポモナ大学(カリフォルニア州)

西海岸では数少ないリベラルアーツ・カレッジとして絶大な人気を誇る名門。
学生一人あたりの資金力ではリベラルアーツ・カレッジでトップ。
隣接する4つのリベラルアーツ大との連合も強み。

Swarthmore College スワースモア大学(ペンシルバニア州)

アイビーリーグ大学と同等の質やレベルを有する
名門大学群「リトル・アイビー」の1大学。
卒業生が博士号を取得する割合は理工系大学を除くと全米1位。

Wellesley College ウェルズリー大学(マサチューセッツ州)

アメリカ初の女性国務長官であるマデレーン・オルブライトや
ヒラリー・クリントンを輩出した名門女子大学。
MITとの単位互換プログラムがあり、MITの授業も受けられる。

Elite Liberal Arts Colleges

注目のリベラルアーツ校

少数精鋭主義で幅広く学問を修め、文系・理系にまたがる真の教養を磨くりベラルアーツ・カレッジの名門私大。大学院へ進学する卒業生も非常に多い。

少数精鋭主義で実力を磨く

学生数3000人未満の大学が多く、教員1人あたりの学生数はわずか7～11人。教授の目がよく行き届き、学生一人ひとりの力を十分に伸ばすことができる。

「個」を高めて伸ばす

少人数のため、教室や課外活動で自然とリーダーシップが身につく。アドバイザー教員がマンツーマンで学習面・生活面を支え、潜在能力を引き出してくれる。

指導に情熱を注ぐ教授陣

総合大学以上に教育熱心な教授が多く、必ず教授自身が授業を受け持つ。個々の学生に対してきめ細やかに指導し、夜遅くまで学生たちと議論を楽しむことも。

他大学の授業も受講できる

小規模で、講座数がやや限られる点を補うため、近隣の他大学と連携（コンソーシアムを形成）することで多種多様な科目を受講しやすくなる制度をとる大学も散見される。

全米リベラルアーツ・カレッジ TOP 20

順位	大学名	所在地
1	Williams College	マサチューセッツ州
2	Amherst College	マサチューセッツ州
3	Pomona College	カリフォルニア州
4	Swarthmore College	ペンシルバニア州
5	Wellesley College	マサチューセッツ州
6	Bowdoin College	メイン州
6	Carleton College	ミネソタ州
6	United States Naval Academy	メリーランド州
9	Claremont McKenna College	カリフォルニア州
9	United States Military Academy	ニューヨーク州
11	Middlebury College	バーモント州
11	Washington and Lee University	バージニア州
13	Smith College	マサチューセッツ州
13	Vassar College	ニューヨーク州
15	Davidson College	ノースカロライナ州
15	Grinnell College	アイオワ州
15	Hamilton College	ニューヨーク州
18	Barnard College	ニューヨーク州
18	Colgate University	ニューヨーク州
18	Haverford College	ペンシルバニア州
18	United States Air Force Academy	コロラド州

出典：2022 Best National Liberal Arts Colleges | US News Rankings

グレル・バンクcroft基金～リベラルアーツ・カレッジ専門の奨学金～

リベラルアーツ・カレッジへの進学を希望する日本の高校卒業生を対象とした、返済義務のない奨学金。帰国者の就職も支援しており、各界へ優秀な人材を輩出している。

お問い合わせ

<https://grew-bancroft.or.jp/>

支給内容(2022年度募集要項より/2023年夏出発)

- 米国のリベラルアーツ大学に進学する者に対し、毎年8万米ドルを上限に4年間支給。(1名)
- 奨学金年2万ドル以下提携校へ授業料全額免除推薦(各大学1名)
DePaw University/Grinnell College/Union College
- 提携校へ授業料一部または全額免除の推薦(各大学1名)
・ 下記の提携校の授業料一部免除へ推薦、加えて基金より年1万ドル4年間支給。
Knox College/Earham College/Lake Forest College
・ 下記の提携校の授業料一部または全額免除へ推薦
Mount Holyoke College/The College of Wooster/Ohio Wesleyan University
※最新の情報はホームページ等でご確認ください。

Universities in the US 総合力を養うアメリカの大学



アメリカの大学受験は、日本の大学入学共通テストに代表される日付指定の筆記試験ではなく、事前に準備が可能な書類審査で行われる。提出した書類により多面的総合的に評価される。アメリカの大学の大部分は、Common ApplicationやCoalition Applicationと呼ばれる共通願書システムでオンライン上から必要な書類や質問を記入して出願する。州ごとに願書システムを持つ大学もある。

大学の特徴

- 日本と同じ4年制大学。
- 学部別の入試は無く入学後に専攻を決める。
- 2年制のコミュニティカレッジからの編入もポピュラー。
- 一般教養だけを学ぶ「リベラルアーツカレッジ」という大学も存在するほど、一般教養が重視され幅広い知識を総合的に身につける教育が徹底されている。
- 最初の2年は一般教養を学ぶ大学が多くを占めている。
- 研究やフィールドワークなどの機会が多い。
- 在学途中で専攻変更、副専攻、ダブル専攻、早期卒業、編入などが可能でとてもフレキシブル。

大学例

IVY Leagueが有名

- California Institute of Technology
- Harvard University
- Massachusetts Institute of Technology
- Princeton University
- Stanford University
- University of Chicago
- Yale University など

大学数

- 約4,700校

IVY Leagueとは

アメリカ東海岸にある名門私立8大学の通称。Brown University、Columbia University、Cornell University、Dartmouth College、Harvard University、Princeton University、University of Pennsylvania、Yale Universityで構成される。アメリカのみならず世界をリードする人材が集う大学である。

※上記の情報は変更になる可能性があります。

Universities in Canada 質の高いカナダの大学



カナダの大学受験は、アメリカなどと同様、日本の大学入学共通テストに代表される日付指定の筆記試験ではなく、事前に準備が可能な書類審査で行われる。提出した書類により多面的総合的に評価される。カナダの大学は、大学のホームページから個人登録をし、オンラインで必要な書類や質問を記入して出願する。

大学の特徴

- 日本と同じ4年制大学。
- 教育の質が高く、ハイレベルな学力・英語力が求められる入試難易度が高い。
- 恵まれた自然環境で生活のしやすさや治安の良さから多くの留学生から人気。
- 大学在学中及び大学卒業後、最大3年間カナダで働く事ができる。
- ダブル専攻が可能な大学も多い。

大学例

The U15 Group of Canadian Research Universitiesが有名

- McGill University
- McMaster University
- University of British Columbia
- University of Montreal
- University of Toronto など

大学数

- 約90校

U15 Group of Canadian Research Universitiesとは

カナダの15研究大学の通称。University of Alberta、University of British Columbia、University of Calgary、Dalhousie University、Université Laval、University of Manitoba、McGill University、McMaster University、Université de Montréal、University of Ottawa、Queen's University、University of Saskatchewan、University of Toronto、University of Waterloo、University of Western Ontarioで構成される。研究費等が充実しカナダ国内最高峰の大学として知られる。

※上記の情報は変更になる可能性があります。

Universities in UK 専門性を追求するイギリスの大学



イギリスの大学受験は、アメリカ同様、日本の大学入学共通テストに代表される日付指定の筆記試験ではなく、事前に準備が可能な書類審査で行われる。提出した書類により多面的総合的に評価される。この他、A Levelを指定日に受験する方法もある。イギリスの大学は、UCASと呼ばれる共通願書システムでオンライン上から必要な書類や質問を記入して出願する。

大学の特徴

- 大学は3年制(学部によって3~6年)。
- 日本からの留学生は大学入学前に約1年間、専門知識の基礎を学んで、計4年で卒業。(インターナショナルバカロレアなどの学生は、成績によるが直接大学に入学が可能)
- 一般教養課程がなく、専門科目を重点的に学ぶ。
- 即戦力となる専門人材の育成に重点を置いた教育が特徴。
- 実学を重視した大学と研究を重視した大学がある。
- 国内の大学がほぼ国立大学で歴史のある大学が多い。
- ダブル専攻が可能な大学も多い。

大学例

Russell Groupが有名

- Imperial College London
- London School of Economics and Political Science
- University of Oxford
- University of Cambridge
- UCL など

大学数

- 約120校

Universities in Australia 専門人材を育成するオーストラリアの大学



オーストラリアの大学受験は、アメリカなどと同様、日本の大学入学共通テストに代表される日付指定の筆記試験ではなく、事前に準備が可能な書類審査で行われる。提出した書類により多面的総合的に評価される。オーストラリアの大学は、大学のホームページから個人登録をし、オンラインで必要な書類や質問を記入して出願する。紙で提出する場合には、日本のエージェントが書類提出窓口になっている大学もある。

大学の特徴

- 大学は3年制(学部によって3~6年)。
- 日本からの留学生は大学入学前に約1年間、専門知識の基礎を学んで計4年で卒業。(インターナショナルバカロレアなどの学生は、成績によるが直接大学に入学が可能)
- 専門人材の育成に重点を置いた教育が特徴。
- いわゆる短大という大学は存在しない。
- 公立総合専門学校(TAFE・College・Polytechnic)からの単位互換で大学編入が可能。
- 大学卒業後、2年間働くVISAを取得できる。
- ダブル専攻が可能な大学も多い。

大学例

Group of 8が有名

- Australian National University
- Monash University
- University of Melbourne
- University of New South Wales
- University of Queensland
- University of Sydney など

大学数

- 43校

Russell Groupとは

イギリスの24研究大学の通称。University of Birmingham, University of Bristol, University of Cambridge, Cardiff University, Durham University, University of Edinburgh, University of Exeter, University of Glasgow, Imperial College London, King's College London, University of Leeds, University of Liverpool, London School of Economics and Political Science, University of Manchester, Newcastle University, University of Nottingham, University of Oxford, Queen Mary University of London, Queen's University Belfast, University of Sheffield, University of Southampton, University College London, University of Warwick, University of Yorkで構成される。研究費や助成金等が充実しイギリス国内最高峰の大学として知られる。

※上記の情報は変更になる可能性があります。

Group of 8とは

オーストラリアの主要8研究大学の通称。Australian National University, University of Adelaide, University of Melbourne, Monash University, University of New South Wales, University of Queensland, University of Sydney, The University of Western Australiaで構成される。研究費等が充実しオーストラリア国内で最高峰の大学として知られる。

※上記の情報は変更になる可能性があります。

Prepare for World Top Universities

世界の大学は、 多面的総合的評価

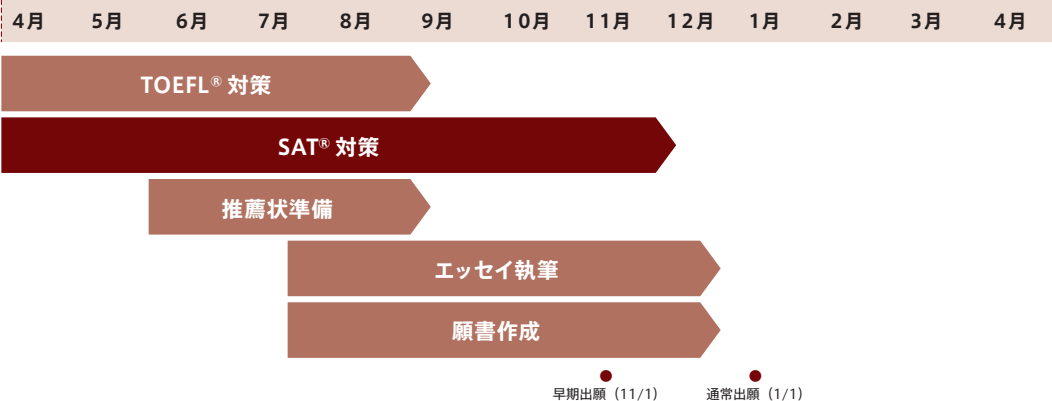
世界トップ大の多面的総合的評価への準備は計画的に。学校において良い成績を維持することは当然の事ながら、それに加えて課外活動やTOEFL®/SAT®の勉強、また、エッセイ執筆や推薦状の依頼、財政証明書の準備など、計画を立てて進める必要がある。特に、TOEFL®/SAT®のスコアは出願資格となる上に、スコア取得まで相当の時間がかかる。また、高3の夏休み以降は、国内の受験対策も本格化するので対策を早めに始めたい。



海外トップ大受験スケジュール一例（中学～高校3年）



海外トップ大受験スケジュール一例（高校3年）



入学審査の重点ポイント

全世界から優秀な頭脳を一堂に集め、その多様な力で学内を活性化することが名門大学の基本スタンスである。そのため学力だけで合否を決めることはない。出願時のエッセイや面接をもとに学業に加えて課外活動でも実績を上げ、強烈な熱意と高いモチベーション、創造力に秀でたタフな人物を見極める。それをいかにして審査官に訴えるか、まずは自分の強みと課題を整理してみよう。



Balance

「学力+人間力」の総合評価

学業成績、SATやTOEFLなどのテストスコア、願書（特に課外活動や受賞歴など）、エッセイ、面接でのコメントなどが総合的に判断され、入学するに相応しい人物が特定される。トップクラスの大学では、SATが満点でも不合格となるケースもある。

Passion

入学へのあくなき「熱意」

この大学に入りたい、という強い熱意を示すこと。事前に大学を訪問したり、全科目の講義要項に目を通したりして、明確な動機と必然性をもってエッセイや面接で志望理由を語りたい。自分に合った大学かどうか見きわめるためにも、ぜひ大学訪問を。

Creativity

きわだつ「個性」「独創力」

オールラウンドに秀でるだけでは決め手に欠ける。何らかの全国大会や世界大会での実績など、特別に目を引く強みがほしい。入学審査官は1万通、2万通もの願書に目を通す。しかも、出願者はみな精鋭ぞろい。凡庸な人物では選ばれる理由がない。

Contribution

期待感を高める「貢献度」

自分の目標に向かって走るだけでは不十分。その大学にフィットした、大学にとって貢献度の高い人物になりえるかどうか大事なポイント。「入学後、どんな貢献ができるか」といった質問が、願書やエッセイの課題に織り込まれているのもそのためだ。

Leadership

社会を変えていく「原動力」

社会を動かす人物こそが好まれる。学業や課外活動での優れた実績に加え、それが周囲にどれだけ認められ、問題解決に役立ったか、その影響力の強さが評価される。リーダーの地位だけでなく、何をすることが大事だ。

トップ大が求める人物像

ハーバード大のサイトには「リーダーシップ」「コミュニティ貢献」などに加え「学生同士で互いに、または教授をも教育する人——周りの人をインスパイアする人」スタンフォード大のサイトには「学業優秀」「知的バイタリティ」「好奇心と熱意」などの言葉が散見される。参考にしたい。

Application Requirements

出願に必要な書類

必要な書類は、国や大学ごとに異なることがあるが主に願書、成績証明書、エッセイ、推薦状、テストスコアがある。これらの中には、自分自身で用意する書類、学校の先生に用意してもらう書類、TOEFL®やSAT®の実施団体から提出してもらう書類などがある。また、保護者が用意する財政能力証明書が必要になる場合がある。

<p>願書 Application Form</p>	<p>オンライン出願が主流。個人情報を入力をする。世界のトップ大学の多くが志望する大学・専攻に関することや、高校時代の学業成績、受賞歴、就労歴、英語テストスコア、課外活動歴などの記入の指示などがある。</p>
<p>成績証明書 Transcripts</p>	<p>高校に依頼して英文の成績証明書を発行してもらう。進路指導教員や担任教員にお願いしよう。学校からの直送を求める大学も多い。途中で転校している場合は、前に在籍した学校の書類も必要。</p>
<p>エッセイ Essay</p>	<p>志望動機や留学への熱意、将来設計などを通じて自分をアピールする。エッセイでは国や大学ごとに文字制限などがあり要件に合わせたエッセイを書く必要がある。その大学について十分にリサーチしたうえで、志望動機を明確にして作成したい。</p>
<p>推薦状 Recommendations</p>	<p>出願者の資質や能力、人間的魅力について客観的に伝える。高校の担任や進路指導の教員、主要教科の教員などに依頼できるよう日頃からのコミュニケーションを大切にしたい。大学によってはさらに指定があるので要注意。国内大向けの推薦状以上の具体性が求められるので、自分のことをよく把握している先生に作成してもらうのがポイント。さらに、特筆すべき点があれば、高校以外のしかるべき人物に外部推薦状を作成してもらうのもよい。</p>
<p>テストスコア Test Scores</p>	<p>大学ごとに指定のテストを受験。そのスコアを実施団体から志望校に送ってもらう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●SATやACTでは、スコア・チョイス(受験生側で提出するスコアを選べる制度)が導入されているが、過去に受験したすべてのスコアの提出を求め、各セクションの最高点で評価する大学が多い。 ●通常出願の場合、1月受験のスコアも提出可能だが、できれば年内の受験で高得点を取り、他の出願書類とともに提出しておきたい。 ●TOEFLでは、iBT (Internet-based Test) で最低100点を要求する大学が散見されるので、早めにこれを超えるよう対策を立てたい。
<p>高校教員による学生評価 SR/CR/TE/MR</p>	<p>進路・担任や各教科教員がオンラインで提出する評価フォームのこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●SR (School Report)/CR (Counselor Recommendation): 進路指導教員または担任が作成し、成績証明書、学校案内、推薦状も添付する。 ●TE (Teacher Evaluation): 生徒に依頼された教員(2名)がそれぞれ作成するフォーム。推薦状もそれぞれ添付要。 ●MR (Mid Year Report): 出願後の学業成績を反映した中間報告書。 <p>※上記のほか、Final Reportなども必要に応じ提出要。</p>
<p>学校紹介 School Profile</p>	<p>高校(SR作成の先生)に、英文の学校紹介の作成を依頼する。単に日本語の高校案内を英訳するのではなく、基本情報に加え、難関大への合格実績など、学校のPRとなるような内容を追記してもらうとよい。</p>

テストスコア、 受験書類の目安

世界の大学を受験するには、様々な書類の提出を求められることが多い。世界トップの大学を目指す場合には全ての書類で良い評価を得る必要がある。自分の力で努力ができる課外活動、受賞歴、成績、エッセイ、テストスコアは計画を立てしっかりと準備をしよう。特に学校の成績は重要であるため、日々の学校の学習や中間や期末テストは、しっかりと高得点を取ってほしい。

英語テストの詳細は
オフィシャルページで確認しよう。

TOEFL

<https://www.ets.org/toefl>

IELTS

<https://www.ielts.org>

SAT

<https://collegereadiness.collegeboard.org/sat>

ACT

<http://www.act.org>

	オンライン願書		成績証明書		提出資料		テストスコア		
	課外活動	受賞歴	GPA	IB Points	エッセイ/ 志望理由	推薦状	TOEFL iBT	IELTS	SAT/ ACT
Top Prestigious University	◎	◎	4.5～5.0	43+	◎	◎	110+	8.0+	90%+
TOP University	◎	◎	4.0～4.5	30+	◎	◎	100+	6.5～7.0	80%+
University	○	○	3.5～4.0	25+	○	○	90+	6.0～6.5	—
Foundation Course Community College etc	△	△	3.0～4.0	—	△	△	60-80+	5.0～6.0	—

※上記スコアは、あくまで目安となります。海外大学は、提出書類の総合評価になります。

※◎とても重視する ○重視する △あまり重視しない

Honors and Extracurricular Activities

課外活動を アピールしよう

共通願書などには、中学3年生から高校3年生の出願時点までの課外活動に関する受賞歴を記載する欄がある。これをすべて埋めなければ、トップスクールに合格することはできない、ということでは決してない。そうしたなかで、少しでも自分をアピールするのに大切なことは、活動の数や量もさることながら「質」である。質の高い活動歴がたくさんあればあるほど、入学審査官の目にとまりやすい。ここでは、願書に見られる課外活動の代表的なタイプと例をまとめているので参考にしてほしい。特に活動例はここに挙げた以外にも、中高生が参加できるものが多々あるので調べてみよう。

課外活動の主なタイプと活動例

タイプ／共通願書の英語表記	例
高校の組織活動(部活動は除く)／School Spirit	生徒会、委員会、クラスでの活動など。 ※校内の運動部やクラブでの活動は、次のAthleticsに含む。
運動部:(準)レギュラー／Athletics: JV/Varsity 運動クラブ／Athletics: Club	運動部や運動クラブでの活動。 ※Varsityはレギュラー、JV (Junior Varsity)は準レギュラーの意。
アカデミック／Academic	学問レベルを競う各種オリンピックや模擬国連、エッセイコンテストなどアカデミックな大会等への出場歴。サマースクールやキャンプ等への参加も含む。 ※大会での受賞歴は、Honors(次ページ参照)の欄に書くのが一般的。
科学、数学／Science, Math	科学や数学系のキャンプやプログラムへの参加、大学等での実験活動体験など。
外国語／Foreign Language	校内でのESS活動、外国語学習歴など。
海外交流／Foreign Exchange	海外交流イベントへの参加、運営など。
ディベート、スピーチ／Debate, Speech	ディベート大会、スピーチ・コンテストへの参加など。 ※Academicの模擬国連はこちらに記載しても可。
コミュニティ活動(ボランティア)／ Community Service (Volunteer)	各種ボランティア活動(NPO等でのボランティアも可)。 ※将来の職業に関連するボランティア活動はCareer Orientedの項に記載するほうがよい。
キャリア志向／Career Oriented	インターンの経験、NPO等での活動歴など。
ジャーナリズム、出版／Journalism, Publication	出版物等の記事作成、寄稿など。
音楽: 楽器(演奏)／Music: Instrumental 音楽: 歌／Music: Vocal	楽器の習い事、演奏歴、合唱歴など。
美術／Art	美術に関する活動全般。校内イベントのパンフレット制作(デザイン等)なども可。
その他のクラブ、活動／Other Club, Activity	上記のどの分類にもあてはめにくいものはここに記入する。

★アカデミックな大会などに出場して入賞した場合は、受賞欄(Honors)にも記載できる。

★自分の活動が複数のタイプにあてはまる場合は、どれに記入したほうがよりアピールできるかを考えよう。

アカデミックな 受賞歴もPR

共通願書などには、課外活動歴と同様に、中学3年生から高校3年生の出願時点までの間に獲得したアカデミックな受賞歴について記載する欄もある。トップスクール合格に、国際大会や全国大会での受賞が必ずしも求められるわけではないものの、そうした経歴があれば当然、自己PRの材料が増える。では、名門校への出願者は実際にどのような大会で賞を手に行っているのだろう。主なタイプと具体例を右にまとめてみた。もちろん、ここに挙げた以外にも、中高生が参加できるコンテストやプログラムはたくさんあるので調べてみよう。

奨学金にもチャレンジを

日本から海外の大学に出願する高校生でも応募できる奨学金が、ここ数年で増えてきている。支給額が高いこともあり「狭き門」ではあるが、挑戦しておきたい。(p.28参照)

受賞歴の主なタイプと受賞例

※下記大会等の名称は通称。参加資格などの詳細は各プログラムのホームページ等で確認のこと。参加資格に制限がある場合もあるので注意。

タイプ	例
各教科系のオリンピック	「数学オリンピック」「物理オリンピック」など、数学・物理・化学・生物・地学・地理の各教科でそれぞれオリンピックが開催されているほか、哲学・情報オリンピックなどもある(国内上位入賞者は世界大会に出場可)。
英語力の比重の高い大会	英語ディベート大会(全国高校生英語ディベート大会ほか) 英語スピーチコンテスト(チャーチル杯、ホノルル市長杯ほか) 英語エッセイコンテスト 模擬国連(高校模擬国連ほか) ※日本語での弁論大会、論文コンクール等での受賞なども記載可。
その他のアカデミックな大会	ビジネスコンテスト、プレゼンテーションコンテスト、複数のスキルをすべて英語で競う大会(World Scholar's Cupほか)など。
国際会議 国際交流プログラム	高校生を対象としたアカデミックな国際交流プログラムや国際会議に、国内での選考を経て、日本代表として参加した場合なども記載可。
奨学金プログラム	グルー・バンクロフト基金の奨学金(p.9参照)やTOEFL奨学金など、さまざまな機関が支給する選考を伴う奨学金プログラムのほか、高校が成績優秀者に対して支給する奨学金などがある。

★入賞ができなかった場合でも、願書の課外活動欄に記載することは可能。また、大会への参加資格を得たにもかかわらず、都合で参加できなかった場合も記載してよい。

Application Essay for US Universities

アメリカの大学のエッセイ

エッセイ対策と 自己分析

エッセイは合否を分かつ重要な出願書類。過去の経験から得られた価値観を背景に、志望理由や将来の目標を意識して自分自身のドラマを熱く語る必要がある。そのためには徹底した自己分析が欠かせない。自分は何を求め、どう生きる人間なのか。その行動特性と価値基準をよく見極めてこれからの課題と対策をあぶり出してほしい。自分が将来なすべきことを実現するための道、それと志望校に求めることが結びついたとき大きな説得力が生まれるはずだ。

Common App Essay (共通願書のエッセイ)

以下の7つから1つを選び、250~650語で書く。

- 1 **Some students have a background, identity, interest, or talent so meaningful they believe their application would be incomplete without it. If this sounds like you, please share your story.**
- 2 **The lessons we take from obstacles we encounter can be fundamental to later success. Recount a time when you faced a challenge, setback, or failure. How did it affect you, and what did you learn from the experience?**
- 3 **Reflect on a time when you questioned or challenged a belief or idea. What prompted your thinking? What was the outcome?**
- 4 **Reflect on something that someone has done for you that has made you happy or thankful in a surprising way. How has this gratitude affected or motivated you?**
- 5 **Discuss an accomplishment, event, or realization that sparked a period of personal growth and a new understanding of yourself or others.**
- 6 **Describe a topic, idea, or concept you find so engaging it makes you lose all track of time. Why does it captivate you? What or who do you turn to when you want to learn more?**
- 7 **Share an essay on any topic of your choice. It can be one you've already written, one that responds to a different prompt, or one of your own design.**

★付加情報記入欄 (オプション)

上記に加え、以前からあった付加情報 (Additional Info) 欄に加え、昨年から、コロナ禍や自然災害の自分への影響があれば説明してよい欄が新設された。

Supplement Essay (個別大エッセイ)

★ハーバード大学

Harvard 課外活動詳説、志望動機、オプション等が課される。

■ 課外活動詳説 ※50~150語

Please briefly elaborate on one of your extracurricular activities or work experiences. (50-150 words)

■ 志望動機 ※50語以内/アメリカ・カナダ以外の出願者のみ。

For International Students: What specific plan do you have, if any, for using the education you hope to receive?

■ Additional Essay ※以下のエッセイを追加してもよい。語数指定なし。

- 1 Unusual circumstances in your life
- 2 Travel, living, or working experiences in your own or other communities
- 3 What you would want your future college roommate to know about you
- 4 An intellectual experience (course, project, book, discussion, paper, poetry, or research topic in engineering, mathematics, science or other modes of inquiry) that has meant the most to you
- 5 How you hope to use your college education
- 6 A list of books you have read during the past twelve months
- 7 The Harvard College Honor code declares that we "hold honesty as the foundation of our community." As you consider entering this community that is committed to honesty, please reflect on a time when you or someone you observed had to make a choice about whether to act with integrity and honesty.
- 8 The mission of Harvard College is to educate our students to be citizens and citizen-leaders for society. What would you do to contribute to the lives of your classmates in advancing this mission?
- 9 Each year a substantial number of students admitted to Harvard defer their admission for one year or take time off during college. If you decided in the future to choose either option, what would you like to do?

10

Harvard has long recognized the importance of student body diversity of all kinds. We welcome you to write about distinctive aspects of your background, personal development or the intellectual interests you might bring to your Harvard classmates.

※上記以外に、オプションだが additional intellectual activities を記載する欄もある。

★イェール大学

志望動機、エッセイ、および複数の小問が課される。

■ 志望動機 ※50語以内/アメリカ・カナダ以外の出願者のみ。

Tell us about a topic or idea that excites you and is related to one or more academic areas you selected above. Why are you drawn to it? (200語以内)

What is it about Yale that has led you to apply? (125語以内)

■ Additional Questions ※35語以内

- 1 What inspires you?
- 2 Yale's residential colleges regularly host conversations with guests representing a wide range of experiences and accomplishments. What person, past or present, would you invite to speak? What would you ask them to discuss?
- 3 You are teaching a new Yale course. What is it called?
- 4 What is something about you that is not included anywhere else in your application?

■ Essays ※以下から1つ選ぶ。400語以内。

Yale carries out its mission "through the free exchange of ideas in an ethical, interdependent, and diverse community." Reflect on a time when you exchanged ideas about an important issue with someone holding an opposing view. How did the experience lead you either to change your opinion or to sharpen your reasons for holding onto it?

Reflect on a time when you have worked to enhance a community to which you feel connected. Why have these efforts been meaningful to you? You may define community however you like.

★プリンストン大学

エッセイ、課外活動詳説、複数の小問が課される。

■ Writing Questions ※250 語程度。

1.) At Princeton, we value diverse perspectives and the ability to have respectful dialogue about difficult issues. Share a time when you had a conversation with a person or a group of people about a difficult topic. What insight did you gain, and how would you incorporate that knowledge into your thinking in the future?

2.) Princeton has a longstanding commitment to service and civic engagement. Tell us how your story intersects (or will intersect) with these ideals.

■ 学位別エッセイ ※以下から1つ選ぶ。

For A.B Degree Applicants or Those Who are Undecided:

As a research institution that also prides itself on its liberal arts curriculum, Princeton allows students to explore areas across the humanities and the arts, the natural sciences, and the social sciences. What academic areas most pique your curiosity, and how do the programs offered at Princeton suit your particular interests? (350 語程度)

For B.S.E Degree Applicants:

Please describe why you are interested in studying engineering at Princeton. Include any of your experiences in, or exposure to engineering, and how you think the programs offered at the University suit your particular interests. (350 語程度)

■ 課外活動詳説 ※150 語程度。

Activities: Please briefly elaborate on one of your extracurricular activities or work experiences that was particularly meaningful to you.

■ More About You ※75 語以内。

- 1 What is a new skill you would like to learn in college?
- 2 What brings you joy?
- 3 What song represents the soundtrack of your life at this moment?

★スタンフォード大学

エッセイ、および複数の小問が課される。

■ Short Questions ※50 語以内。

- 1 What is the most significant challenge that society faces today?
- 2 How did you spend your last two summers?
- 3 What historical moment or event do you wish you could have witnessed?
- 4 Briefly elaborate on one of your extracurricular activities, a job you hold, or responsibilities you have for your family.
- 5 Name one thing you are looking forward to experiencing at Stanford.

■ Short Essays ※すべて100～250 語以内。

- 1 The Stanford community is deeply curious and driven to learn in and out of the classroom. Reflect on an idea or experience that makes you genuinely excited about learning.
- 2 Virtually all of Stanford's undergraduates live on campus. Write a note to your future roommate that reveals something about you or that will help your roommate — and us — know you better.
- 3 Tell us about something that is meaningful to you and why.

★MIT (マサチューセッツ工科大学)

- 1 Pick what field of study at MIT appeals to you the most right now, and tell us more about why this field of study appeals to you. (100 語以内)
- 2 We know you lead a busy life, full of activities, many of which are required of you. Tell us about something you do simply for the pleasure of it.
- 3 Describe the world you come from (for example, your family, school, community, city, or town). How has that world shaped your dreams and aspirations?

4 MIT brings people with diverse backgrounds and experiences together to better the lives of others. Our students work to improve their communities in different ways, from tackling the world's biggest challenges to being a good friend. Describe one way you have collaborated with people who are different from you to contribute to your community.

5 Tell us about a significant challenge you've faced (that you feel comfortable sharing) or something that didn't go according to plan. How did you manage the situation?

※2～5は、200 語程度。

★コロンビア大学

■ Writing Questions

- 1 List the titles of the books, essays, poetry, short stories or plays you read outside of academic courses that you enjoyed most during secondary/high school. (75 語以内)
- 2 We're interested in learning about some of the ways that you explore your interests. List some resources and outlets that you enjoy, including but not limited to websites, publications, journals, podcasts, social media accounts, lectures, museums, movies, music, or other content with which you regularly engage. (125 語以内)
- 3 Why are you interested in attending Columbia University? (200 語以内)
- 4 A hallmark of the Columbia experience is being able to learn and live in a community with a wide range of perspectives. How do you or would you learn from and contribute to diverse, collaborative communities? (200 語以内)
- 5 In Columbia's admissions process, we value who you are as a unique individual, distinct from your goals and achievements. In the last words of this writing supplement, we would like you to reflect on a source of happiness. Help us get to know you further by describing the first thing that comes to mind when you consider what simply brings you joy. (35 語以内)
- 1 For applicants to Columbia College, please tell us what from your current and past experiences (either academic or personal) attracts you specifically to the areas of study that you previously noted in the application.

※以下は志望プログラムに応じて、選択するもの

イギリスの大学のエッセイ

イギリスの出願において Personal statement と呼ばれるエッセイは非常に重要だ。最大 47 行、1000～4000 ワード以内で志望理由、自分の学びたい学問へのパッション、スキル、経験、課外活動などをアドミッション担当官へアピールする必要がある。オンライン出願システムの UCAS では、エッセイの書き方の動画もアップされている。エッセイを書く前に動画をしっかり確認したい。

Preparing your personal statement

準備 自己分析	ポイント 整理	文字制限に 注意して書く	文法、スペルミス をチェック
------------	------------	-----------------	-------------------

Personal statement の重要なポイント

- なぜあなたは英国で勉強したいのか?
- なぜあなたは特定のコースや科目を勉強したいのか?
- 学問への情熱はあるか?
- どんなスキルや経験があるか?

Personal statement の注意点

- 共通願書のため、選択した全大学に同じ Personal statement が送付される。そのため、大学名を言及しないように注意しよう。
- 文字数制限があるため、アドミッション担当官に自分の良さをしっかり伝え、優秀な候補者であることをアピールする必要がある。

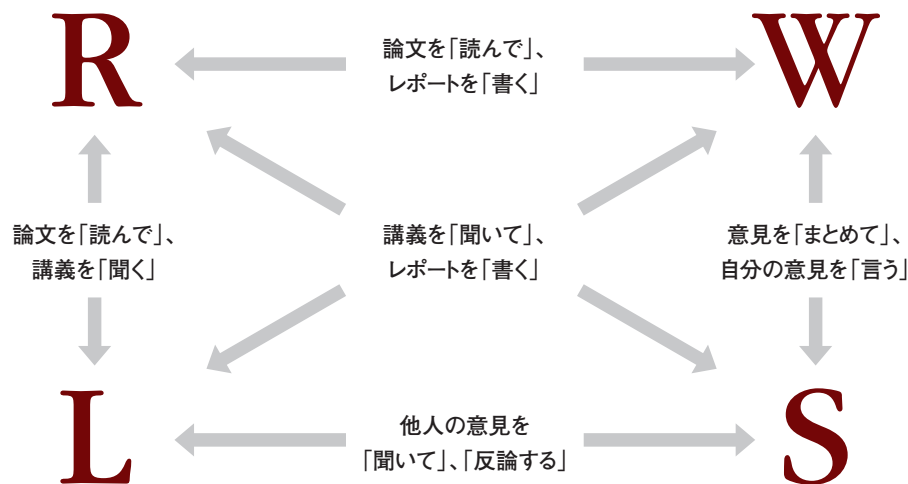
Application Essay for UK Universities

試験対策トレーニング法

英語力判定テストのTOEFL®と大学進学適性テストのSAT®。これらの試験で9割を獲得しなければ、名門校への合格はおぼつかない。それには小手先の試験対策では不十分。英語の4技能を高めることはもちろん、ネイティブにも匹敵するほどのコミュニケーション能力を磨く必要がある。深く速く思考する力と豊かな感性を早い時期から鍛えよう。

英語4技能

海外のトップ大学の講義を理解し、ついていくには、英語4技能だけではなく各技能をリンクさせた力が必要になる。英語の論文を読んで講義を聞いたり、講義を聞いて他人の意見に反論したり、テキストを読んでレポートを書いたりする力が必須になります。そのため、日々の生活の中で、英字新聞、興味のある分野の論文や雑誌等英語の文献に触れ、意見をまとめたり、伝えたりするトレーニングをしていくと良い。



Thinking & Feeling

思考を深め、感性を磨くトレーニング

「TOEFL®で100点」の目標に手が届いても「SAT®9割」の壁はまだ越えられない。次の高みに到達するための決め手、それが「思考力」と「感性力」の底上げだ。

Thinking

速く深く、 英語らしく考える力

日本語で考え、それを英語に置き換えて書いたり話したりするのはニュアンスの違いを埋められず、アウトプットにも時間がかかる。英語で考え、そのまま表現する力をつける必要がある。

Feeling

言葉を味わい、 感じとる力

ネイティブと対等に渡り合えるようなコミュニケーション能力を身につけるには、言葉の微妙なニュアンスや行間を読む力、いわば文学を味わうような感性と、それを表現する能力が必要だ。

ココを磨く！

発想の転換で「英語脳」をつくる

日本語と英語では、物事を考えるときの言葉の順序が違う。例えば、日本語では「のどが渴いた」から「水が飲みたい」と発想する傾向にあるが、英語では逆に「水が飲みたい」と目的が先に立ち、理由「のどが渴いたから」は後ろにまわる。この語順を常に意識した言葉選びを心がけることが大切。

ココを磨く！

想像力と語彙力をきわめる

同じ単語やフレーズでも、使われる状況によっては何通りにも意味が違ってくる。それらを感じとり、使い分けるためには大量の英文にふれ、読み、書き、話し、書く練習を毎日欠かさないこと。まずイメージを思い描き、それに合致した単語を探して表現する。そのためにも膨大な語彙を蓄えたい。

SVOCM Training

得点力を高める5つの特訓ターゲット

思考と感性の力を高めるものは、的を射たトレーニングと目標設定である。5つのポイントを常に頭に置いて、たゆみなくメリハリのある学習を続けたい。

S

Speed

「速さ」を追求する

スピードは高得点への最大の武器。常に「倍速」を意識し、素早く考え、理解し、アウトプットする訓練を。ただし、スピーキングではジョギングするように緩めの速さで、よどみなく話すのがコツ。

V

Vocabulary

「語彙力」を伸ばす

ThinkingとFeelingの土台となり、速さを支えてくれるのが確かな語彙力。SATで満点近くに到達するには、2~3万語の知識が必要だといわれる。熟語・慣用語も忘れずに。

O

Organization

「構成力」を高める

単に文法力ではなく、英文の構造、文章構成に対する理解を徹底して深める。全体構成がわかれば、次に現れる言葉の意味合いを先読みして、速く深く理解することができる。

C

Concentration

「集中力」を磨く

TOEFL®もSAT®も数時間におよぶ長丁場。これを持ち切るには、緩急メリハリのある集中力が必要。日頃の勉強でも、適度にリラックスを織り込んだ生活を心がけること。

M

Method

「方法論」を知る

高得点をマークするには、それなりの試験の受け方や答え方のテクニック、また普段の勉強法、考え方のコツがある。愚直に練習を繰り返す、その勘どころを体得しよう。

Preparation for the Exams

TOEFL® Test TOEFL®の基本対策

英語力判定基準の国際スタンダード

世界130か国10,000以上の大学・大学院が留学生の入学審査に用いる国際的なテスト。インターネット受験によるテスト(iBT)で英語コミュニケーション能力を測る。毎年複数回実施。スコアは2年間有効。

セクション／配点	出題内容・時間	基本対策
Reading 30点	【問題文】3～4パッセージ 【設問数】各10問 【時間】54～72分	1分間200～400語を目標に、倍速を意識して速読速解の力を鍛える。学術的な長文を毎日欠かさず読むと同時に、小説や雑誌にも親しみ「ネタ」を仕入れることが大切。
Listening 30点	【講義】 【問題数】3～4題 【設問数】各6問 【会話】 【問題数】3～4題 【設問数】各5問 【時間】41～57分	対策の要は3つ。①就寝前に自分のレベル以上の英文を必ず聞く。②1～3分の短い英文を聞き、シャドーイングをする。③短いセンテンスを3段階の速度で何度も繰り返し聞く。
Speaking 30点	全体的問題数：4問 【Independent Tasks】 【問題数】1問 【Integrated Tasks】 【問題数】3問 【時間】17分	スピーチによく見られる決まり文句や話の組み立て方のパターンを知り、説得力を高めるフレーズを数多く覚えること。「風邪→ひどい」など単語と単語のつながりを意識し、名詞と副詞を巧みに使って話す訓練を。
Writing 30点	全体的問題数：2問 【Integrated Tasks】 【問題数】1問 【Independent Tasks】 【問題数】1問 【時間】50分	読んで聞いて書く問題では、正しく理解しまとめる力を、設問に答える問題では自分の意見を書き表す力をつけること。5～8分でアウトラインを組み立てるトレーニングを。

Key for Success

TOEFL®で高得点を取るために

1 問題を解くリズムをつかむ

TOEFL®は総計3～4時間にもおよぶ長丁場。出題形式や設問内容に十分に慣れておくことが大切だ。過去問題を集めたオンラインの模擬試験で問題を解くリズムをつかみ、自分の弱点を把握して早めに対策を立てよう。また、スコアは2年間有効で、このうち最も高い得点で出願できるので、本番の試験も繰り返し受験したい。

2 アカデミックな語彙を増やす

「英語で学ぶ能力」を測ることに重きを置くTOEFL®は、大学の講義やキャンパスでの会話に題材を求めた問題が数多く出される。日頃から日英両言語で学術的な文章に接し、さまざまな専門分野の知識と単語を仕入れること。ニュージーランドのビクトリア大学で開発されたAWL (Academic Word List) が役に立つ。

3 要点をメモに書き取る

TOEFL®では全セクションで試験中にメモを取ることが許されている。特にリスニングや、スピーキングとライティングの統合問題では、問題文を聞きながら重要な語句やポイントを逃さずメモに書き取ることが大切。

4 英語で要約する訓練を

試験は時間との勝負。速読速解が命だから、頭の中で英語を日本語に置き換えているようでは歯が立たない。普段から英語で読んだことを英語で書き留め、英語で聞いたことを英語で話すトレーニングを心がけたい。

★名門校の要求スコア【TOEFL®】……100 / 120(iBT)

要求スコア100はあくまでも目安。110点台にターゲットを定め、早めに対策を立てよう。

Question Typeと型を把握

TOEFL®で高得点を取得するには、単語や文法などの基礎力はもちろんQuestion Typeの把握やアウトプットの型を身につけることが大切だ。これらを身につけることで、時間配分が難しいTOEFL®において効率よく情報収集を行い問題に解答していけるスキルが身につく。

Question Typeの把握

Reading/Listening

ReadingとListeningではそれぞれ以下のKey Question Type(設問タイプ)がある。

Reading Question Types

- 事実特定 (Fact Questions)
- 事実でない事特定 (Negative Fact Questions)
- 推察 (Inference Questions)
- 語彙 (Vocabulary Questions)
- 参照 (Reference Questions)
- 言い換え・簡略化 (Sentence Simplification Questions)
- 文挿入 (Text Insertion Questions)
- 著者の意図特定 (Rhetorical Purpose Questions)
- 散文要約 (Prose Summary Questions)
- 表・グラフ参照 (Table & Chart Questions)

Listening Question Types

- 主題特定 (Main Idea Questions)
- 詳細特定 (Detail Questions)
- 目的理解 (Function Questions)
- 態度理解 (Stance Questions)
- 推察 (Inference Questions)
- 構成 (Organization Questions)
- 内容理解 (Content Questions)

アウトプットの型の習得

Speaking/Writing

SpeakingやWritingでは効果的なアウトプットをするうえで型の習得が必要になる。



トップスクールが求める基礎学力の証

大学進学に適した学力を測る共通試験。難関大学では必須のところが多い。プラクティステストなどで十分に対策をしておきたい。

【注】試験会場が満席になる時期が早まっているので、早めに申し込みをしておくこと。

【注】デジタル化により変更の可能性あり。

SAT

セクション 時間／配点		出題形式・内容	基本対策
Evidence-Based Reading & Writing (800点)	Module 1 32分／25問＋ 事前テスト2問	文脈を理解し文章を批判的に読む力など、論理的思考力を試す。 【Passage-based Reading】読解問題	出題される英文の論理構成や、文中の各パート間のつながりを深く読み取る力、主張の根拠を探す力などが求められる。精読・速読の訓練を積むと同時に、改訂版から出題される分野がより幅広いトピックをカバーするようになったため、さまざまな分野の英文に慣れること。また、表・グラフなどのデータ付きの英文にも普段から慣れておきたい。また、Adaptive Design Testになり、Module1の出来次第でModule2で出題される問題が変化するため、文中の語彙の、文脈の中で意味を把握する力などは引き続き求められるので、語彙力の増強もおろそかにしないこと。選択問題では、文法や文体の知識、簡潔な表現、文をつなぐ接続詞、フレイズや(セミ)コロンなども含めた句読点の用法に関する理解などが問われる。各知識の習得はもちろん必要だが、さらに、音読などを通じて日常から英語のセンスを磨くこと。
	Module 2 32分／25問＋ 事前テスト2問	Readingの文章が短くなり、短文1つに対して1つの問題という組み合わせで出題される。また、表・グラフなどデータを含んだ英文も一部出題される。より適切な英文を作成する力や、文章を論理的に構成する力を測る。ライティングでも、表・グラフなどデータを含んだ英文も一部出題される。 【Multiple Choice】選択問題	
Mathematics (800点)	Module 1 35分／20問＋ 事前テスト2問	四則演算や代数、幾何などに関する基本的な処理能力を問う。 【Multiple Choice】選択問題	数学の比重は高いため、確実に得点できるようにしておきたい。日本の中学から高校程度の問題レベルだが、即答できる設問は少なく、問題文の正確な読み取りがより必要。デジタル版では、全てのセクションで計算機の使用が可能だが、数学用語は英語で必ず覚え、満点を目指す。
	Module 2 35分／20問＋ 事前テスト2問	【Student-produced Response】記入問題 ※全てのセクションで計算機使用可	

★名門校の要求スコア[SAT®] …………… **1500** / 1600 (SAT)

Subject Testsはほとんどの受験者が得意科目を選択するので、受験科目はすべて満点(800点)を目指したい。

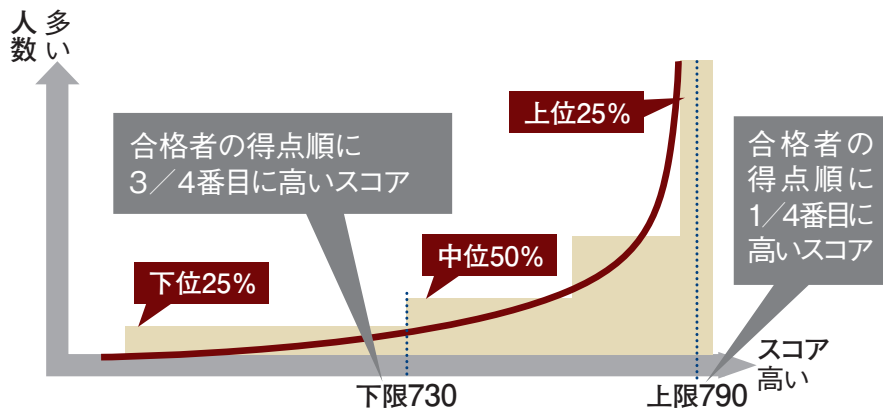
SAT®スコアの上限・下限について

College Boardが公表している、現時点で予測される来年の入学審査合格者のSAT®スコアは、成績中位50% (Middle 50% of First Year Students) に位置する人の上限値と下限値で示されることが多い。つまり、上位合格者25%と下位合格者25%をあらかじめ除外し、残った中位クラスの最高スコア(上限)と最低スコア(下限)によって、セクションごとの平均的なスコアを表すのである。

例えば、ハーバード大学の場合、Evidence-Based Reading & Writingの上限スコアは790、下限スコアは730だが、仮に合格者が1000人いるとして、250位で合格する学生の得点が790、750位の得点が730と予想されることがここからわかるのだ。

したがって、必ず730点を取らなければ合格できないわけではない。上限・下限のスコアはあくまでも合格への目安として考えよう。

◎世界トップ大学合格者のSAT®得点分布図の例(推定値/Reading & Writing)



Key for Success

SAT®で高得点を取るために

1 受験テクニックを知る

SAT®の選択問題では誤答は減点されないの、できるだけすべての問題に解答することを心がけよう。

2 「読解力・速読力」を磨く

個人差はあるが、SAT®においても日本人は他のセクションに比べてReading Testの得点率が落ちやすい。デジタル版に改訂され、各パッセージにつき1問のみ出題のため、従来と比べて各パッセージをより簡単に、より早く読み解くことができるようになった。ただし、SAT®のリーディングが「Evidence-Based (証拠に基づく)」と称されることから覗えるように、「根拠を探す力」が問われる。また、難解な語の意味よりも、複数の意味を持つ平易な語が、与えられた文脈の中でどの意味を表すかなどを問う設問が出題されるので、図表問題も含めて、サンプル問題などでさまざまな文章を速く正確に読む訓練を積んでおこう。

3 「文法力・ライティング力」を磨く

Writing and Language Testについては、文法・語法や句読点などの知識を磨いておくことがポイント。ただし、単なる知識としてだけではなく、その知識を踏まえて、英文を正確に書く訓練を積んでおく必要がある。Reading Testと同様、図表問題にも慣れておきたい。

4 受験時期にもストラテジーを

SAT®でもTOEFL®と同様に、スコア・チョイス(複数回受験した場合、受験者が最も高いスコアだけを選んで志望校に提出する形式)が導入されているものの、依然として「各セクションの最高得点を見たいので、すべての受験結果についてスコアを送付してほしい」としている大学も多い。十分に実力をつけてから受験するのが得策だ。

Scholarship / Financial Aid

奨学金について

近年、海外大学進学において様々な奨学金が設けられている。Scholarship という優秀な学生に給付される返済不要の奨学金や、Financial Aid と呼ばれる家庭の収入に応じて学費の補助を行うものもある。資金力のあるアメリカの私立の大学は、優秀な学生には奨学金を多く出してくれることで有名だ。しかし、奨学金を取得するのは簡単なことではない。

奨学金は、「返済する奨学金」と「返済不要の給付型奨学金」に分けることができる。「返済する奨学金」とは、金融機関、日本学生支援機構、日本政策金融公庫などから教育ローンを組む形で利子をつけて分割払いで返済をしていく。「返済不要の給付型奨学金」は下記の3つに分類される。

- 1 国、都道府県、市区町村が給付する Scholarship
- 2 企業、財団が給付する Scholarship
- 3 大学が給付する Scholarship と Financial Aid

Scholarship 取得をするために必要なこととは一番大切なことは、その大学に入りたいというパッションである。審査の基準には、学校の成績、英語力、課外活動なども入ってくる。しっかりとした志望理由、将来のポテンシャルなどがチェックされる。

奨学金の例

◎柳井正財団海外奨学金

米国・英国トップレベルの教育機関への進学を志す日本人学生を対象に、4年間（米国）、又は3年間（英国）の授業料、教材費、保険料、寮費等、就学のために大学より請求される費用を支給する（40名程度）。
<http://www.yanaitadashi-foundation.or.jp/scholarship>

◎江副記念財団奨学金（学術部門）

海外の大学・大学院等への進学希望者を対象に、年額上限 1000 万円支給（8 名程度）。
<http://www.ezoe-mf.or.jp>
info@recruit-foundation.org

◎笹川平和財団スカラシップ

財団が指定する米国・英国の大学への入学許可を得た者で、秋に第1学年への入学を目指す者を対象に、4年間（米国）又は、3年間（英国）の奨学金を支給する（50名程度）。
<https://scholarship.spf.org/>

◎孫正義育英財団奨学金

高い志と異能を持つ若者への支援を目的に、留学・研究等において生じる学費や生活費を支給。支援内容・金額・給付期間は選考過程で個別に決定（40名程度）。
<http://masason-foundation.org>

★グルー・バンクロフト基金による奨学金もある（p. 9 参照）

Getting a job

就職活動について

私たちが海外進学サポートをした生徒の約半数が現地の大学院や現地企業もしくは日系企業の海外支社に就職する。残りの半数は、日本に帰国し外資系企業や日本のグローバル企業に就職する。また、若干だが、他の国で活躍をしたり、自分の会社を立ち上げる卒業生もいる。しかし、海外大を卒業したからと言って就職が簡単であるわけではない。大学在学中にしっかりと学び、課外活動やインターンなどの経験を積むことも大切だ。就職活動では、大学で何をやってきたのかが問われる。

海外大学では、各国のリクルーターたちがグローバル人材を探している。大学や都市部では様々な就職フェアが開催される。下記は、日本企業が多く参加するフォーラムで毎年 1 万人が参加する。ライバルたちに差をつけるため 1 年生から顔を出す学生も少なくない。

ボストンキャリアフォーラム

2022年度は、世界最大の日英バイリンガルのための 就職・転職イベントをボストンで開催！

企業の担当者に直接質問できるライブセミナーや、内定まで出る可能性のあるオンライン面接など、就活のどの段階の方でも活用できるイベント。

2022年参加企業一部抜粋

アクセンチュア、APPLE、アマゾンジャパン、伊藤忠商事、資生堂、住友商事、住友林業、SEGA、ソニーインタラクティブエンタテインメント、ソニーグループ、ソフトバンク、チームラボ、TBS、デロイト、東京海上日動、日本銀行、日本財団、Nintendo、PwC、野村証券、マッキンゼー、三菱商事、三井住友銀行、三井物産、三菱 UFJ 銀行、バンクオブアメリカ、ボストンコンサルティンググループ、モルガンスタンレー、USJ、楽天、リクルート…など

Harvard, Yale, Princeton & 東大

自分を知り表現するそのプロセスが 未来への道しるべに

柳津聡さん

灘高等学校卒

合格校 ▶ ハーバード大学／
イエール大学／
プリンストン大学／
東京大学文科一類
進学先 ▶ ハーバード大学

高2から準備スタート目標と計画をしっかりと

—— 海外進学を考えはじめたのはいつですか？

海外在住経験もなく、英語を学びはじめたのも中学1年生からです。そんな私が海外進学という選択肢を知ったきっかけは、中学2年のときに同じディベート部に所属していた先輩が米国の大学に合格したことでした。そこから漠然と米国大進学を検討しはじめ、海外の模擬国連や米国大のサマースクールに参加するなかで、同年代の優秀な人材が世界から集う米国大の環境に魅力を感じました。最終的には、高校2年の夏に日米併願を決めました。

—— 進学準備はどのように進めましたか？

海外進学を決断する前から、自らの興味分野である外交に関するニュースや文献に日常的に英語で触れ、楽しみつつ英語力を培いました。中高時代は主にディベート、模擬国連、生徒会に取り組み、全国大会や国際大会に出場しました。また、国際政治への関心を生かし、シンクタンクでインターンをしたり、外務省発行雑誌の論文コンテストで高校生初の最優秀賞を受賞したりしました。課外活動を行う際に受験を意識することが問題とは感じませんが、結局は自分が関心を持てる活動に取り組むのが良策だと思います。テスト類に関しては、中学の頃からベネッセのGlobal Learning Center (GLC)のオンライン講座で、TOEFL®およびSAT®(高2から)の勉強を始めました。GLCの講座は英語学習のよいベースメカになりました。高2の10月にSAT® Reasoningを初めて受け、高3の5月に再度受験して終了。SAT® Subjectは高3の6月にMath 2とPhysicsを受験しました。SAT®は公式ガイドの模試とKhan Academyの練習問題を反復演習することで、問題と解法をパターン化し、安定してスコアが取れるようになりました。これらのテスト類はほぼ足切りのようなものと考え、高3の夏前にテスト受験は終わらせ、エッセイに集中することにしました。

エッセイは高3の夏前からトピックを検討、8月から本格的に書きはじめました。9月から早期出願のための個別大エッセイを開始し、締め切りに間に合わせることができました。その後は、主に通常出願のための個別大エッセイ執筆が続きましたが、早期出願をした大学に運よく合格したこともあり、12月終盤の負担は相対的に少なく済みました。

東大受験の対策ができるようになったのは年始からですが、課外活動で培った英語力や社会に関する知識で無事乗り切ることができました。総じて、高2の夏から月ごとの目標をしっかりと決め、計画立てて駆け抜けた受験プロセスでした。

主観と客観のバランスで自分という人間を表現

—— 進学準備を進めるうえで苦労されたことは？

共通願書のパーソナルエッセイの題材がまったく定まらずに苦労しました。最終的に10の異なる題材について草稿を書き、8つ目のトピックを本番に用いました。8月中に書いたエッセイはほぼ受験で使用せず、秋には焦ることも多々ありましたが、納得がいくまで悩み続けてよかったと思います。

また、高3時はエッセイ、テスト類、課外活動、奨学金といった心配事が多かったので、休息をしっかりと取って自分を追い詰めすぎないように努めました。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

アプリケーションのそれぞれの要素でどのような自分の側面を見せているか、という各要素間の役割分担が心がけました。活動歴で述べた内容を単に繰り返すのではなく、そこから得た成長や見識をどう他の場面で生かしているか、その活動の裏にはどのような苦労があったのかなど、自分の成果をcontextualizeするようなストーリーがエッセイや推薦状で述べられていると、他の志願者との差別化につながります。

このように、僕はアプリケーションを俯瞰的・客観的に考える傾向がありました。しかし、最も重要な共通願書のパーソナルエッセイには、「他人が何を言おうとこれが自分だ」という強い感情がこもったエピソードを選びました。この主観性と客観性のバランスが自分という一人の人間を書類上で表すうえで大事だったと思います。

—— Route Hに入ってよかった点は？

私は関西に住んでいたため、主にSkypeを用いてエッセイのアドバイスを受け、出願締め切り直前には上京して対面で指導を受けていました。Route Hの講師やスタッフの方は妥協することなく、何十回もエッセイの添削をしてくださいましたし、そのアドバイスの中には大学合格だけでなく、生徒の将来を思ってこそその言葉も多くありました。また、同じ挑戦をする仲間と支え合えたことは大きな励みになりました。彼ら・彼女らとの縁をこれからも大事にしていきたいです。

理論と実践の両輪で国際政治を追究したい

—— 後輩へのメッセージをお願いします。

アプリケーションへの向き合い方に絶対の正解はありません。同じ大学に合格した生徒でも工夫した点は異なります。これを読んでいる皆さんも、できるだけ多くの合格体験談を読んで、自分の境遇に合いそうなものを参考にすればよいと思います。私にとっては、海外受験の核はいかに自分自身を表現するかを突き詰めることでした。自分をワクワクさせるものや、成し遂げたい夢、忘れられない記憶などに向き合い、それらに投影された自分だけの色を探していく。その過程で得られた気づきは、出願が終わった後も将来の道標になるでしょう。幸運をお祈りしています。

VOICE

Global Learning Center × Route Hで合格した先輩の声

Harvard, 東京外大、慶応 & 上智

強く、ブレない、
粘る気持ちで最後まで突っ走れ！

佐野月咲さん

筑波大学附属高等学校卒

合格校 ▶ ハーバード大学 / 東京外国語大学 /
慶應義塾大学経済学部 /
上智大学外国語学部英語学科 /
国際基督教大学

進学先 ▶ ハーバード大学

アイスホッケーでいざ、ハーバードへ

—— 海外進学を考えはじめたのはいつですか？

東京生まれの東京育ちで、留学経験もなく、高校2年の冬まで海外進学という選択肢すら知らなかったし、知ろうとも思っていませんでした。その高校2年の12月のことです。1年のとき初めて選出されたアイスホッケーU18日本代表メンバーから落ち、ホッケーをプレイしていく未来を考えたとき、海外に出るという選択肢が初めて現実のものとして見えてきました。学問で知られているハーバードやイェールといった大学がスポーツでも名門であることを初めて知り、どのくらい大変かもわからないままアイビーリーグでプレイすることを目標にしたのが始まりでした。

—— 出願準備はどのように進めましたか？

主に、①アイスホッケーのチームに売り込み、アスリートとして入学を決めることと、②TOEFL®、SAT® Subject Test™で高得点を取ることに時間をかけた1年間でした。

アメリカのVarsity Sports(大学スポーツの代表チーム)では、コミットメントといって、一般の出願前から入学が決まっていることが多く、特にアイスホッケーは人気なので、Grade 9(日本の中学2年)からコミットしている人もいます。そのため、私が高3の春にアイビーリーグ各チームのコーチを訪ねたときは、次の入学年度とその翌年のロスタースポット(出場登録選手)はほとんど埋まっていました。

アイスホッケーをプレイできなければ元も子もないので、1年入学を遅らせることも視野に入れ、自分が出場した試合のビデオを送ったり、テストスコアを送ったりしつつ、7月にはハーバードとプリンストンのアイスホッケーキャンプに参加。また、たくさんの大学のスカウトが集まる大会にも出場しました。そのハーバードのサマーキャンプで、コーチ、スタッフ、雰囲気のすべてに魅了され、身の丈も知らずに「自分にはこしかない」という思いが芽生え、何としてでも入ると決意したのです。

出願の意思を固めたのが高3の4月、そこからTOEFL®とSAT®ともに準備を始め、要求レベルのスコアにまで上げるのにラストチャンスまでかかりました。エッセイを本格的に書き始めたのは9月ごろです。

エッセイを工夫、文武両道を打ち出した

—— 準備で苦労されたことは？

SAT®は6月から1月まで計4回受け、最終的には最初のスコアから150点伸びました。最終スコアも決して十分なものではありませんでしたが、毎回着実に伸びていったのはプラスに働いたと思います。ただ、TOEFL®には苦戦しました。6月の初受験で80点。ハーバードの早期出願では100点に届かず、通常出願前のラストチャンスでやっとの100超えでした。TOEFL®を受けた回数は誰よりも多いと思います。Route Hで教えてもらった方法でリスニングとスピーキングを強化できたこと、最後まで粘ったことがよかったと思います。

エッセイは、今まで英語でしっかりと書いたことがなかったのですが、何度も何度も粘り強く教えていただき、最終的には自分の中の最高作がいくつかできたと思っています。

—— 願書全体で心がけた点を教えてください。

私の場合、自分の推しポイントがアイスホッケーに偏っていたので、他のイメージを伝

えるように心がけました。アカデミックな面、文化的な面が伝わるような構成です。どのエッセイをどのトピックで書くかを考えるだけでも、十分に願書のイメージが変わると思います。

覚悟ある前進で大きく拓けた世界

—— Route Hに入ってよかったことは？

何も知らない、経験もない私をゼロから育ててくれた場所です。Route Hの仲間と出会うことで、大きく世界が広がりました。今まで自分が経験したことのない世界を見ている人がいる。こういう人材が世界で活躍するんだ、とその価値観やあり方にとても刺激を受けました。出願日が近づき、一人ひとりにかかるストレスが増す中でも、同じ空間で意見を出しあい、言葉を交わし、家族のような感覚で過ごせたことが、この過酷な出願時期を私自身が楽しめた大きな要因だったと思います。

また、米国受験について何も知らない私に基礎から教えていただき、エッセイだけでなく、推薦状も、課外活動のことも、何から何まで相談させてもらいました。些末なことも親身になって考えてくれるので、本当に不安要素がなくなっていました。それに加え、たびたび指導に来てくれる先輩方からいろいろな話が聞けて、具体的なイメージをつかむこともできました。

—— 後輩へのメッセージをお願いします。

海外の大学に進むことにはそれなりのリスクも伴い、自分も家族にとっても覚悟が必要だと思います。同じ場所を目指す仲間も、持っているものはみなバラバラで、自分と比べられるものなんて1つもありません。自分自身をしっかりと見て、自分の道を信じて、楽しんで進んでいくしかないのです。気持ちだけで何とかなるとは言いませんが、最後に自分を助けてくれるのは、強く、ブレない、粘る気持ちなのだと思います。

恥をかいてもいい、失敗してもいい、とにかく進めなきゃ！今は失敗だらけでも、ビリギヤルみたいになってやる！——私にとっては、そう思っていた1年です。今を楽しんで、出会いを大切に、まわりの人への感謝を胸に、突っ走ってください！

VOICE

Global Learning Center × Route Hで合格した先輩の声

Columbia, U Penn & U Michigan

地方公立高校から、GLC+Route Hを 活用し、IVYリーグ2校合格

谷口友哉さん

愛知県立西春高校卒

合格校 ▶ コロンビア大学 /
ペンシルバニア大学 /
ミシガン大学

進学先 ▶ コロンビア大学

高3でも積極的に課外活動に取り組む

—— 海外進学を考えたきっかけは何ですか？

高2のAIG高校生外交官プログラムです。出会った仲間の様々な興味や考えに刺激される日々を過ごし、大学は多様性溢れる環境で学びたいと思いました。柔軟な教育、英語を話す環境、自己主張が求められる文化にも魅力と成長の機会を感じ、米国受験を決めました。

—— 進学準備はどのように進めましたか？

高2の秋から本格的に海外受験を始めました。10月にベネッセのGlobal Learning Center(GLC)に入り、そのおかげで、高3の5月までにSAT®やTOEFL®で満足する点数

を取れました。今まで課外活動も書道と高校生外交官プログラムだけだったので、高3に入ってからアジアサイエンスキャンプや「知の探究講座」など、積極的に校外プログラムに参加しました。これができたのも早期の内にSAT®やTOEFL®を終えることができたからだと思います。高3の半ばからは奨学金、Early、UC系、Regularと、目の前にあることに一つずつ取り組んでいきました。学校では国内に向けて、家ではアメリカに向けてと場所に応じてやることを切り替えるようにしました。

情報不足を痛感し、早めに情報収集を行う

—— 進学準備を進めるうえで苦労されたことは？

地方在住ということもあり、必要な英語書類からCommon Applicationの埋め方まで知らないことだらけでした。調べたり、Route Hのスタッフの方より教えてもらった情報を自分の中で整理して、家族や先生方に説明、お願いすることを繰り返しました。周りも初めての海外受験にも関わらず、自分の進路に理解を示してもらい、最後の最後まで温かくサポートして頂いたことがとても有難かったです。早めの情報収集、また家族と学校との情報共有は両方ともとても大切です。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

最終的に自分が納得した状態で出すということを大切にしました。そうすれば結果がどうであろうと後悔することはないと思ったからです。自分が最も力を入れていたエッセイのテーマがなかなか決まらず、出願直前の数日間で8回も題材を変えました。結果的にそのエッセイを出した大学には落ちてしまいましたが、自分の中で考えぬいた末にたどり着いた方向性だったため、気持ちよくその結果を受け止めることができました。

—— Route Hに入ってよかった点は何ですか？

まずは共に海外進学を目指す仲間です。年末の大変な時期に、話せる友達がいなかったのは本当に心強かったです。また私は愛知に住んでいたため、実際に東京に行ったのは2回だけですが、Route Hで過ごした数週間が一番エッセイ執筆に打ち込むことができました。もちろん、志望校決定までのサポートやエッセイ指導もなくてはならないものでした。

Stanford, Wellesley & Seoul National U

地方の高校から久々のスタンフォード合格 SAT®は一挙に200点以上アップ

黄允珠さん

九州学院高校卒

合格校 ▶ スタンフォード大学/
ウェルズリー大学/
ソウル大学

進学先 ▶ スタンフォード大学

エッセイは出願直前まで書き直しの連続も何とか提出

—— 海外進学を考えたきっかけは何ですか？

高1の時に担任の先生に勧められ応募した県のプログラムで、県庁の職員の方から海外大学を勧められたのがきっかけです。幅広い分野をとことん追求できるリベラルアーツの教育と世界中から集まった優秀な学生と共に勉学に励むことができる環境に魅力を感じました。

—— 進学準備はどのように進めましたか？

海外大学進学を考え始めたのが高1の冬で、実際に決めたのが高2の夏でした。海外大進学を決めてすぐにSAT®の勉強を始めましたが、最初は想像以上に点数が低く、一年

くらい伸び悩みました。しかし、コツコツと対策することでアーリー出願前には200点以上伸び、目標以上のスコアで出願することができました。SAT® subjectはMath 2とChemistryを高3の6月に受験終了。課外活動の面では、スピーチやボランティア、法律事務所でのインターンなど、自分が興味のある活動をするという事を意識しました。エッセイは高3の夏に少しずつ書いてはいましたが、エッセイ執筆を本格的に始めたのは9月末です。最初は何を書けばいいか、どのように書けばいいかも分からず、書いては消しての繰り返しでした。受験直前にエッセイのトピックを変えた時は焦ることもありましたが、それでも自分の満足するまで悩んで良かったと思います。

エッセイでは経験をどう活かすかも述べ、 ポテンシャルをPR

—— 進学準備を進めるうえで苦労されたことは？

海外大進学を決めたのが比較的遅かったため、テストのスケジュールが大変でした。夏に韓国の大学の出願準備と課外活動で勉強する時間をなかなか確保できなかったため、エッセイと並行してSAT®をアーリー出願ギリギリまで準備していました。高3の秋くらいからはエッセイに集中することができるよう、その前に出来るだけ早めにテストなどは終わらせておくことが海外大受験成功のカギだと思いました。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

願書の一つ一つで自分のどういう面をアピールしたいのかを考えるようにしていました。海外大学は生徒を総合的にみて判断するため、願書全体を通してどれだけ多く自分の魅力を伝えることができるかが大事だと思います。また、エッセイを書く際に、経験から学んだことを書くだけで終わらせるのではなく、どのように活かしたいかなどを述べることで、将来のポテンシャルをアピールすることを心がけました。

—— Route Hに入ってよかった点は？

Route Hの講師やスタッフの方々が一人一人に寄り添い、最後の最後まで何度もアドバイスをして下さったことです。また、一緒に受験期を乗り越えるだけでなく、一生仲良くしたいと思える仲間に出会えました。Route Hはすべてのことに全力投球する仲間の頑張りや互いに認め合い、また高め合う雰囲気に溢れていると思います。

VOICE

お茶の水ゼミナール海外大併願コース × Route Hで合格した先輩の声

Harvard, Yale, Williams

楽しんでほしい

自己を知る者だけに見える「開かれた世界」

石井秀俊さん

筑波大学附属駒場高等学校卒

合格校 ▶ ハーバード大学／
イエール大学／
ウィリアムズ大学 ほか

進学先 ▶ ハーバード大学

現地訪問で決意した刺激に満ちた米国大進学

—— 海外進学を考えはじめたのはいつですか？

高校2年の夏休み、まだ国内大を目指していたとき、毎日同じような問題を解き、すでに身につけた知識を再復習するような日々を続けざるを得ず、何か物足りなさを感じていました。そうしたなか、Route Hの尾澤さんと話す機会があり、海外大学進学という選択肢を意識するようになりました。消極的な理由で海外進学をするのはどうかと考え、そもそもなぜ大学に行くのかなど、自分に問うべき問いを考えはじめました。

—— なぜ海外大進学を決めたのですか？

上記のような経緯があり、高校2年の終わりに大学訪問に行きました。寮で交わされる

背景のまったく異なる学生同士の濃密な会話や、講義や議論で学生と真剣に向き合うことによって学問の面白さを伝えようとする教授たちとの出会いがあり、海外大を目指すことを決意しました。その頃、メルボルンのシンクタンクが書いた都市と住人の精神状態の関係についての論文と偶然に出会い、都市学に強く興味を持つようになりました。学際的なアプローチが必要な分野なので、海外進学への気持ちがさらに強まりました。

自分とは何者なのか自問自答で手にした成果

—— 進学準備について聞かせてください。

TOEFL®やSAT®はテスト形式に慣れるのには時間がかかりました。しかし、6～8歳までアメリカに住んでいたことや、国内大学のために文法や語彙をしっかりと勉強していたこともあり、比較的少ない努力で問題のない点数を取ることができました。

一方、漠然と専門職に就こうと考えていたこともあり、将来のことや、自分とは何かなどの問いを考えるのに大変苦労しました。それまで行ってきた課外活動の裏にはどのようなモチベーションがあったのかを整理し、その過程で自分という人間がどのように変わったのかを考えました。自分の中の普遍的な部分についても考察しました。

このような自問自答の日々の成果として、なぜ自分が都市に興味を持ったのかと言語化できるようになりました。自分の興味が明確であったことに加え、自分の軸が形成されつつあったこともあり、高校最後の1年間に行う課外活動は自然と決まりました。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

アメリカの大学は“holistic”に自分という人間が見られると聞いていたので、自分の全体像がどうしたらAO(Admission Officer)に伝わるのか真剣に考えました。その結果、学校の成績や推薦状、APテストなどで伝わる自分の学業面についてはエッセイでは一切触れず、自分の他の側面を積極的に出しました。

—— Route Hに入ってよかった点は？

毎日のように仲間と対話をする中で、かけがえのない友情を築くことができましたし、自己の発見という、迷い込んでしまうような冒険の中で、一步一步確実に進むことができました。また、海外大進学という日本の高校では一般的ではないものを身近に感じ、自分が経験したことがない考え方にも触れる機会を先生方が与えてくれました。現在の「自分」はRoute Hの仲間や先輩方、先生方なしには存在しません。

世界一恵まれた環境で学問を究め、成長したい

—— 4年間の大学生活、どう過ごしますか？

学業面では、都市についての授業をHGSD(Harvard Graduate School of Design)で取り、さまざまな側面から多様で複雑な都市について考察するとともに、これまで触れたことのない分野の授業も積極的に取って視野を広げたいです。分野や進みたい道によっては高度な専門性が欠かせない場合もあると思いますが、専攻分野を決めたら、そのrequirement以上にその分野を深めるのか、あるいは未知の他分野の考え方・フレームワークに触れ、違う観点から自分の専門を見る努力をするのか、について真剣に考察する必要があります。现阶段では後者にするつもりです。

授業外では、高校時代と同様、研究をしたいと考えています。人間がどのように知を進歩させてきたのかを垣間見ること、つまり人類の根本的な原動力を知ることは、将来研究者になるか否かに関わらず、重要なことだと考えています。ハーバードには世界中から面白い研究をしている教授が集まっています。その指導が直接受けられる環境を積極的に利用して、自身を最大限に成長させていきたいです。

恵まれた環境にいる者の義務として、世の中への還元もしていきたいです。Public Serviceが盛んなハーバードにおいて、同志を積極的に見つけ、一人では解決が難しい大きな課題に向かって皆で果敢に挑戦し、よりよいコミュニティを築きたいです。

—— 後輩へのメッセージをお願いします。

何事を行うにしても、自分の興味や信念に沿って真剣に真摯に取り組むと、興味の追求だけでなく、自己の追求ができると思います。そのような過程を経た者だけに見える「開かれた世界」を楽しめるといいと思います。

VOICE

お茶の水ゼミナール海外大併願コース × Route Hで合格した先輩の声

Yale, UPenn, Brown, Cornell, Dartmouth,
Williams, Northwestern, UCLA, U Toronto

海外大受験でのしんどさやプレッシャーは、合格するための必要不可欠なエッセンス

S.B.さん

国内インターナショナルスクール卒

合格校 ▶ イェール大 / ペンシルベニア大 / ブラウン大 / コーネル大 / ダートマス大 / ウィリアムズ大 / ノースウェスタン大 / UCLA / トロント大ほか

進学先 ▶ イェール大学

高3で大人顔負けの起業家に登りつめ、仕事と両立しながら海外大を受験。

—— 海外進学を考えたきっかけは何ですか？

僕は、アメリカと日本のハーフで、3歳の時からインターナショナルスクールに通っていたため、小さい頃から海外進学しか考えていませんでした。米国大に通う場合、良くも悪くも親から離れるわけですが、大学寮に入り、自分のしたいことを、友達と一緒に自由に探求できることが一番の魅力だと感じていました。国内大に進学し、自宅に帰って一人勉強することは、自分にはできない気がしました。米国のトップスクールはレベルが高いですし、自分の目標、性格、興味、専門など総合的に考えると、米国に進学するのが自分に一番合っているのではと思いました。

—— 進学準備や課外活動はどのように進めましたか？

僕は高校に進学した時から経済学、起業、政治に興味を持っていたため、主にビジネス系の活動をしました。まず、学校のビジネスクラブに入学し、積極的にイベントや大会に参加しました。高3の時、そのクラブの部長になり、クラブの部員を増やす取り組みをし、その結果、学校で一番部員数が多いクラブに成長させることができました。また、スポーツも好きだったため、秋はテニス部、冬は水泳部、春は野球部で活動しました。SAT®は、高2の夏休み中に一生懸命勉強をし、夏休み明けに一発でいい点数を取りました。また高3の夏までにビジネス大会にたくさん出て、その夏に起業をしました。高3の間は、主に会社の仕事とエッセイに専念しました。もちろん、学校の勉強を最優先にして、学業と課外活動にも一生懸命取り組みました。

「大学のため」ではなく、「自分にとって」大切なこと・ 伝えたいことは何かを明確にする

—— 進学準備を進めるうえで苦労されたことは？

進学準備で一番苦戦したのはエッセイの作成です。学校の成績、SAT®,そして課外活動は高校に入った時から努力して取り組んでいたため、あまり苦労することはありませんでした。しかし、エッセイを書く上でRoute Hの講師の方がすごく厳しく、高校生活で味わったことのないような苦労をしました。特にRestrictive Early Actionの大学に入らなかった時、1月1日の締め切りに間に合うように、毎日朝から晩まで何校ものエッセイを書きました。精神的にも体力的にもきつかったですが、今から考えれば、大変有意義な時間でした。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

アメリカの大学に合格するために一番大事なものは、自分が好きな事を誠心誠意に頑張る事です。「大学のため」「大学によく見えるように」と考えて課外活動を行うと、すぐに大学側にばれてしまいます。その上、人生一度の高校生活を、信念持たずに過ごすことになってしまいます。どんなに親や友人からプレッシャーを受けても、信念を持って自分のやりたいことをやるのが、自分自身そして結果的に大学合格のためになります。「遊ぶ」という意味ではなく、思いっきり好きな科目や活動に取り組むことが大事です。

—— Route Hグループのサポートを受けてよかった点は？

Route Hのサポートで一番良かったことはエッセイの指導です。もともとエッセイには

自信がありましたが、エディターの方や先生のフィードバックは素晴らしく、とても勉強になりました。先生の指導のお陰で、一つのエッセイに何週間もかけて完璧に仕上げることができました。インタビューや課外活動のアドバイスもいただき、大変心強かったです。

Harvard, Yale, Princeton, Stanford & 東大

地方出身・純ジャパ生が、ハーバード、イエール、プリンストン、スタンフォード全てに合格

小野祐さん

甲陽学院高校卒

合格校 ▶ ハーバード大学／イエール大学／
プリンストン大学／スタンフォード大学／
カリフォルニア大学バークレー校／東大

進学先 ▶ ハーバード大学

多彩で光る課外活動、 エッセイは年末に集中して仕上げる

—— 海外進学を考えはじめたのはいつですか？

中学・高校の英語の先生(学年の担任でもありました)が、海外大学の受験に詳しく、中学の頃からなんとなく話は聞いていました。チャンスがあれば受験しようと思っていました。

—— 進学準備や課外活動はどのように進めましたか？

■エッセイ: エッセイに取り組み始めたのは、早期出願1カ月前の10月ごろでした。帰国子女ではなく、英語もそこまで得意ではないので、もっと早く始めておけばよかったと後悔しました。早期出願後は国内受験に集中していて、早期出願のMITに不合格となった後、レギュラーのエッセイを書き始めたのが12月25日あたりでした。そこから1週間ずっとエッ

セイを書いて過ごしました。共通テストも近づくなか、年末年始をエッセイ漬けで過ごすのは健康面でも精神面でもあまり良くなく、もっと早くやっておけばよかったと後悔しました。しかし、ルートHの先生方は年末でも丁寧に指導してくださり、本当に助かりました。エッセイについては添削だけでなく、ときどきマイケル先生や尾澤さんが関西に来られた際にアドバイスをいただけたのもよかったと思います。エッセイの内容については、課外活動の欄で詳述しています。

■テスト: 高2の12月に友人からSAT®を受けなくてはならないことを聞き、急いで調べたところ2週間後にテストが控えていたので早めに対応できそうなSubjectを申し込みました。Physics, Math1, Math2を受けて全て800点でした。1月にはTOEFL®IBTを受け、こちらは111点でした。TOEFL®については学校の英語の先生がユニークな方で、授業でTOEFL®を扱っていたので高得点を取れたのではないかと考えています。スコア開示後にマイケル先生に相談したところ、この点数で十分だとのご意見をいただいたので、TOEFL®及びSAT® Subjectはその1回のスコアを提出することに決めました。SAT® Reasoningは高3の春のテストがコロナの関係でなくなり、高3の8月が最初の受験でした。何も勉強しないで望んだところ1440点(英語640点、数学800点)だったので、さすがにまずいと思い、9・10月のテストはOfficial Guideの練習問題を解いて臨みました。9月のテストで1520点(英語720、数学800)、10月のテストで1540点(英語740点、数学800点)だったのでこれらのスコアを提出することに決めました。ちなみに、プリンストンとイエールには間違っって最初の低いスコアも送ってしまったので、受験末期に少し心配していました。

■課外活動: 高校時代は主に物理オリンピックに参加していて、国際物理オリンピックの代表(大会はコロナで中止)とヨーロッパ物理オリンピックの金メダルが大きな実績です。科学分野では、数学オリンピックで全国大会に何度か出場しているほか、2019年に中国で開催されたアジアサイエンスキャンプに日本チームとして参加しました。部活動では、中学時代にバスケット部のキャプテンとして県大会3位まで進んだほか、高校ではグリー(男声合唱)部のパートリーダーを務め、こちらは近畿大会まで進みました。他にも物理部の部長として後輩指導を行っていました。学校内では、中学で運動部会長、文化祭実行委員長を務めたほか、高校では生徒会長を半期務めていました。出願の際は、これらのことを課外活動の欄に書きました。一方で、エッセイに利用した課外活動は主に以下の2つです。

・カラスの研究: 私は小学校から中学校までの8年間カラスの研究を行っていました。この研究では科学的な観点で優れているだけでなく、社会に貢献できる(例えば私の住んでい

た市のゴミ漁り被害を激減させた、など) 研究でもありました。その点で、科学を社会に貢献させていきたい、といった文脈のエッセイで説得力のある事例になったと考えています。

・物理オリンピックオンライン交流会：2020年は、コロナの関係で物理オリンピックでもオフラインのイベントが全て中止となってしまいました。そこで、私は友人と協力して、物理オリンピックの参加者や物理オリンピックに興味を持つ中学生のためのオンライン交流サーバーを開設しました。これにはかなりの反響があり、最終的に数百人の小中高生及び大学生が参加してくれました。物理オリンピックの実績だけだとやや個人技な印象を与えますが、この活動をエッセイで紹介することで、コミュニケーション能力やリーダーシップ、フォローシップ、チームワーク、もう少し踏み込んで「他者を巻き込んで科学的なことを追求する意欲・能力」があると示すことができたと考えています。

周りのサポートを信じて 自分の最高の目標に向かって挑戦を！

—— 進学準備を進めるうえで苦労されたことは？

エッセイに苦労しました。私はスケジュール管理能力が非常に低く、かつ多くの帰国子女のように英語をスラスラと書けるわけではないので、締め切り直前にカンヅメ状態でエッセイを書くということが何度もありました。これから受験される皆さんの中で、英語でのエッセイ執筆に不安があるという方は、高1・高2でも一度実際に使われているプロンプトに従ってエッセイを書いてみて、どれくらいのペースでどれくらいの質のものが書けるのか、試してみる(自分の力を把握する)といいと思われます。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

私は留学を決めた時点で自分の願書がどのような構成になるのか大体イメージが固まっていました。つまり、物理をはじめとする数理科学への熱意を中心に、そしてその周辺で例えばチームワークやリーダーシップといった仲間を巻き込んでアクションを起こせる/起こしたいという実績/意欲を示すことで、単に「一人で難しい勉強をしている日本人」、ではない私のキャラクターを示すというものです。このような考えが明確にあったからこそ、レギュラーの全エッセイを1週間で書きあげることができたのかもしれませんが(詰め込みは良くないことですが)。

—— 海外トップ大進学を目指す高校生へのメッセージをお願いします。

海外の、特にトップ大学を目指すみなさんには、ぜひ可能な限り挑戦を続けることを心が

けていただきたいです。逆に言うと、変な戦略的思考に陥らないでほしいです。私は早期出願でMITに出願し、それは落ちてしまいましたが、レギュラーでハーバード、プリンストン、イェール、スタンフォードに合格できました。MITに落ちたときは、例えば「早期とレギュラーで合格率の変わらないMITに出すくらいだったら、早期出願の合格率の高いハーバードやスタンフォードに出しておけばよかったのでは？」と何度も思いました。しかし、早期出願でそのような安全策をとっていたら、レギュラーでの複数校合格はなかったはずで。これは結果論かもしれませんが、科学を志す者として、その最高峰のMITに可能な限り挑戦したからこそ、(その挑戦は失敗したもの) 考えもしなかった結果を得ることができました。もし早期出願でハーバードに合格したとしても、挑戦を諦めたことにきっと後悔していたと思います。そんな挑戦が可能になったのは、学校はもちろん、ルートHでのエッセイ指導等のサポートがあったからこそです。つまり、そうしたサポートがあれば、どれだけ困難な挑戦であったとしても、きっと最後には「よい」結果が得られます。今これを読んでいる皆さんはそれほどの支援を受けられる機会を得ている/得ようとしているということです。ですので、周りのサポートを信じて、自分が思い描く最高の目標に向かって挑戦して行ってほしいと思います。

VOICE

Route Hで合格した先輩の声

University of Cambridge, Stanford, Yale, Duke, 東京大学理科Ⅲ類

日米英併願で苦戦しながらも、自分にとっての正解を 導き出しIVYリーグ、ケンブリッジ大、東京理三に合格

保立怜さん

開成高校卒

合格校▶ ケンブリッジ大学／スタンフォード大学／イェール大学／デューク大学／
東京大学理科Ⅲ類

進学先▶ スタンフォード大学

海外未経験が英語スピーチコンテストを機に、 海外大進学の道へ

—— 海外進学を考えたきっかけは何ですか？

中3の時、英国スコットランドにある高校のサマースクールに参加したことです。スピーチコンテストに優勝し、副賞として1か月派遣されました。海外未経験で初めての単独渡航だったため参加するまでは不安もありましたが、世界各地から集まった友人たちに恵まれ楽しい日々を過ごしました。ファイナルディナーでは校長先生から個人表彰を受け、帰国するころにはいつか海外で学びたいという気持ちが芽生えました。

—— 進学準備や課外活動はどのように進めましたか？

中学、高校を通じて6年間、コンピュータ部に所属し、ゲーム作成や競技プログラミングを行いました。ただパソコンに向かって黙々と取り組むだけでなく、毎年秋に行われる文化祭で自分たちが作ったゲームを展示し、来場者の方々に作品を試していただくのも楽しみの一つでした。中3の夏のサマースクールで、一人で海外に行く自信がついたので、高1の夏には米

国の高校のサマースクールとデューク大学のサマープログラムに参加しました。高校では5週間、数学、経済、コンピュータプログラミングを履修し、デューク大学のプログラムでは2週間、医療ボランティアを経験しました。

提出書類は、他社とは異なる 「自分」という存在価値をアピールするもの

—— 進学準備を進めるうえで苦労されたことは？

日・英・米の併願にしました。幼少のころから医師になりたいと思っていたのですが、中学の時にAIが癌の画像診断に使われていることを知り、将来はコンピューターサイエンスと医学の2つの分野を融合した研究をしたいと考えるようになりました。国内の医学部を目指すための勉強を続けながら、CSの分野は海外の方が進んでいるため英米大学の出願の準備をはじめました。3か国の出願準備を進めるうちに作業量が普通の受験生の3倍になるという単純なことではなく、国によって受験というものに対する価値観も方法も大きく異なることがわかり、思っていた量を遥かに上回る負担がかかりました。高3時には、通っていた東大受験塾の演習を毎週受け、夏・秋の東大の冠模試をはじめとする東大型模試は10回以上受け実力が落ちていないかその都度確認しつつ、家ではもっぱら英国のPSや米国のエッセイなど海外大学出願作業に取り組んでいました。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

点数重視の日本の入試と異なり、海外大の受験においてはこれと違って定められた正解がないため、他人受けするような願書を作り上げるといっても、「これこそが自分だ」と言えるような願書を作成するよう心掛けました。また、受験におけるアドミッションオフィサーへのアピールはすべて書類上で行われるので、提出書類が出願において最も大事なので、個人で提出するものに関しては自分で責任をもってきっちり管理し、少しでもミスがないように、丁寧にじっくりと計画を立て、整えました。

—— Route Hグループのサポートを受けてよかった点は？

質問への回答やエッセイの添削が迅速だったことです。日本の大学も併願していたため限られた時間の中で海外大の出願準備を進めていましたが、困ったことがあった際に相談をするとすぐに対応していただけたのが、目下の問題解決だけでなく精神的にも大きく助かりました。また、Route Hは海外トップ大進学塾でありながらも、海外大学出願と日本の東京大学理科Ⅲ類の受験との兼ね合いについても理解があったことも大変ありがたかったです。

VOICE

Route Hで合格した先輩の声

Yale, Brown, Northwestern, Williams, Pomona, Georgetown, Yale-NUS

模擬国連＋研究＋プログラム立上げに注力。 イエール、ブラウン他、多数の大学に合格

棚澤哲さん

駒場東邦高校卒

合格校▶ イェール大学／ブラウン大学／ノースウェスタン大学／
ウィリアムズ大学／ポモナ大学／ジョージタウン大学など
進学先▶ イェール大学

模擬国連の受賞に満足せず、 研究を開始。さらに研究プログラムを立上げ

—— 海外進学を考えたいきっかけは何ですか？

中学生の頃に、親の仕事の関係でイギリスの学校に1年間通っていました。そこで進学先を自然とイギリスの大学に定めていたのですが、日本に帰ってきてからアメリカの大学も選択肢としてあることを知り、より専攻などがフレキシブルなアメリカの大学に進学したいなと思うようになりました。また、コロナ禍の中で日本の大学受験の勉強をするよりも高校3年生の年をもっと自分の興味のあることに使いたいと思い、国内大学受験はしない決断をしました。

—— 進学準備や課外活動はどのように進めましたか？

高校生活を通じて模擬国連とスピーチに取り組んでいました。しかし、高2のある模擬国連の会議で自分のこれまでの活動が少し言葉だけになっているのではないかと無力感を感じ、それから180度方向を変えて、生分解性プラスチックの研究を始めました。同時

にまた、その中で理系と文系の垣根が高いことに違和感を持ち、その垣根を取り払うことを目的とした高校生向けの研究プログラムを立ち上げました。このように自身の気づきや感情に基づいて課外活動を高校では進めていたため、出願する際にはそのストーリーが示せるようにエッセイを書いたり、他のアプリケーションの部分を埋めていました。結局出願が終わった今でも研究プログラムの運営は続けており、受験の中でも自分の好きな活動を続けられたのはとてもよかったと思います。

時間管理とエッセイに始めは苦勞するも エッセイでは自分を素直に伝えることを実現

—— 進学準備を進めるうえで苦勞されたことは？

前に書いた通り、高校3年生で課外活動に時間を多く費やしていたこともあり、時間管理に苦しみました。初めは高3としてアメリカ大学受験のタイムラインがあまりわかっておらず、エッセイ執筆などを少し軽視してしまっていた部分もあると思います。途中でエッセイの数が増えたり、僕の場合はSAT® Subject Testで苦戦したりと予想外のことも出てくるので、計画を立てるときには自分が想像しているよりもだいたい余裕を持って計画をするといいと思います。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

エッセイなどに共通することですが、自分をいかに素の状態で描けるかだと思います。アメリカの大学を受験するときに最も大切なのはユニークさです。そこで自分をよく見せようとする、または本当とは違う姿に見せようとする、その作業の段階で自分を既に存在している何かに近づけようとすることでユニークさが失われます。そのため、受験では自分の悪い面も理解した上で良い面を最大限素直に伝えることを心がけました。また、他にもエッセイはAO(入学審査官)との会話に近いものだと感じたため、AOと実際にZoomで話してみるなどして読み手を意識してエッセイを書くことを意識しました。

—— Route Hのサポートでよかった点は？

やはりエッセイ指導が一番大きかったです。エッセイをそれまで書いたことのなかったため、エッセイの基礎を1から学ぶことはとても重要でした。単にエッセイを指導してもらうだけでなく、自分について話して価値観や経験を知ってもらうことによって、よりパーソナルなフィードバックをもらうことができました。また、自身の周りには海外大学を目指している人がほとんどいなかったため、周りに同じような目標に向かって努力している友達がいることはRoute Hに入ってよかった、とても大きな要素でした。

VOICE

Route Hで合格した先輩の声

Princeton, Williams & Imperial College London

20校に出願。エッセイで苦労するも プリンストンを始め、米英トップ大に合格

黒田凜さん

広尾学園卒

合格校 ▶ プリンストン大学 /
UCバークレー /
ノースウェスタン / ウィリアムズ大学 /
インペリアル・カレッジ・ロンドン (ICL)
進学先 ▶ プリンストン大学

SAT® は早めに開始。課外活動は 物理学・生物学を中心に幅広く取り組む

—— 海外進学を考えたいきっかけは何ですか？

日本にあるイギリスのインターナショナルスクールに通っていた小学生時代は、漠然とイギリスの大学への進学を考えていました。中学受験を経て、多くの生徒がアメリカの大学を目指す環境で生活していくうちに、日・英・米の三ヶ国への進学を視野に入れるようになりました。最終的には、イギリスとアメリカの大学に併願しました。

—— 進学準備や課外活動はどのように進めましたか？

SAT®は高1の10月から受け始め、高2の10月の3度目の受験で目標スコアに到達しました。Khan Academyの練習問題やErica Meltzer著の解説本などを使って、Reading

とWritingの点数を伸ばしました。SAT® Subject Testは高2の11月にMath Level 2とChemistry、高3の8月にPhysicsを受験しました。TOEFL®は高2の11月に受けました。僕の高校はAPテストも実施していたので、高2と高3の5月にそれぞれ何科目か受験しました。高校時代は、僕が好きな物理学や生物学を中心に、課外活動を行いました。互いに自らの興味分野の授業をするゼミ形式の活動、イェール大学の生物学の講義の和訳、そしてハーバード大学で物理学のPh.D.を取得したメンターとの量子コンピュータの学習と利用に特に力を入れました。たくさんの人たちと色々な経験をしたいという思いから、科学に様々な形で関わってみることを心がけていました。他にも、ビジネスコンテストや哲学の大会にも参加しました。Route Hのサポートを受け始めた高3の6月以降、しばらくの間、良いエッセイを書く上での基礎(トピックの決め方、構成、テクニックなど)を教わりました。8月頃からCommon Applicationのエッセイを書き始めましたが、納得のいくトピックを見つけられたのは10月下旬で、早期出願にはギリギリとなりました。同時に、イギリスのPersonal Statementも書き、10月中旬に出願しました。11月はUCのエッセイ、12月はRegular Decisionの各大学のSupplementary Essayを書いていました。

より早く始めておくべきだった 大学情報の収集とエッセイ

—— 進学準備を進めるうえで苦労されたことは？

アメリカの出願校のSupplementary Essayを高いクオリティで書き切ることに苦勞しました。僕はアメリカの大学を20校受験しましたが、そのほとんどのSupplementary Essayを出願期限の1~2週間前から書き始めました。結果として書き切るのは全てギリギリになってしまいました。各大学の情報収集や各大学が求める学生像を把握することに時間がかかり、なかなかエッセイを書き始められなかったのです。今振り返れば、夏頃からこれらの情報収集をより入念に行っておけば、出願校も絞ることができ、少しは余裕ができたと思います。ひとえに僕のナマケモノな性格のせいですが、同時に窮地に立たされた時の発想力もエッセイで発揮できたので、ギリギリでこそその楽しさも感じてしまいました(決しておすすめはしません)。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

エッセイを通して自分の過去、現在、そして将来の人物像を伝えることを心がけました。過去の行動原理と現在の情熱と将来の目標の繋がりが、人間関係を通した心の機微や成長

など、様々な側面を見せるようにしました。エッセイの内容によって、論理的・感情的な語り口を使い分けたり、描いている「自分」との距離感を変えてみたり、文章の書き方も工夫してみました。また、各大学の特徴・性格によって、僕について強調することを少しずつ変えたりしていました。

—— Route Hのサポートでよかった点は？

先生と友人の存在です。クリエイティブな文章を書いた経験をあまり持たない僕にとって、良い文章の書き方をご指導いただけたことは財産となりました。先生との対話を通して、僕が本当に伝えたいことを、短く洗練された文章に削っていく引き算の時間が面白かったです。夏休み明けにRoute Hに登校可能になってからは、友人たちとエッセイを読み合ったり何気ない話をしたりして、自分のエッセイに磨きをかけるだけでなく、ポジティブな気持ちで最後まで受験に挑戦することができました。

VOICE

Route Hで合格した先輩の声

MIT, UCSD & UIUC

ロボット製作等を強みにMITに早期合格。 併せて財団奨学金も取得

長島大来さん

渋谷教育学園幕張高校卒

合格校 ▶ MIT /
UCサンディエゴ /
イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校

進学先 ▶ MIT

成果の出ない時期もあきらめず、ロボットにこだわる。 助言者を増やすことも大切

—— 海外進学を考えたきっかけは何ですか？

小学校の時から考えていたので、違う環境は面白そうだな、という当たり前の事がまずはあったと思います。また、自分がやりたい生物模倣ロボットは明確に盛んな所が分かり、それが主にアメリカの大学だった、というのも大きかったです。

—— 進学準備や課外活動はどのように進めましたか？

中学の頃から生物模倣ロボットという明確な興味があったため、ロボット製作にひたすら取り組んでいる毎日でした。また、大会、発表会などの機会があると、勝つ、というよりは、可能な限り共有する、という目的で、どんなものでも必ず参加はしていました。高2

の時に学年通信に掲載されたサイエンス・メンター・プログラムに応募したことをきっかけに、東工大のメンターの先生、JSECなどを紹介していただいたので、助言をしてもらえ
る人を出来るだけ増やす事がまず大切だと気付きました。高校の途中までは実績として認
められる事はなかったものの、自分のこだわりを信じて、カブトムシロボットでやっと明確
な結果が出ました。また、干潟でボランティアなど、ロボットとは関係がないものもするよ
うにはしました。一つの事に集中しすぎても違う視点から見えなくなるので、ロボットから
一歩離れるいい機会でした。

自分以外の人を書けそうな文章は必ず排除。 結果、個性的なエッセイが完成

—— 進学準備を進めるうえで苦労されたことは？

実際にアプリケーションを書く段階では、悩みすぎる、という畏にはまらないようにする
のが最も大変だったと思います。短いエッセイを書くとなると、どうしても細かいところに
こだわりたくなり、逆に大まかな流れが見えなくなって、文章がうまくてもエッセイ全般は
よくない、という事が良くありました。自分がどんなに好きな言い回しや内容でも、消さない
といけない時は消すことが大切だと思います。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

SAT®や成績などの絶対的な評価以外のところは、自分以外の人を書けそうな文章は
必ず排除、という目的で臨みました。こうすると、自分が書いたものを全部消すのが何回
も繰り返されたのですが、最終的にはとても具体的に個性的なものが出来上がったと思
います。

—— Route Hのサポートでよかった点は？

自分で自分のエッセイを読むだけでは、明らかな事や、逆にわかりづらい事を見つ
けるのは不可能で、これを客観的な視点からすぐ見てもらえるのが最も助かりました。これは、
アプリケーションの様々な要素をストーリー化させるという非常に大切な事につながり
ました。後、文字数制限内で言いたい事が通じるかどうかすぐにわかったので、無駄な時間
を大幅に削減できました。また、先生とは別に、海外大に出願を目指す仲間がいて話し合
えるのはとても励みになりました。

VOICE

Route Hで合格した先輩の声

Caltech(graduate & undergraduate), Stanford, Yale & Cornell

高校から米国トップ大の大学院に合格の快挙。 スタンフォードやイエールにも合格

金子生弥さん

つくば開成高等学校卒

合格校 ▶ カリフォルニア工科大学(大学院・学部) / コーネル大学 / デューク大学
スタンフォード大学 / バージニア大学 / イェール大学

進学先 ▶ カリフォルニア工科大学(大学院)

中学時代から数学の論文を書き、 高校時代は、海外大の教授とも研究を進める

—— 海外進学を考えたきっかけは何ですか？

自分の専門は数学です。数学の研究を進めて経験を重ねていく中で、日本の大学は自分
とは相性が良くないと考え始めました。主な理由は、日本には自分の専門分野における適
切な教授がいないことと、学部において専門的な研究をする制度がないことです。自分
は米国出身であるため、米国の大学で学びたいという思いもありました。中学生の頃から
専門的な論文を書き始めたため、高校から直接大学院に進学可能であると思っていました。
しかし尊敬するプリンストン大学の教授に質問したところ、学部で学問領域を広げるのも
重要とのことで米国大学の学部への入学を勧められました。よって最初は米国大学の学
部に入学した後に、その教授に師事するためプリンストン大学の大学院に進学するという
目標を立てましたが、結果的にはCaltech(カリフォルニア工科大学)からは学部のみなら
ず大学院への直接入学の許可を頂くことができました。Caltechにも自分の専門分野にお

ける極めて優秀な教授陣がいらっしゃるため幸運でした。

強みを伸ばす戦略を徹底。 SAT[®], GREの免除も追い風に

—— 進学準備や課外活動はどのように進めましたか？

高校2年生の1月からSAT[®]の勉強を始めましたが、コロナの影響で多数の米国大学はSAT[®]やSAT[®] Subject Testsを必須項目としないことが分かりました。これによりSAT[®]を受験しない方針で考え始めましたが、更にTOEFL[®]の勉強に割く時間も自分にとって有意義でないと考え、SAT[®]とTOEFL[®]が必須でなく、自分の専門分野において著名な教授が在籍するスタンフォード大学を学部の第一候補にしました。準備を進める中で最終的に第一候補としたCaltechの大学院に関しては例年GREが必須でしたが、コロナの影響で受験する必要がありませんでした。中学校・高校時代は自分が好きな数学を中心に課外活動を行いました。中学時は数学オリンピックの合宿メンバーに選出されることもありましたが、最前線の研究にはあまり参考にならないことから、その活動はやめました。中学校から高校までの間に7本の論文を執筆し、その内6本は研究者が利用するarXivに投稿して3本は一流数学誌にアクセプトされました。これらの業績から孫正義育英財団の第3期生として選出されました。財団生として選ばれたことで、米国の大学における財政的な懸念はなくなりました。結果的にはCaltech大学院での授業料・生活費は全額大学側の負担となりましたが、大きな心配の1つがなくなったことは心理的に余裕ができました。またホームページを作成するなどして自分の活動を多くの研究者に知って頂くために努力しました。コロナの影響で数学の学会はオンラインで開催されていたため、受験期間中にも週1回～2回程度のペースで参加して知識を増幅しました。これらの活動が出願する際に課外活動として重要な役割を果たしました。様々な分野の数学者に連絡するなどして、特に米国・欧州での人脈を広げることに注力しました。有名大学の教授と親しくなることによって、エッセイの話題が見つけやすくなり、更には推薦状も書いて頂きました。お世話になった米国大学の教授からCaltechの大学院を直接受験しないかとの話が出てきました。大学院に出願するためには3件の強力な推薦状が必要であったため、多数の数学者と深い人脈を築くことができたのは幸運でした。Route Hに入塾した高校3年生の5月以降暫くの間、質の高いエッセイを書く上での基礎を教わりました。8月下旬からCommon Applicationのエッセイを書き始め、Route Hを介して多数の修正をして頂きました。早期出願には余裕

を持って間に合わせるつもりでしたが、結局出願したのは締め切り当日でした。10月、11月は数学研究や学会発表に注力し、12月はRegular Decisionにおける各大学のSupplementary Materialsの準備をしました。大学の応募締め切り後に行われるインタビューについては沢山の要請を頂きましたが、多忙であることを理由に2校を除いて全てお断りしました。実際、受験準備のために高校卒業までに仕上げる予定であった論文執筆に数ヶ月の遅れが出ておりました。

—— 進学準備を進めるうえで苦労されたことは？

出願校のSupplementary Essayを高いクオリティで書き切ること苦労しました。自分はCaltechの大学院も含めて13校受験しましたがその殆どのSupplementary Essayを出願期限の1週間～2週間前から書き始めました。結果として全て書き切るのはギリギリになってしまいましたが、殆ど全てのエッセイを10回以上修正して頂きました。各大学の情報収集や求められている学生像を把握することに時間がかかったのが、エッセイを書き始めるのが遅くなった理由です。特に注意したのは、出願校に所属する自分の専門分野における教授の情報を網羅的に調べることです。指導を受けたい教授の名前、その研究内容、自分の研究との関連、将来展開をエッセイに具体的に書き込めるように努力しました。このことは大学での研究生活を現実的に想像する良い訓練にもなりました。結果的には、自分が知っている教授が在籍する大学には合格し、リベラルアーツ教育重視で自分の専門に近い教授がいない大学には不合格でした。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

全ての合格者は主に2つの範疇に類別できると思います。1つ目はwell-roundednessを重視していて幅広く豊かな才能のある人です。2つ目はある1つの事柄に関して顕著な業績がある人です。僕の場合は後者に分類されます。Caltechの様な実績に着目する学校は後者の出願者を合格させる傾向にあるため、自分はエッセイを通して数学の話題のみに絞り、今までの実績、そして将来の自分が目標とする研究者像を伝えることを心掛けた。しかし多くのトップ大学はwell-roundednessを重視しているため、各々の大学が想定する学生像に沿って、数学についての記述を弱めて、自分について強調する内容を少しずつ変えました。

—— Route Hのサポートでよかった点は？

Michael先生やスタッフの方々のサポートです。入塾まで独創的なエッセイを書いた経験を持たない自分にとって、良い文章の書き方をご指導頂けたことは財産となりました。先生方にはエッセイ以外にも、様々な出願項目について助言を頂きました。自分のエッセイに磨きをかけるだけでなく、ポジティブな気持ちで最後まで受験に挑戦することができました。

Columbia

四国(愛媛)の高校からIVYリーグに早期合格。 道後での活動は地方生の課外活動のヒントに

田村彰悟さん

愛光学園卒

合格校 ▶ コロンビア大学

進学先 ▶ コロンビア大学

出願エッセイはブレスト・ドラフト段階で、 ノート15冊を使用。

—— 海外進学を考えたきっかけは何ですか？

5歳から小学校2年生までの3年間をアメリカで過ごしたのですが、放課後よく遊びに行っていた近所のおじいちゃんおばあちゃんに大学の先生が多く、大きくなったらこの雰囲気の中で学びたいな、という想いが当時から臚気ながらありました。ずっと「何となく」のふわっとした想いだったのですが、多くの幸運に恵まれ、高校2年生の終盤に海外進学が現実的な選択肢として見えてきたため両親や学校の先生とも話し合い、海外大学受験に挑戦する決意を固めました。

—— 進学準備や課外活動はどのように進めましたか？

僕は松山市内の高校で寮生活を送っていたので、道後温泉が学校からすぐ近くにありました。小学校時代は学校内に温泉があったり、実家のすぐ近くにも多くの温泉があったりと何かと温泉には縁があり、折角松山に住んでいるのだから、と毎週のようにせっせと

道後通いをしていました。しかし入浴料が高いため毎回温泉に入るわけにも行かず、商店街を回ってみたり、周辺の寺社・城跡等を回ってみたりと一味違った道後の楽しみ方を開拓していきました。その過程で商店街の方々や神社の神主さんと仲良くなり、町の歴史について教わっていく中でますます道後への愛が深まりました。時には寮の友人を誘って一緒に歴史スポットを回ってみる、などとしているうちに道後の魅力、とりわけ歴史についてより多くの方々に知っていただけないだろうか、入浴+ショッピングという既存の道後観光の方程式にもう一つ、「歴史の堪能」という項を付け足すことができたらなんて素敵だろう、と思うようになりました。そこで友人とともに多言語での道後の歴史にフォーカスしたツアーイベント「道後ぞなもし」を企画し、毎日のように道後に通って準備を進め、高校2年生の9月に無事開催させていただきました。もちろん仲間とともに新しいものを作り上げる魅力やチームマネジメントの難しさも学んだのですが、今になって振り返ってみると、3,000年もの間、紡がれてきた道後の歴史の一端に触れ、町の方々と深い関わりを持たせて頂けたこと自体がどこまでも貴重で大切な経験だったように思います。他にも興味の赴くままに様々な課外活動に挑戦してみたりもしたのですが、そのどれにも寮の仲間が存在があり、ともに何かに取り組み、そのことについて深夜まで友人と語り合うのが楽しくて仕方なく、そのためにこそやっていたと言っても過言ではないように思います。「課外活動」と聞くと受験色が強くなりがちですが、「仲間とともにやる」というのが僕の中で一貫したテーマであり、そのどれもが楽しくて仕方なかった、ということを願書の中でも意識的に表現することを心がけていました。テスト類については偶然にも相性がよかったため大きな苦労はしませんでした。少ない勉強の中でも自分の苦手分野や苦手な傾向を把握し重点的に対策すること、どういう順番で問題を解くかという大局観を養うこと等を意識していました。エッセイについては、ブレインストーミングからファーストドラフトまでをすべてノートに手書きしていました。(A4ノート15冊!)振り返ってみると本当に意味不明なことばかり書いていますが、流れに身を任せるままに書き溜めていた事柄の中にこそ、最も自然体の自分が表現されており、その中で最もじっくり来たものをエッセイに広げていく、というスタイルは自分に合っていたように思います。

コロナ禍で1度も来校できずに、完全オンラインで エッセイ・その他をサポートした初の事例に

—— 進学準備を進めるうえで苦勞されたことは？

母校から海外受験をする生徒は極めて稀だったため、奨学金、推薦状、スクールレポート、さらにはコモアンアップのシステム等について先生方と手探り状態で、全体像がなかなか把握できないまま、気づいたら締め切り直前ということが多々あったのは、精神的にきついこともありました。しかし、そんなバタバタの中でも時間をとってくださる学校の先生方、さらには英語面でのRoute Hの手厚いサポートのおかげでなんとか間に合わせる事ができました。To Do Listを作成し、定期的に確認していればもう少し落ち着いて出願書類作成に取り組めたかな、とも思うので後輩の皆さんには是非おすすめです。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

エッセイの中に一貫したメッセージが込められていることはもちろん大切なのですが、行間にこそ自然体での自分らしさが滲み出ると考え、細かなところを特に意識していました。例えば、近くで小さな子が怖がっているのが見えたら、そっと手を握ってあげたり、背中をさすってあげたり、と本題からは少しずれる「小さな行動」にこそ、その人らしさが宿るものだと思うので、こうした小さな行動の表現には単語レベルでこだわりました。

—— Route Hのサポートでよかった点は？

帰国から10年のブランクがあり、入塾当初は英語力に不安がありました。Route Hのエッセイ指導のおかげで無意識のうちに自然と英語力・ライティングスキルが上達していききました。またRoute Hにエッセイを提出する際、不安な点についても書くと、ネイティブ講師の方々が、時にはその3倍近く、どこまでも丁寧なアドバイスをくださることもあり、本当に助けられていましたし、学ばせていただけていました。余談ながらエッセイが返却される際の“Good Job!”もすごく愛が込められていて、毎回次がんばろう、と思えたのでした。当然ながらエッセイの内容が芳しくなかったときは厳しい指摘もありましたが、その一言一言の中に「一緒にすばらしいエッセイを書いていこう」という講師の方々の覚悟、窮地の中での愛を感じ、身に染みました。しかし、何よりも素敵な先生と友人に出会えたことがRoute Hでの最大の財産です。1週間ぐるぐると思考が巡り続け迷走することが多かった受験期、先生と30分程度話すだけで思考が一気にシャープになり、アウトプットに繋がっていくのはまるで魔法のようで、そして同時に何だか心地よかったです。“受け継がれる意志”“人の夢”“時代のうねり”人が「自由」を求める限り、それらは決して止まることを知らないのです。Route Hの同期は本当に家族のような存在で、特に僕は、コロナ禍で地方在住ということで、通年でオンラインだったため一度も会ったことない人がほとんどなのですが、そんなことを微塵も感じさせない、とてつもなく優秀なのはもちろんのことどこでもsharingで、そしてgentleな彼ら彼女らとの出会いは僕の誇りです。

VOICE

Route Hで合格した先輩の声

U Penn, UC Berkeley & 東大

日米併願の両立に苦労するも、 IVYリーグ・東大にダブル合格

石川将さん

灘高校卒

合格校 ▶ ペンシルベニア大学 /
UCバークレー /
東京大学

進学先 ▶ ペンシルベニア大学

コロナ禍による課外活動の制限の中、 団体設立やオンラインシンポジウムに注力

—— 海外進学を考えはじめたのはいつですか？

中学校3年間をロンドンで暮らした後、高校生になって帰国しました。中学時代に身につけた英語を生かして学びたかったことと、興味があった行動経済学の研究の最先端がアメリカであることなどを知り、高一の5月あたりから海外進学を目指し始めました。

—— 進学準備や課外活動はどのように進めましたか？

エッセイ：高三の4月からRoute Hのサポートを受け、エッセイの核となる自己分析などを進めていきました。Common Applicationの受付が始まる8月ごろから本格的にエッセイを書き始めました。マイケル先生や尾澤先生と相談しながら、Common Applicationは3テ

マほど書きました。AOに見せたい自分の一面を的確に表現するのに苦労しましたがそれだけ達成感もありました。Supplemental Essayに関しては事前に大学のリサーチを済ませていたこともあり、予想よりは早く書き上げることができましたが、結局締め切り前日までブラッシュアップを重ねることになりました。

テスト: TOEFL®は高2の12月に受け終わりました。SAT® Reasoning/Subjectsは新型コロナウイルスの影響で高三の2学期から計3回ほどしか受けられず、スコアも伸び悩みました。僕の年は例外的にスコアを提出する必要がなかったため、Reasoningに関しては提出を控えることにしました。

課外活動: 高一から始めた模擬国連を中心に様々なことに取り組みました。学校の部活でやっていたバドミントンと化学研究など、受賞歴にかかわらず積極的に活動しました。特に今年は新型コロナウイルスの影響による活動自粛の影響下で何ができるかを考え、オンラインでの国際シンポジウムの参加や模擬国連会議を主催する団体の設立など、自分にしかできないことを考えて打ち込みました。

—— 進学準備を進めるうえで苦労されたことは？

日米併願をすることにしていたので、海外大出願に向けた準備と国内大の受験勉強の両立が大変でした。エッセイを本格的に書き始めると受験勉強をする余裕がなくなってしまうと先生や先輩から聞いていたので、高三の8月までに国内大の勉強は一通り終わらせておきました。9月以降は学校の授業を通じて演習をするに留め、家ではエッセイに集中していました。その後、出願が完全に終わった1月から共通試験・二次試験の対策を始めましたが、学校である程度勉強は続けていたのでなんとか国内大にも合格することができました。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

願書で書けなかったことはどんなに素晴らしいことであってもAOに伝えることはありません。高三の頭に始めた自己分析を確認しながら、自分が何を伝えたいのかを考えながら願書を埋めていきました。

—— Route Hに入ってよかった点は？

自分は関西に住んでいたの先生方から対面で指導をいただいたのは出願直前だけでした。しかしながら、オンラインを通じて毎週エッセイのフィードバックをいただき、完成度に磨きをかけることができました。出願終了後も過去の傾向から面接に関するアドバイスやよく聞かれる質問などをくださり、面接対策をする上で非常に大きな力になりました。同期とも積極的に交流し、互いのエッセイを読み合うことでお互いのエッセイに反映できたことと、一緒に受験を乗り越える戦友ができたことは非常に大きな支えになったと思います。

VOICE

Route Hで合格した先輩の声

Brown

読者の心を動かすストーリーエッセイで、 ブラウン大学に早期合格

ジャック奈緒美さん

渋谷教育学園幕張高校卒

合格校▶ ブラウン大学／慶應大学／上智大学

進学先▶ ブラウン大学

発展途上国に関する課外活動だけでなく、 国内大研究所の研修生として研究論文も 海外ジャーナルにて掲載。

—— 海外進学を考えたいきっかけは何ですか？

高1の夏にベトナム、ハノイ郊外の保育園で英語と数学を教えるボランティア活動に参加しました。その活動を通し、日本とは異なる保育システムと医療システムに興味を持ちました。帰国後、発展途上国のインフラや社会問題を調べるうちに、海外大学から発信する医療や公衆衛生に関する研究論文が豊富であるということに気がきました。このような分野での研究に関わり、発展途上国の医療資源が不足している等の問題解決に貢献するには、海外進学が適しているのではないかと考えました。

—— 進学準備や課外活動はどのように進めましたか？

高校1年の秋から本格的に海外進学の準備を始めました。高1の冬に新型コロナウイルスの影響で部活が中断される中、SAT® やTOEFL® で自分の納得いく点数が取れるよう、

試験勉強に集中しました。計画通り1回目の試験結果が納得のいくものだったので、高2の春からは興味のある科学と公衆衛生に関する課外活動に力を入れました。子供を対象とした公衆衛生に関するブログを始めると共に、ベトナムの貧困率が高いハナム省へ歯ブラシや歯磨きを送るための資金集めの方法として、クラウドファンディングを使ったプロジェクトを立ち上げました。そして、高2の夏は海外大学のサマープログラムに参加し、脳科学に興味を持ち、脳科学オリンピックにも参加しました。又、高2の冬には、国内大学の研究所の研修生としてマルファン症候群に関する研究を始め、成果としての論文がOnline Journalに発表されることになりました。そして高3の夏には、Route Hにて自己分析やCommon Applicationのエッセイのドラフトを書き始めました。自分が興味を持った分野で課外活動することで、学業と両立をしながら継続することができたと思います。

味のあるエッセイは何度もドラフトを書き直し ボロボロになることで作り上げられる

—— 進学準備を進めるうえで苦労されたことは？

早期出願の締め切りがある中、自分の「ストーリー」が読者に効果的に伝わるようなエッセイを書くことが最も苦労した点です。私はエッセイを書くまでは自己分析をしたことが無く、これまでの経験がどのように現在の自分を形成したかを考えたことがありませんでした。そのため自分に合う題目を見つけるのにかなり時間がかかりました。ドラフトを何枚も書いている時は、満足のいくエッセイを書くことは出来ないと思い落胆しました。しかしながら、根気よくドラフトを書くうちに、大きな出来事を書くより一見些細な出来事について書く方が良いという事に気づきました。自分に起きた余り目立たない出来事、又は毎日の生活に潜んでいる単調ではあるが貴重な出来事を書くことで、真の自分を描くことが出来たと思います。エッセイは出願書類の中で、AOに直接自分を語る唯一の機会です。プレッシャーを感じましたが、Route Hの先生方のコメントやフィードバックを参考に、自分が読んで満足できるエッセイを書くことができたと思います。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

願書で心掛けた点は、一つ又は二つのテーマに絞って作り上げたことです。課外活動、賞状と大学別のエッセイでは、脳科学と公衆衛生の分野に集中して書きました。まず、自分は尖った生徒もしくは丸い生徒、つまり一つの分野を極めた生徒と多くの分野で活動する生徒のどちらに当てはめた方がより効果的か悩みました。しかし最終的には二つのタイ

プの中間を取った形で、脳科学と公衆衛生の2つの分野において、過去の活動成果と今後取り組みたい活動について述べました。このように願書作成では、自分が両分野を通し、様々な問題の解決策を導くことが可能である旨を表現出来たと思います。

—— Route Hのサポートを受けてよかった点は？

Route Hの方々には、エッセイに限らず、課外活動と賞状を含め、願書全体を見て頂きました。適切なアドバイスや改善点を指摘され、気付かされる事が数多くありました。エッセイの講師の皆様のフィードバックがとても早く、多くの大学の願書を同時に仕上げることも可能でした。願書とエッセイの提出期限が近づき、焦りで自分が見逃してしまった点を指摘していただいたり、落ち込んでいる時には励まされ、Route Hのサポートは技術面だけでなく、精神的にもとても大きな支えとなりました。

Brown

出願期限直前のエッセイの書き直しも

ブラウン大学に早期合格

大野綾夏さん

渋谷教育学園幕張高校卒

合格校▶ ブラウン大学

進学先▶ ブラウン大学

3か月かけたエッセイに直前でダメ出しも 1日足らずで一気に骨組みを完成

—— 海外進学を考えたきっかけは何ですか？

高校1年の秋に学校で文理選択をする必要があった時に、どうしても決められなかったです。なぜ16歳でもう決める必要があるのか、大学はもっと幅広く学んで教養を身につけたいと思いました。そこで調べてみると、アメリカのリベラルアーツ教育に惹かれたのがきっかけです。

—— 進学準備はどのように進めましたか？

高2までは本当にアメリカで四年間勉強したいのか決心がつかず、日本の受験勉強をメインにやっていましたが、高3に入ってからは一気にフォーカスを海外大受験にあてました。課外活動は中3時から自分が興味のあることに幅広く手を出していましたが、受賞歴を埋めるのは苦勞しました。運良く、表彰されることになり、テストも同時期に受け終えたので、そこからは一気にエッセイを書くことに集中しました。

—— 進学準備を進めるうえで苦勞されたことは？

パーソナルエッセイを提出期限の1週間前にゼロから書き直したことです。三ヶ月毎日推敲しては訂正が入ったエッセイでは受からないという厳しい指導を受け、どうすべきかわからずに真っ白な画面と向き合った提出1週間前でした。もう焦りを越えて、諦めました。正直(レギュラーでいいか、と)。ただ、マイケル先生と対話して、本当の自分を表現しきることのみに重きを置いたら、1日足らずで最終エッセイの骨組みはできました。三ヶ月前からそのテーマで書きたかった思いもあるが、締め切りというプレッシャーも意外と良い効果があったのかもしれないです。

エッセイは、自分を偽らず、 ありのままの自分を表現する

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

自分を偽らないことです。大学受験、最終的には大学に「フィット」するかいなかだと思います。どうしても受かりたいからと言って、その学校の色に合うようなエッセイを書いても、そういう表面上のことはすぐにAOに見破られます。ありのままの自分を表現して、気に入ってもらえたら合格して、だめならもっと自分に合う学校にいけばいいや、という考えで望みました。まあ、つまりは学校選びはとても大切です。

—— Route Hのサービスでよかった点は？

なんとといってもエッセイ指導です。どんなエッセイを書いてもそれを十倍良くする添削を受け、仕上がってきたと思ったら白紙に戻す厳しい指導があります。エッセイは努力したからといって一晩で上達するわけでもなく、ほうっとしていたら急にアイデアが思い浮かぶこともあります。そういう瞬間瞬間を先生とシェアして少しずつ、自分の等身大のエッセイを書き上げる環境があるのは本当に恵まれていました。そして、切磋琢磨しあう同志の存在も大きかったです。直前期はエッセイを仲間と見せ合って自分たちでもコメントをしまいました。こういう表現方法があるんだ、こういうエピソード面白い、など仲間のエッセイを読んで評価するのも大きな学びになりました。ただ、エッセイ執筆だけではなく、これまでたくさんの活動をしてきた人たちと友達になるだけで一気に高校生活が豊かになった気がします。

最後に、私が大好きな名言を3つお伝えします。

When people are prose, be a poem. (unknown)

Today you are you, that is truer than true. There is no one alive who is you-er than you. (Dr. Seuss)

Your past need not be prologue to your future. (Keith Ferrazzi)

UC Berkeley, UCLA & USC

個別大エッセイでは苦勞するも カリフォルニアの名門3大学に合格

小林新門さん

広尾学園高等学校卒

合格校 ▶ UCバークレー /
UCLA /
南カリフォルニア大学

進学先 ▶ UCバークレー

SAT[®]、共通願書エッセイは順調に進むも 個別大エッセイは期限ギリギリまで作成

—— 海外進学を考えはじめたのはいつですか？

4歳から高校1年までずっとアメリカのニューヨーク州に住んでおり、小さい頃から周りの友達や先輩などがアメリカの大学を目指していたため、自分も海外の大学に進学するとぼんやりと考えていました。兄が先に親を説得し、海外進学に成功してくれたので、私も挑戦することにしました。

—— 進学準備や課外活動はどのように進めましたか？

■エッセイ：Route Hに入ったのは高3の3月ごろでしたが、実際にエッセイのネタやアイデアを考え始めたのは夏休みからです。また、出願期限の危機感をもって必死でエッ

セイに取り組みはじめたのは、早期出願1カ月前の10月ごろでした。コモンアプリケーションは運よくネイティブから一発でOKが出たので、最初は時間に余裕を持っていました。しかし、早期出願のサブリメントエッセイやUCに提出するパーソナルエッセイは納得いくエッセイが書けるまでに時間がかかりました。サブリメントエッセイは、早期出願のものは8月ごろから始め、11月1日の締め切りギリギリまでに仕上げました。UCは早期出願の直後に始め、11月末に書き終わりました。残りの通常出願のほうは12月から最終締め切りまで書いていました。

■テスト：SAT[®] Reasoningを高1の10月に受け、一発で納得する点数が出たので、それ以降SAT[®]は受けませんでした。SAT[®] Subjects (Chemistry, Physics, Math 2)は高3の6月に受け終わりました。TOEFL[®]は高3の9月に受けました。

■課外活動：私は米国の現地校でやっていた活動と、日本に帰国してから始めた活動があったため、他の人よりやっていた課外活動の量が少し多かったです。しかし、途中で帰国したため、ほとんどの活動は長期間続けることができず、課外活動ではあまりアピールできていなかったと思います。アメリカでの活動はボランティア、数学の大会や研究を軸にしていました。日本に帰国してから、自分の関心が少しずつ変わっていき、英字新聞部やビジネスコンテストなど、新しい活動に挑戦しました。活動の内容は結構バラついていて、大学で学びたい分野と被らないものもありますが、他の箇所では見せてない自分をAOに知ってもらえたと思います。

共通願書エッセイではクリエイティビティが必要。 個別大エッセイは、まず大学情報収集を

—— 進学準備を進めるうえで苦勞されたことは？

納得するエッセイを書くのが難しかったです。部屋に引き籠っても、アイデアが何日も出ない時期もありましたし、一人のネイティブ講師からOKが出ても、もう一人の方からダメ出しを頂き、一から書き直すこともありました。何より、「自分らしさ」を表現するのに苦戦しました。今までは学術的な文章を書いてきましたが、大学受験で課されるパーソナルエッセイではクリエイティビティが必要で、慣れるのに時間がかかりました。また、出願する大学に合った内容を書くためには、なるべく早くから各大学について調べ、自分がなぜその大学にフィットするか考え、エッセイを書き始めるといいです。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

1日に何十人もの願書を読んでいるアドミッションズ・オフィサー(AO)は、一つの願書の審査に数十分しか使わないと言われていています。そのため、私はアプリケーションを見ていただくAOに「面白い」って思われ、彼らの印象に残るような願書を作ることに気がつきました。エッセイの書き方を工夫したり、変なエピソードについて書いたり、ユニークな課外活動や賞を願書に入れたり、色々な面で印象を残すように頑張りました。

—— Route Hのサポートでよかった点は？

エッセイ指導です。エッセイピックのプレインストーミングから最終チェックまで、全ての段階でアドバイスをくださるので、文章が下手な私でも納得できるエッセイが書けました。また、ネイティブ講師やスタッフの方だけでなく、他のRoute Hの生徒や先輩などからのフィードバックも助かりました。Route Hのおかげで、受験のためだけでなく、今後の大学生活でも通用するエッセイ力を身につけることができました。加えて、Route Hでは尾澤さんからAsia Union Leaders Summit(アジア高校生リーダーズサミット)や、石巻で開催されるReborn Art Festivalのボランティアなどの課外活動を紹介いただき、カウンセリングもしていただいたので、日本に帰国してすぐに海外受験に向けた準備や対策を始めることができました。

VOICE

Route Hで合格した先輩の声

UC Berkeley, U Washington & 早大

エッセイ講座・指導、出願指導が奏功し 日米大と財団奨学金に合格

白石航太郎さん

開成高校卒

合格校 ▶ UCバークレー /
ワシントン大学 /
早稲田大学など

進学先 ▶ UCバークレー

課外活動は、海外大受験をあまり意識せずに 興味ある活動に幅広く挑戦し、成果を蓄積

—— 海外進学を考えたきっかけは何ですか？

中学入学当初から海外大学進学に関する漠然とした憧れはありましたが、費用の点や英語力に関しての不安からあまり真剣に考えていませんでした。しかし高2の時期から大学進学について真剣に考え始めるようになってから、日本の大学よりもフレキシブルに様々な分野を追求できる点、また留学生の割合や多様性が高く大学生活から学べる点が多い点といった米国大学の強みに魅力を感じ、詳しく調べるようになりました。そして、その中で柳井奨学金やJASSO奨学金、江副奨学金などの様々な奨学金制度が整っていることや、海外大に在籍する日本人が主催するプログラムで、実際に海外大学へ進学した先輩たち

に相談できる機会があることを知り、自分にも米国大学進学チャンスがあると感じため、日米併願の道を考え始めるようになりました。

—— 進学準備や課外活動はどのように進めましたか？

中学生から高2始めの時期までは、海外大学について深く意識していなかったのですが、とにかく自分興味があった課外活動に幅広く挑戦していました。幸い学校の成績は維持していたので、それは今思えばとても良かったと思います。その後は、高2の時期はTOEFL®、高3の時期はSAT®の勉強を継続的に1日30分程度続けながら、自身の希望する専攻を意識したボランティア活動や学生団体の運営などの課外活動に時間をより多く使うようにしました。国内大学の勉強は、できるだけ高校の授業内で完結するように意識し、高校の授業中はとにかく集中して国内大学の対策を行うようにしました。ただ、中でも中学校の時から続けていたハンドボール部やESS部などの課外活動は継続していて、それは純粹に“継続性”が評価されやすいという利点だけでなく、自分が悩んだ時に、いつでも帰れるコミュニティがあるという面で大きな支えになったと感じています。他には、ワールド・スカラーズ・カップなどの海外進学希望者が多く集まるような大会などにも参加しましたが、自分と同じような目標を持った仲間と数多く知り合うことができ、情報収集する上で大きなリソースの一つとなったので、こういった機会には積極的に参加するのがオススメです。

エッセイ集中講座でエッセイのコツをつかみ、 その後のエッセイ指導・奨学金対策で成長実感

—— 進学準備を進めるうえで苦労されたことは？

海外大学を意識し始めるのが少し遅く、SAT®を受けたのが高3の8、9月だったので、エッセイを進めるために時間をより多く使うべき時期に、いかにバランスを保ちつつ、スケジュール管理を行うかにはとても苦労しました。エッセイは時間をしっかり使い向き合うほどより良いものに仕上がっていくと思うので、理想としては、高3のエッセイを始めるより前にSAT®など他の要素はできるだけ終わらせておくと思います。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

全体を通して自分自身について余すことなく伝えるように意識しました。例えば、UCではエッセイを4つ提出しましたが、それらではそれぞれ“人間性”“バックグラウンド”“課外活動”“専攻”についての内容にしたことで、全体として偏りすぎず、人間像が分かるような

アプリケーションに仕上げるようにしました。ただ、その中でもそれぞれのエッセイで他の人とは自分が異なる点、なぜ自分が大学に変化を与えられるような人間といえるのかを多かれ少なかれ必ず含むようにしたことでスタンドアウトできるエッセイにしていこうと意識しました。そのほかでは、課外活動の記入では、ただ活動した内容を書くのではなく、その活動から自分が何を学んだかまで含めるように意識するとともに、自分が自身を持って取り組んだと断言できるもののみを書くようにしたことで、ままとりの良いアプリケーションになるようにしました。

—— Route Hのサポートを受けてよかった点は？

Route Hでは、米国大エッセイ対策講座(お茶の水ゼミナールで開催)と、その後のエッセイ指導を特に丁寧にやっていただけだと、さらに、尾澤さんから、奨学金指導まで受けることができたのは、自分にとって非常に大きな助けになりました。米国大エッセイ対策講座の受講前は、自分はエッセイのイメージが全く湧かなかったのですが、これを通して、いかにして自分自身を表現するかというポイントを掴むことができ、さらにそれを踏まえ、のちのエッセイ指導でも何往復もエッセイの添削を繰り返しながら、納得がいくまで、丁寧に指導していただけたのは、これ以上ないサポートだったと思います。また、書類対策のポイントや面接で想定される質問なども交えながら、奨学金対策のアドバイスをいただいたのも自分にとってはかなり大きく、Route Hで大学入学前に指導を受けることができて、自分自身の成長に深くつながったと実感しています。

UPenn, Duke, Cornell, UCLA、東大文I

危機感が自分自身を知る要素になり、 見事IVYリーグ、UC系、ワシントン大などに合格

岸野恵理加さん

広尾学園高等学校卒

合格校▶ ペンシルベニア大学／デューク大学／コーネル大学／UCLA／
UCSD／ワシントン大学／東大文科一類／慶大法学部法律学科／
早大国際教養学部／上智大国際教養学部

進学先▶ ペンシルベニア大学

チャレンジをするたびに拓ける自身の可能性

—— 海外進学を考えたきっかけは何ですか？

帰国子女であることや、中高で海外を目指す環境が整っていたことから、元々海外進学は自然に選択肢の一つとして考えていました。高1の時に米国の高校生と交流するイベントに参加した際、周りの積極性に圧倒され、「このまま日本に残ってはおいてくれるかもしれない」という漠然とした危機感に襲われました。そこから海外進学について本

格的に調べるようになり、研究する環境が整っており、さらに幅広く勉強することのできる海外大に進学したいという思いが強まってきました。また、それと並行して課外活動を行う中で、海外志向の人と気が合うように感じ、もう一度海外に戻りたいと思うようになりました。

—— 進学準備や課外活動はどのように進めましたか？

中学の頃は、模擬裁判や裁判傍聴など、自分の興味のあるイベントに参加したり、あまり知らない分野のものにもチャレンジしたり、自由に色々活動していました。高校に入ってから、自分の関心分野がより明確になり、それに関連する活動を深めていくという方向性に自然とシフトしました。具体的には、法学・政治学に関心があったので、法律事務所やインターンシップをしたり、市民と政治を繋ぐ活動をしているNPOで広報や運営に携わったりしました。また、法学論文やスピーチコンテストなどにも多数参加し、関心分野を深掘りすることができました。テスト類に関しては、SAT[®]やTOEFL[®]・IELTSのスコアを全て高2のうちに取り終えました。APは高2、高3でそれぞれ4科目ずつ受験しました。テスト類を早めに終わらせられたことで、エッセイや課外活動、国内大学との併願に集中できたので良かったと思っています。

他の人には書けないエッセイを アドミッションは読みたいのだ

—— 進学準備を進めるうえで苦勞されたことは？

一番は、エッセイを書くことです。最初は、エッセイのイメージが掴めず、ネットに載っている合格者のエッセイを読みまくっていました。しかし、そのせいで、合格者のエッセイに囚われてしまい、無意識にそれに似せて書いてしまっている自分がありました。実際、Route Hで添削いただいた時に、「あなたらしくない」「書いていることを本当に思っていない」と言われてしまい、自分で読み返した時に「嘘くさい」と思うことが何度もありました。それまで書いたエッセイを捨て、一からアイデアを考え、「自分らしさ」を意識してからは、段々と上手く書けるようになりました。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

アプリケーションには、エッセイ、課外活動、成績、推薦状、AP試験など様々な要素がありますが、それぞれで自分の異なる一面を伝えることを心がけました。各要素を見ることで、自分がどんな人なのかをアドミッションオフィサーに最大限知ってほしいと思ったからです。エッセイでは、アプリケーションの他の項目に表れていない自分らしさを出すよ

うに意識しました。具体的には、自分の性格・特徴を書き出し、どのお題がそれを表すのに適しているかを考えました。最終的には、そのエッセイ、またアプリケーション全体が「自分にしっくりくるか」ということを評価軸にしていました。そうすれば、どんな結果になったとしても、すんなり受け入れられると思いました。

—— Route Hグループのサポートを受けてよかった点は？

主に3点あります。第一に、自分の満足のいくエッセイを書き上げられるまでエッセイを何度も添削・アドバイスしていただいたことです。第二に、海外大受験を応援してくれるコミュニティがあったことが大変心強かったです。受験が上手くいかずに悩んでいる時にアドバイスをくれたり、励ましてくれたりする講師陣、そして同期の仲間がいて、何度も助けられました。第三に、Route Hは海外大受験についての情報が豊富なため、何か分からないことを聞いてもすぐに解決できる環境が整っている面も良かったです。

VOICE

Route Hで合格した先輩の声

Imperial College London, UCL, Manchester

見えない部分だからこそ自分の大学に対する 想いは、経験や行動力で証明

K.I.さん

イギリスボーディングスクール卒

合格校 ▶ インペリアル・カレッジ・ロンドン／UCL／マンチェスター大学／
サウサンプトン大学／トロント大学／マギル大学／
ブリテッシュコロンビア大学

進学先 ▶ インペリアル・カレッジ・ロンドン

何度もアプローチをして、 ついに勝ち取った宇宙関連のインターンシップ

—— 進学を考えたいきっかけは何ですか？

父の仕事の関係で3歳よりインターナショナルスクールに通いました(ベトナム、日本、ケニア)。高校2年生よりイギリスのボーディングスクールに進学し、海外の大学で理論物理学を学びたいと思い、イギリスの大学を中心に受験しました。

—— 進学準備や課外活動はどのように進めましたか？

G9(日本の中3)の夏休み中、コーセラやエデックスなどのオンラインで行われている大学のコースを取りました。G10(日本の高1)はTOEFL®の勉強に集中し、今まで続けてきたキベラスラムの子供達への支援を広める為にボランティア活動に力を注ぎました。インターンを取ったことがなかった宇宙関係の会社(ケニア)に何度も連絡を取り、インターンを経験しました。イギリスの高校へ入学してからもキベラスラムへの支援活動を続けま

した。先生から声がかかったコンペティションに積極的に参加しました。

時間に追われながらも米国・英国大それぞれで 求められていることが何なのかを見つけ出し わかりやすく明確に伝えること

—— 進学準備を進めるうえで苦労されたことは？

イギリスの大学に出願するつもりで準備してきましたが、9月になり2校のアメリカの大学にもチャレンジしたいと思い始めました。その後、コモンアプリケーションのエッセイに必死に取り組みましたが、なかなかアイデアが浮かばずとても苦労しました。イギリス大学用のパーソナル・ステートメントは自分の興味や活動をベースにし、自分の特徴などをわかりやすく伝える事が大事ですが、コモンアプリケーションは全く違うもので締切日によやくエッセイが仕上がりました。IBDPの勉強も大変になる時期と重なってしまったので、時間のやりくりにとっても苦労しました。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

英国大学用のパーソナル・ステートメントは、大学で何を専攻したいのか？なぜそれを専攻したいのか？それに向かって何をしていたのか？をわかりやすく書く必要があります。物理学に関連した経験と、それぞれの経験から学んだことを細かく伝えることに重点を置きました。そのような経験ができる場を積極的に自分から探して、チャレンジするよう心がけました。

—— Route H グループのサポートを受けてよかった点は？

最後までコモンアプリケーションが仕上がらなかったのですが、先生は時間が取れる限りブレインストーミングに付き合ってくれました。先生とのミーティングにより、批判的に考える力や、わかりやすくエッセイを書く力を向上させることができました。また、プロの編集者の方々に文章を添削してもらった機会を何回でも受けられる点もとてもありがたかったです。

VOICE

Route Hで合格した先輩の声

Swarthmore, Pomona, Williams, UCLA, 東大理I

名門リベラルアーツ大、UC系、国内大、 そして財団奨学金に合格

稲葉慎太郎さん

市川高校卒

合格校 ▶ ハバフォード大学 / ポモナ大学 / スワスマア大学 / UCLA /
UCサンディエゴ校 / ウィリアムズ大学 / 東京大学 ほか

進学先 ▶ スワスマア大学

海外大進学において、重要なのは勉強や課外活動の貯金

—— 海外進学を考えたきっかけは何ですか？

高校一年生の時に参加したThe World Scholar's Cupの東京大会にて、Route Hについての説明を聞いたのがきっかけでした。それまでは日本の大学に進学することしか考えていませんでしたが、海外大が提供する、多様な文化背景を持つ生徒らとの対話の機会や潤沢な研究リソースに惹かれ、進学先の選択肢の一つとして本格的に考え始めました。

—— 進学準備や課外活動はどのように進めましたか？

■ 進学準備

大まかなスケジュールですが、高1・高2は日本の受験勉強とTOEFL®・SAT®対策、そして課外活動に励んでいました。幸いなことにTOEFL®・SAT®は高2の12月に片付き、生じた余裕を日米併願のための勉強の貯金と課外活動に費やしました。高3では日本の受験勉強をほぼ完全にストップし、米国大の願書作成に専念していました。願書作成において主に時間

が取られたことは①奨学金、②エッセイ、③推薦状です。いずれも早くからの準備を心がけました。結局最後はエッセイが終わらず焦りましたが、冬ごろに推薦状やお金などの心配をせず執筆に専念できたのは大きかったと思います。

①奨学金については、高3の9月に一番出願のタイミングが早かった柳井正財団の予約型に合格でき、金銭に関してあまり不安を持たずに出願の準備を進めることができました。私にはアドリブ力がないため、面接は想定される質問をできる限りリストアップし、それぞれへの回答をエクセルでまとめることで緻密に準備を重ねました。自己分析も深まり、秋以降エッセイが書きやすくなりました。

②エッセイの執筆は春からRoute Hでお世話になりながら進めました。本格的にCommon Application用のエッセイを書き始めたのはトピックが公開された夏頃からで、それまでは自己分析を深め表現力を高めるために、先生からいただいたお題に沿って別のエッセイを書いていた。9月からは各大学のSupplemental Essayにも着手し、1月の締切ギリギリまで書いていました。直前期間以外は1日5時間程度取り組み、他の時間は課外活動や奨学金、推薦状の準備に回していました。直前期間は一日中エッセイを書き、リライト含め200本以上のエッセイを書いていた。

③推薦状も春から準備を進めました。早めに先生方にコンタクトし、骨子から相談しながら作り上げていきました。部活の顧問の先生や研究活動で何回も計画書を添削していただいた先生、海外大進学に関して相談に乗っていただいた先生など、自分のことをそれぞれ違う面でもよく知る方をお願いしました。誰にでも当てはまりそうな、陳腐な推薦状を避けるためにも、どの先生に書いていただくかはとても重要だと思います。提出方法や英訳などで立ち止まったことは何回かありましたが、周囲の人々のご支援のおかげで概ねスムーズに進みました。高3からは国内大の準備を学校の授業時間だけで完結させたことが定期考査の点数確保につながり、成績を維持できました。中highでコツコツ勉強をして貯金を作ることが大事だと思います。米国大出願が完全に終了した1月5日から日本の受験勉強に切り替えました。10日後に共通テストが迫る中、短期間で膨大な量をこなした覚えがあります。共通テスト後の2次試験対策としては主に国数英に取り組み、物理と化学にはあまり時間をかけませんでした

■課外活動

幅広い興味があったため、中3から参加したWorld Scholar's Cupをはじめ、研究活動や起業家育成プログラム、デザインコンテストやスポーツの大会など、何かに特化することはなく幅広く活動していました。興味が湧いたらとりあえず行動してみるスタンスは、さまざまな分野や人との出会いをもたらしてくれました。課外活動の区切りをつけたのは卒業式後で、高3の冬でも出

願準備と並行して研究発表会用の資料作成、プレゼン練習等も行っていました。たまたに研究室に通ったことがエッセイ執筆や日本の勉強からの良い息抜きとなりました。とはいえ、願書に書いた課外活動や受賞歴はほとんど高2までのもので、高3以降の活動は比較的地味ではありました。

自己分析は自分でも気づいていなかった 本来の自分自身に気づかせてくれる

—— 進学準備を進めるうえで苦労されたことは？

自己分析です。「私はどんな人間か」「大学で何を学びたいのか」「将来何をしたいのか」等の問いに対する答えを、高3の1年間を通じて模索しました。確立された自己分析の方法も無いため、手探りで進めていきました。目を逸らしたい部分も含めて内省を重ねることは楽ではありませんでしたが、この経験で得た成長は何事にも代え難いものだと思います。エッセイ執筆のスケジュール管理も大変でした。早期出願の締め切りを考慮し、Common Application用のエッセイは9月ごろに完成させる予定でしたが、結局早期締切の3日前までかかりました。予定は大幅に遅れ、ある大学のエッセイを大晦日から書き始めるなど、12月末は目の前にあるタスクをこなすだけで精一杯だった覚えがあります。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

願書全体を貫く一本の軸を形成することを心がけました。「過去にこのような経験をしたから、この行動指針でこんな活動をし、今はこんなことに興味があるから大学でもこういうことをやりたい」と、「広い興味」だけではなくそれらに共通した何かがあることを強調し、大学以降も成長するポテンシャルのある生徒であることをアピールして差別化を図りました。さらに、願書を構成する要素が重複しないように心がけました。例えば、Common Applicationのエッセイで見せる自分の側面は、Supplemental Essayや課外活動の説明欄で見せる側面とは違うものを書くことで、限られたスペースの中で最大限のアピールを試みました。

—— Route Hグループのサポートを受けてよかった点は？

一つに絞るなら、エッセイ指導です。ネイティブ講師の方々には厳しく、リライトを重ねたエッセイが白紙になったことも何度かありましたが、苦悩を乗り越えた先、自身のエッセイは内容でも表現でも数段階レベルアップしたように思います。当初ここまでしっかりと添削していただけたとは思っていませんでした。また、米国大の願書用のエッセイだけではなく、奨学金の財団に提出する、日本語で書くエッセイや、各大学や財団のインタビュー、願書自体のチェックなど、あらゆる面においてサポートしていただいたことは大変助かりました。SAT®対策でGLCにもお世話になりました。

Minerva Schools at KGI & NYU Abu Dhabi

世界的に人気上昇のミネルバに進学。 7つの都市で学ぶ大学4年間へ。

前川岳也さん

海陽中等教育学校卒

合格校▶ ミネルバ大学/
ニューヨーク大学アブダビ校

進学先▶ ミネルバ大学

日本の相対的貧困の問題への興味を ボランティア活動やエッセイに活かす

—— 海外進学を考えはじめたのはいつですか？

中学校2年生の時、英語の先生にAEC(Advanced English Class)という、英語のみを使って授業が行われるクラスに入らないか、という風に言っただき、それから漠然と英語を使って、アメリカの大学で学びたいな、という風に思うようになりました。

—— 進学準備や課外活動はどのように進めましたか？

エッセイ: Route Hのサポートを受け始めたのは高3の7月ごろでしたが、実際に出願期限の危機感をもって、必死でエッセイに取り組みはじめたのは、早期出願1カ月前の10月ごろでした。まずは、コモンアプリケーションのエッセイから書き始めました。トピック決めがと

ても難しく、納得のいくものが見つかるまでに、6種類ほどのエッセイを書き、その中から一つ選んで推敲を重ねました。大学別のサプリメントエッセイは、同じく10月頃に取り組み始めたのですが、始めるのが遅すぎたため、結局早期出願に間に合わず、通常出願のみしました。

テスト: SAT® Subjects(PhysicsとMath 2)は高2の内に、TOEFL®は高3の4月に受け終わりました。SAT® Reasoningは高3の12月に受け終わりました。

課外活動: ビジネスコンテストやサマープログラムに毎年参加していました。また高2の夏休みに参加したサマープログラムで、日本における相対的貧困の問題に興味を持ち、それに関するボランティア活動を地元で始めました。アプリケーションでは、そのボランティア活動に焦点を置き、アメリカの大学で学びたいことが、どう自分が今までやってきた活動と関係しているか、ということを個別大のエッセイでは書きました。

出願全体で多面的に表現することを意識。 エッセイは差別化を意識し、一つの出来事等に焦点を当てる

—— 進学準備を進めるうえで苦勞されたことは？

エッセイでとにかく苦戦しました。授業で取り扱った小説について、英語でエッセイを書くという経験は中学校、高校でもあったのですが“自分とは何者か”を伝えるエッセイは、今まで書いたことがなくとも苦勞しました。日本の定期テストや一般大学入試では明確な評価基準があるため、やるべきことが決まりやすく目標も(例えばテストで100点を取るなど)明確に設定することができるのですが、米国大受験においては、成績以外にも課外活動やエッセイなど、やる事が山ほどあり、エッセイや課外活動においては“これが正解!”というものはなく、そのギャップにとっても苦勞しました。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

エッセイや課外活動、推薦状を通して、自分を多面的に表現することです。例えば、エッセイで、自分の校外のボランティア活動に焦点を当てたら、推薦状で自分のアカデミックな部分や校内での課外活動について書いてもらうことで、色々な場面を通じて、自分とは何者かが浮き上がるように意識しました。また、他の人といかに自分のアプリケーションを差別化できるかということも意識しました。例えば、これはRoute Hで言われたことなのですが、文化祭やボランティアについてのエッセイは多くの人が書くので、差別化しにくいのです。だから、その中の一つの出来事に焦点を当てたり、自分の内面の変化に重きを置いたりなど、

自分にしか書けないエッセイを書くことを意識しました。

—— Route Hのサポートでよかった点は？

エッセイ指導やカウンセリングです。僕は、Route Hのサポートを受け始めた時期が、比較的遅く、愛知県に住んでいたことやコロナ禍もあり、対面の指導はあまり受けられなかったのですが、毎週オンラインで、エッセイとは何かから本格的なエッセイの書き方まで丁寧に指導していただきました。また出願におけるスケジュールの確認や、実際に米国大に通っているRoute Hの卒業生の方々とも繋いでいただき、とても感謝しています。エッセイ指導のみならず、書類の準備やスケジュールの確認など米国大受験を包括的にサポートしてくれるRoute Hに入れたことは、非常に幸運だったと振り返ってみて感じています。

VOICE

Route Hで合格した先輩の声

Princeton

米国の高校からプリンストン早期合格 トリプルAも意識し、高いレベルでのバランスを実現

櫻村樹理亜さん

The Taft School 卒

合格校 ▶ プリンストン大学／

進学先 ▶ プリンストン大学

バランスをとりつつ、 突き抜ける部分もあるという理想を体現

—— 海外進学を考えたきっかけは何ですか？

高校からアメリカのボーディングスクールに通っていたので、周囲の環境に影響され自然にアメリカの大学を志望するようになりました。その中でも、世界中から優秀な学生や教授が集まり、最高峰の学業とNCAA-1部リーグで競技ゴルフができるアイビーリーグを目指しました。

—— 進学準備はどのように進めましたか？

アメリカではよくバランスのとれた人格形成の指標として、Athletic、Academic、Artの頭文字を取ってトリプルAという概念があります。アイビーリーグもトリプルAの balan

スが取れた学生を好む傾向があると言われていました。私は、ゴルフ、STEM部活、フルート活動をメインの柱として願書を組み立てました。

Academicは、学校の勉強を中心にGPAとSAT®のスコアをあげることに集中しました。また理数系の課外活動としては、Math Team, Science Olympiad, Robotics Teamのメンバーとして州やリーグの大会に参加し、個人やチームで受賞しました。Athleticでは、高校のゴルフ部のキャプテンとしてチームを引っ張りNew England地区大会で優勝しました。学校外でも夏休み中に全米各地のトーナメントに出場して、ジュニアランキングを上げるように努力した結果、全米32位まで上がりました。また、Artでは、第一フルート奏者として高校のオーケストラで地域の音楽祭や教会での演奏活動もしていました。これらの成績や活動を願書に盛り込み、自分のユニークな才能の組み合わせをアピールしました。

出願書類はサッカーボールのようなパッケージ。 重要だった大学訪問

—— 進学準備を進めるうえで苦労されたことは？

高校ではしっかり勉強していたのでGPAには自信がありましたが、SAT®のReadingの成績がなかなか伸びなくて苦労しました。過去問を解くだけでなく、さらにSAT®解答のテクニックを研究したことによって、目標のスコアを達成できました。エッセイで苦労したことは、テーマ選びです。他の出願書類であまり触れられていない自分の性格や、知ってもらいたい自分のユニークな視点や考え方を書くことにしました。当初、出願エッセイの書き方がよく分からなかったのですが、ルートHのきめ細やかな指導を受けながら、最終的には満足できる仕上がりにになりました。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

出願書類は、いわば、サッカーボールみたいに多面的にかつ総合的に、自分の人物像を表現するパッケージだと思います。私の場合、ゴルフの実力や学校の成績には自信があったので、自分がどんな人間なのか、どういうユニークな能力や興味を持っているのか、色々な角度からアピールするように心がけました。出願プロセスを振り返った時に、直接大学を見に行ったカレッジビジットの経験が非常に重要だったと思います。ビジット前は先輩からの話や、web情報、ランキングのみで志望校を考えていました。実際の、どの大学が本当に自分にあうのか知りたかったので、志望するアイビーリーグ5校を直接訪問しました。プリンストンのキャンパスツアーに参加しながら、直感的に「私にはここしかない！

ここに来るんだ!」と強く思いました。その後は強い決意を胸に、高いモチベーションを維持し、SAT®に取組み、進学準備を進めました。その結果、プリンストンにEarlyで合格することができ、第一志望校のみの受験となりました。まだ志望校が決まってない場合は、カレッジビジットを強くお勧めします。

—— Route Hに入ってよかった点は何ですか？

高校のカウンセリングでは生徒数も多いので出来上がったアプリケーションをベースに指導してくれますが、Route Hでは生徒一人一人に適した方法でアプリケーション作成プロセスに、最初から最後まで懇切丁寧に指導して頂きました。日本から離れた遠くの地にいても、一つのチームとしてオンラインで指導してもらい非常に心強かったです。エッセイを書く上で、自分の人生を振り返るいいきっかけになりました。自分を知ることで、未来の方向性も明確になり、これからの新しい大学生生活のスタートラインに立つ事ができました。

University of Michigan

偽りなく、ありのままの自分を さらけ出すことが合格への近道

目黒黎さん

K. International School Tokyo 卒

合格校▶ ミシガン大学／Purdue大学／マンチェスター大学／UC サンタクルズ／
キングス大学

進学先▶ ミシガン大学

今までの経験や普段の何気ない要素がエッセイの核になる

—— 海外進学を考えたきっかけは何ですか？

自分にとって海外進学はとてもナチュラルなプロセスでした。兄も姉も海外へ留学し、自分も幼稚園の頃から英語の教育を受けていました。また、学校も主に海外進学をメインで生徒の進学ガイダンスを行っていたので、国内へ進学するより恐らく簡単だったと思います。何より、英語の方が使い慣れているため、日本の大学で英語の授業を受けようとすると、取れる科目や進学できる大学がとても限られてしまいます。それらを全部踏まえ、自分は海外進学を選択しました。

—— 進学準備や課外活動はどのように進めましたか？

小学生の頃から自分の進路はある程度決まっていたので、個人でプログラミングを習ったりプログラムを書いたりしていました。中学の後半からは大学受験について調べ始め、履歴書を埋める為に模擬国連やハビタット・フォー・ヒューマニティーなどといった活動を始めました。高校に入ってからはいよいよ自分の専攻に関する活動を増やし、友達とプログラミングを教えるクラブなども立ち上げました。このクラブが後に自分のエッセイの核となり、メンバー集め

や興味がわく授業をする為にかなり力を注ぎこみました。また、この時期からSAT[®]やTOEFL[®]対策なども始め、無事に早い段階で満足できる点を取ることができました。しかし、本格的に進学の準備を始めたのは高2の後半で、受賞歴が少ないことにその時点で気づいたため、高3では大会に出ることやインターンや研究をすることに力を入れました。また、同時期にエッセイも書き始めた為、3年目はかなり忙しかったです。

休む暇もなく、オリジナルなユーモアさを 引き出すために毎日パソコンと睨めっこ。

—— 進学準備を進めるうえで苦労されたことは？

自分は満足できるエッセイを書くのに苦戦しました。エッセイを書き始めたのも他のRoute H生より数カ月遅く、常に時間と戦っていました。調子のいい日は12時間ほぼ無休でエッセイを次から次へと書くことができました。しかし、調子の悪い日は丸一日アイデアがでず、脳内でうめき声を上げながらパソコンの画面を睨んでいました。また、普通に書くとつまらない文章ができるので、面白い要素をたくさん加えると、今度は自分にしか理解できない文になり、要素をバランスよく取り入れるのに何十回とエッセイを書き直しました。こうした添削をする回数を増やすためにも、思っているより何カ月も早くエッセイに取り掛かることをお勧めします。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

偽りなく自分を伝える事、尚且つそれにユーモアや自分の意外な一面などを加えて読み手の印象に残るアピールすることです。どちらか片方を果たすことは簡単ですが、バランスよく面白さと自分の個性を伝えるには、何度もエッセイを書き直し、自分の過去の体験や感じたことを洗いざらい掘探る必要がありました。しかし、それを念入りに繰り返したことで、納得のいくエッセイを書くことができました。

—— Route Hのサポートを受けてよかった点は？

やはり、ネイティブ講師のエッセイ指導がものすごく為になりました。自分の今のエッセイにかけている物をピンポイントで指摘してもらい、そこからアイデアを膨らますことができました。また、他のネイティブ講師の方々にも見てもらい、ワードで出てこない様な間違えから、より細かい内容の流れの改善点などを添削してもらえました。真っ赤な添削で埋め尽くされた自分のエッセイを見ると毎回ゾッとしますが、今となれば、それがとてもありがたかったと感じられます。他にも、自分はお茶ゼミで半年ほど授業を受けたことでSAT[®]の成績が110も上がりました。お茶ゼミではネイティブな人でも答えるのが難しい問題を解説してもらい、いつも点を失っていた「どっちも正解としてあり得る」二択の正解を見出せるようになれました。

Harvard, U Penn & Cornell

SAT® ほか、自己管理・時間管理に苦勞するも ハーバードはじめ、IVYリーグ3校に合格

菊田真理さん

東京学芸大学附属国際中等教育学校卒

合格校 ▶ ハーバード大学／
ペンシルベニア大学／
コーネル大学

進学先 ▶ ハーバード大学

子ども食堂でのボランティア、校内の活動にも注力

—— 海外進学を考えたきっかけは何ですか？

小6から中2までアメリカの中学校に通っていた経験から、帰国してからもアメリカの大学に行きたいという思いが燃り続けていました。高2の夏に参加したサマーキャンプで、日本全国から集まる、学校外で目覚しい活躍をしている高校生達に出会い、自分も外に出て挑戦したいとアメリカ大学専願を決めました。

—— 進学準備はどのように進めましたか？

高2の秋からTOEFL®とSAT®対策を始めました。TOEFL®はその冬に終わらせることができましたが、SAT®は高3の12月までテストを受けていました。

課外活動は、子ども食堂でのボランティアや研究、体育祭運営、山岳部などが挙げられます。高1の時はとりあえず興味を持ったことは全て挑戦し、次第に好きなもの得意な物の優先順位が高くなって、最終的にコミットできる活動を見つけられました。

エッセイを始めたのは高3の7月です。書きたい自分の軸はあらかじめ決めていましたが、それを読み手にも共感してもらえるよう、常に自分のアピールしたいことが読み手に伝わっているかのフィードバックを様々な人からもらっていました。

SAT® 対策は早めの開始を。願書は「統一性」重視

—— 進学準備を進めるうえで苦勞されたことは？

何よりもSAT®のスコアを上げるのですが、根本的な原因は自己管理と時間管理にあったと思います。忙しい時は、学校とは関係ないSAT®の勉強に手が回らず後回しにしましたが、結局受験の終盤で全てのしわ寄せがきて、自分の体調やエッセイにも大きく影響しました。特に想像力が必要なエッセイ等の自己PRの作業に、ベストの体調で臨むためにも、SAT®等の勉強は前から生活習慣として取り組むと、最後の悩みの種にならないと思います。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

自分の軸が、パッと願書を見たときに伝わるかどうか、それがエッセイ、推薦状、活動に紐づけられていて、統一性があるかということを重視しました。概念的な自分の軸が、具体的にどのような性格や経験から現れているかを、多面的にバランスよく伝わるように構成を考えました。また、自分のどういう面を見せるべきか否かの取捨選択も気をつけて行い、間違ったイメージを与えないように注意しました。自分の軸を探している時は、あえて自分の弱みに着目して、その時の感情や状況を分析することで、自分の問題意識や強調される強みが見えることに気付きました。

—— Route Hに入ってよかった点は？

プロ講師の方にエッセイを厳しく見ていただいたことです。それぞれのネイティブ講師の異なる視点からのフィードバックは大変参考になりました。また、Route Hで出会った人たちが励まし合いながら受験を終えたのは、辛いながらもいい思い出で、今後も切磋琢磨していけるような仲間ができました。

Harvard

エッセイやsubject testでは苦労するも 様々な活動に物凄い行動力を発揮しハーバード合格

S.H.さん

聖光学院高等学校卒

合格校▶ ハーバード 大学

進学先▶ ハーバード 大学

幼少時からの思い×情報収集×多彩な課外活動が結実

—— 海外進学を考えたきっかけはなんですか。

幼少期をアメリカで過ごした私は、現地校で親しくなった友人との別れの際に「将来、同じ大学に行こう」と話していました。そのころから心のどこかで「アメリカの大学に進学したい」という思いがありました。そして、高校に入ってから説明会などで、米国大学へ進学した先輩方の話を聞くうちにその思いは一層強くなりました。「世界中から学生が集まること」、「理系文系、学部にとらわれない勉強ができること」が決め手となり、高3から米国受験に真剣に取り組みました。

—— 進学準備はどのように進めましたか。

海外大学受験では提出する書類が多いので、スケジュール管理をするようにしました。また、課外活動については、受験のためではなく興味のある活動に積極的に関わっていました。僕は学校の行事や活動が高二の間は続いたため、テストの準備は高3から始めました。

エッセイに苦労するも、リライトをやり続けて 書きたいことの優先順位が明確化

—— 進学準備を進める上で苦労されたことは。

満足いくエッセイが書けず、メンタル面で苦しみましたが、そんな中でも自己分析やエッセイの書き直しをやり続けた結果、自分の書きたいことの優先順位が明確になっていったと思います。また、メンタルが大変な時は「全部落ちても別に人生の終わりではない」と自分に言い聞かせていました。

SAT® Subject Testは文系科目に限られているため、文系である私は科目選択に苦労しました。結果的に世界史を受験しましたが、Subjectの中では一番問題数が多く、授業で習う世界史と異なる部分も多かったため、勉強に時間がかかりました。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

自分の色々な側面を伝えるように意識しました。また、サブリメントエッセイ(各大学独自のエッセイ)のような短いエッセイは具体的に書くことを重視しました。短いエッセイも軽視せず、自分のユニークさを説明し、差別化することを心がけました。

—— Route Hに入ってよかった点は何ですか。

米国出願に関してわからないことがあると、その都度、講師やスタッフの方が一対一で相談に乗ってくださり、自分が必要としている情報を下さいました。苦労したエッセイについては、講師の先生方からのアドバイスのお蔭で、悩みから解放されたことが幾度もありました。

—— 後輩へのメッセージをお願いします。

悩んでいる時間があつたら、とにかく行動してみてください。誰かと話すだけでも新しい発見があつたり、さらなる出逢いにつながります。受験は一度だけでもいいかもしれませんが、受験を通して得た経験や友人は一生ものだと思います。

補足コメント (Route H責任者・尾澤)

私がS.H.さんについて特に評価している課外活動について補足します。彼は中3時にRoute Hが協力する海外プログラムに参加しましたが、その参加者の多くは高校生でした。恐らくその時は大変だったと思います。しかし彼は、高校進学後、学内外の様々な活動で成果を出し、高3時は課外活動歴も豊富でした。しかし、活動の履歴を見て、日本の地方での活動が少ないと感じ、東日本大震災の被災地(宮城)訪問を勧めたところ、早速、現地を訪問し複数の貴重な経験をしてくれています。思い切って行動することの大切さを参考にいただければと思います。

VOICE

Route Hで合格した先輩の声

Yale, UCLA & 東大理科I類

海外大進学準備に出遅れながらも 短期集中で早期合格と日米合格を達成

清水悠行さん

開成高校卒

合格校 ▶ イェール大学/
UCLA/
東京大学理科I類

進学先 ▶ イェール大学

高3・4月からの本格準備。 「情熱」と「短期集中」で「軸」を見つける

—— 海外進学を考えたきっかけは何ですか？

高1のときに米国の高校に1年間交換留学機会があり、そこで海外大進学という選択肢を知りました。本格的に考え始めたのは日本への帰国直後、塾の模試で目が飛び出るほどの点数を叩き出したのがきっかけでした。

—— 進学準備はどのように進めましたか？

高2の時期は日本の受験勉強、高3に入ってから海外大の準備に時間を割いていました。そのため、高3の初めの段階では自分が何を専攻したいかもわかっておらず、当然願書の中核となりうる課外活動もなく、かなり遅めのスタートを切りました。4月から色々

な分野の活動に参加し始め、最終的に自分の専攻並びに課外活動の軸としてビジネスの分野を定めることができたのが8月。結局、課外活動は12月の受験期もそのまま継続し今に至っており、近づくリミッターに焦る自分を抑えて自分の情熱を探し続けて本当に良かったと今となっては思っています。

「これだけは伝えたい」という自分の一面探し× 「多彩な表現で伝える」を意識

—— 進学準備を進めるうえで苦労されたことは？

SAT®のスコアメイキングでとにかく苦戦しました。他のテスト(TOEFL®など)のように過去問を解くだけではうまく感覚が掴めず、最終的にはSAT®の理論的な部分(eg. 出題者の意図を汲み取る云々)を勉強して受験しました。最終的なスコアは高3の10月、4回目の受験で1520点を取り、出願しました。エッセイに精力的に取り組まねばならない高3の2学期に、テストメイキングの作業が残っているのはかなりストレスになります。可能な限り早く片付けることを強くお勧めします。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

様々な切り口から見える自分の価値観、性格、その他自身のイデオロギーを構成する要素を熟知した上で、それをAOの印象に残るように伝えることです。具体的には、第一に過去の経験や自分の価値観などの分析を通してAOに「これだけは知ってもらいたい!!」という自分の一面を見つけること、第二にそれらを多彩な表現を交えながら伝えるという2つのステップがあります。自分が今どちらのフェーズにいるのかを常に意識することを心がけました。

—— Route Hに入ってよかった点は？

エッセイ指導です。今見返すと恥ずかしくなるような初期のエッセイから大学に出せるレベルのエッセイを書けるまでに成長するには、エッセイを書いたその場、ひいてはアイデア出しの段階から良質のフィードバックを貰える環境が用意されていたことが一番大きかったです。この環境を「使い倒せる」唯一の塾、Route Hで、大学入学前にエッセイの書き方を身に付けることができたのは非常に幸運だと感じています。

VOICE

Route Hで合格した先輩の声

ICL, UCSD, UW, Middlebury, U Toronto

唯一無二のクリエイティブストーリーで 数々の名門大学を魅了させ、合格

織井将さん

ASIJ卒

合格校▶ インベリアル・カレッジ・ロンドン／UCサンディエゴ／ワシントン／ミドルベリー／トロント ほか

進学先▶ インベリアル・カレッジ・ロンドン

課外活動に正解なんてない、 だからこそやりたいことを突き詰めていく

—— 海外進学を考えたきっかけは何ですか？

アメリカ育ちだったこともあり、大学の概念が頭に入ってきた中学生の時には海外大しか考えていませんでした。高校になって、本格的に大学に関して調べるようになった時は、日本の大学も考慮しましたが、結果的に海外大にのみ出願しました。

—— 進学準備や課外活動はどのように進めましたか？

進学準備は、成り行きで準備していきました。SAT®対策は10年生の終盤ぐらいから始め、習慣的に読む記事を増やして語彙力などを上げていきました。ですが、過去問などを使ったテスト対策がほとんどでした。課外活動は自分の興味本意で進め、自分のやりたいことを中心に取り組みました。

どこにも答えがないからこそ 書き上げるのに苦労したクリエイティブストーリー

—— 進学準備を進めるうえで苦労されたことは？

エッセーで、どのようにして、読み手を面白がらせようとするのです。同じストーリーでも書き方は様々あることに気づき、その創造性を働かせるのに苦労しました。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

自分に忠実な願書を作り上げたいと思いました。好きなことの実力や実績が世界や国のトップにも及ばないことは承知していたのですが、それでも好きなことを中心として願書を作りました。

—— Route Hグループのサポートを受けてよかった点は？

エッセーサポートを通じての英語力の上昇です。先生との面談を通じて文を、もっと色鮮やかに書けることを知りました。それには大きなワードバンク、意味が通じるロジックと、最後に創造性が必要不可欠だと知りました。数学専攻のためこれ以降願書や論文以外でどのような場面で文章を書くかは知りませんが、これを通じて理解したことはツール、ロジックと、クリエイティビティが、自分から何かを作り上げていく上で大切だと知りました。

U Chicago, U Penn & UC Berkeley

順調な準備の中、専攻希望分野選びは苦勞するも IVYリーグと肩を並べるシカゴ大に合格

田村多真美さん

渋谷教育学園幕張高等学校卒

合格校 ▶ シカゴ大学 /
ペンシルバニア大学 /
カリフォルニア大学バークレー校

進学先 ▶ シカゴ大学

エッセイは9月に開始するも、短期間で完成度UP

—— 海外進学を考えたきっかけは何ですか？

4歳から12歳のときにアメリカに住んでいて、自由な自己表現のできる環境が自分に合っていると感じました。また、米国大学の特徴の一つであるリベラルアーツに魅せられ、大学ではリベラルアーツ教育に基づき、幅広く学びたいと思いました。

—— 進学準備はどのように進めましたか？

私の学校では成績が相対評価でつけられるので、中学生のころから学校の成績を意識していました。成績が落ちないように真剣に授業を聞き、定期テスト対策に取り組んでいました。SAT®本試験は高2のときに受験しました。当初は2回受験し、より高い点数を目指

す予定だったのですが、2回目の受験中に体調を崩してしまい、テスト後にスコアをキャンセルしました。SAT®のSubject Testは高3の時に、学校の定期テストの勉強と両立できるようにスケジュールを組んで受験しました。課外活動では、ラクロスや模擬国連、ディベートに力を入れていました。エッセイを書き始めたのは高3の9月です。Route Hの仲間と比べて遅いスタートだったのでかなり焦りました。しかし、9月末にはCommon Appで書きたいことが徐々に固まり、10月のEarly出願時には自信を持つことが出来ました。

エッセイ間の重複を精査し、違う色を出す工夫に注力

—— 進学準備を進めるうえで苦勞されたことは？

大学で専攻する学問分野を決めることです。リベラルアーツと言っても、最終的に専攻を決める際には定められた授業を履修していなければなりませんし、大学が各分野で異なるプログラムを設置していれば、入学時点で専攻がある程度決まっていなければなりません。進学準備を行う際に、これからの4年間、熱心に取り組みたいと思うアカデミックな活動を多方面にわたる自分の経験・興味に基づき、一つに絞ることがとても難しかったです。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

自分の多様な側面を表すことを心掛けました。私は興味・関心が分散しているため、一つの断片のみを取り出し提示してしまうと、とても薄い人として捉えられかねませんでした。なので、似ている、及び重複する内容がないかを念入りに確認し、エッセイごとに違う色を表現するようにしていました。

—— Route Hに入ってよかった点は？

同じ目標を持った仲間に出会えた点です。海外大を目指すことは日本ではまだ少数派ですが、Route Hにいる全員が海外大進学を夢として掲げています。学校での友人の多くが国内大学の受験勉強で明け暮れている中、自分だけエッセイを書いていると心寂しく、将来を不安に思うことがありました。だが、私はRoute Hで自信と仲間を見つけました。

VOICE

Route Hで合格した先輩の声

Pomona College, UC Berkeley

自分自身の価値は型にはまらない ユニークさから生み出される

加藤愛子さん

豊島岡女子学園卒

合格校 ▶ ポモナ大学/
UCバークレー

進学先 ▶ ポモナ大学

多様な分野で知識を深めることで 自分自身の存在を色鮮やかに。

—— 海外進学を考えたきっかけは何ですか？

海外進学への興味は中学生の頃からあり、Route Hや奨学金の説明会に参加していく中で、ホリスティック(総合的)に評価される受験形式の方が自分には合っているのではないかなと思うようになりました。さらに、高1でのニュージーランド留学で深めたフードロスというテーマを追究するには、分野横断的に学べる環境が必要だと感じたこと、多様な分野で教養を深めてから専攻を決めたいと思ったことから、海外進学を本格的に考え始めました。

—— 進学準備や課外活動はどのように進めましたか？

中学3年生の春休みにF A O(国連食糧農業機関)が製作した子ども向け教材の翻訳を手

伝ったことで、食品ロスの問題に関心を持ち、それを軸に活動していくことを決めました。高1でのニュージーランド留学で現地の先駆的な食品ロス対策を学び、それを日本でも広めようとFAOとCookpadに協力していただき、約3年間に渡る新しいプロジェクトを立ち上げました。他にも、中高水泳部の部長を務めたり、スーパーサイエンスハイスクールでの探究活動として、家庭ゴミの削減に関する論文を執筆したり、バランス良く好きなことに挑戦しました。海外大のアドミッションにはテンプレートのようなものは存在しませんし、自分のやりたいことを自分らしく頑張れば、自分でも気づかないうちにユニークな存在になれると思います。

海外大進学は国内大進学と違うからこそ、早めの準備やSAT®対策などタイムマネジメントはとても重要。

—— 進学準備を進めるうえで苦勞されたことは？

学校の成績維持が大変で、学校の勉強にそれなりの時間を割く必要がありました。その傍ら、SAT®やエッセイ、奨学金の準備も並行して進めていかなければならなかった点が一番の苦勞でしたが、通学中など隙間時間を工夫して使いました。予約型で奨学金が決まっていたのが唯一の救いでしたが、それでも高3の11月はPomonaの早期出願や、UCのエッセイに追われながら、期末試験やSAT®の勉強にも気が抜けなかったので、奨学金は早いうちから念入りに準備することやSAT®を可能な限り早く片付けることを強くお勧めします。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

アプリケーション全体で自分を表現することです。共通願書のエッセイ、個別大のエッセイ、推薦状では決して同じエピソードを使い回すことはせず、様々な切り口で自分という人間像を浮かび上がらせることを心がけました。そして学校の成績やスコア、課外活動、受賞歴などがそれらのエッセイと上手く紐付けられると、アプリケーション全体に説得力を持たせることができ、唯一無二の願書が完成すると思います。

—— Route Hグループのサポートを受けてよかった点は？

Route Hのエッセイ指導やカウンセリングです。日本の大学で求められる小論文とは根本的に異なる海外大のエッセイについて、ブレインストーミングのやり方から細かな表現方法まで一つひとつ丁寧に指導して下さり、自分らしいエッセイを書き上げることができました。カウンセリングに関しても、先生がじっくり相談に乗って下さり、PomonaのED1という決断に踏み切ることができたので、とても感謝しています。

Columbia, Duke & Johns Hopkins

高校時代の国内大での研究も奏功し コロンビア大・工学部に合格

李為達さん

聖光学院高校卒

合格校 ▶ コロンビア大学／
デューク大学／
ジョンズホップキンス大学

進学先 ▶ コロンビア大学

課外活動のお手本のような大学での研究

—— 海外進学を考えたいきっかけは何ですか？

対話システムの研究を始めた高校1年時に自分に最も適する進路を考慮して決めました。大学で研究を促進するためにはコンピュータサイエンスや数学だけでなく脳科学・心理学などといった幅広い分野を身につける必要性を実感しましたが、日本の大学では学部生が研究に励むのは難しい上に教養学部の授業範囲が望むものとは少々異なりました。そこで、学部時代から研究に時間をかけられて自分の学習分野を自分で決められる米国大学への進学を考えました。

—— 進学準備はどのように進めましたか？

テスト対策

TOEFL®とSAT®IIは対策本を購入して進めました。TOEFL®は運良く早々と望ましい点が取れましたがSAT®IIは高三の春に受けて終わらせることができました。SAT®II(サブジェクトテスト)は物理と数学IIを選択しましたが、この二科目は学校の勉強を重ねていれば大丈夫だと思います。

課外活動

力を入れた課外活動は大きく二つあります。

一つは二年間ほど大学の研究室で機械学習の分野の研究です。中学時代に人間のように会話ができるAIに興味を持ち、高1の頃にうまくいきそうなアイデアを用いていくつかの大学の教授にメールで打診したらある教授が受け入れてくれました。そこから研究を続けながら研究室単位で大学ロボコンに参加して自然言語をロボットのコマンドに変換する機械学習モデルの開発など様々な学びの場を通りながら高二の終盤頃に人工知能全国大会(JSAI)という日本最大規模のAI学会で史上最年少論文受諾者として論文発表をしました。二つ目はアメリカの高校生向け国際ロボコン(FRC)に参加する日本チームの代表を務めたことでした。他チームは高校の部活などで活動している一方、ただモノづくり好きな高校生が集まった僕たちは資金やリソースなどが殆どありませんでした。そこで、コネクションを駆使してクラウドファンディングや企業訪問を通して300万円集め、みんなで一人前のチームに築き上げました。また、日本在住のFRCアラムナイを集めてアラムナイ会を結成したり、子供に電子工作を教えたりMaker Faireという展示会などでブースと立てるなどといった活動もしました。

アプリケーションはバランスがある方が好ましいかもしれませんが、ただ好きで課外活動に取り組んでいたこともありアプリケーション自体はかなり偏りがありました。

受賞歴

受賞歴も理系ばかりでした。大学ロボコンの他、パソコン甲子園(競技プログラミング大会)、宇宙開発系の大会などの成績を書きました。また、取得した奨学金も書けるので、賞の代わりに江副リクルート記念財団の奨学金をあわせて五つ書きました。

エッセイでは「自分ユニーク」や「ユーモア」も見せる

—— 進学準備を進めるうえで苦労されたことは？

エッセイ執筆の他に、実は国籍関連のことでとりわけ苦労しました。

僕は中国国籍としてアプリケーションを提出しましたが、近年米国では中国人留学生の取り扱いがかなり厳しくなりつつあり、院生だけでなく学部生にも影響が出るようになったのはここ数年のことです。昨年度・今年度は米国外に在住しインターナショナルスクールに通わない中国人学生のトップ大学の合格者数は例年と比べて大きく落ちており(後期受験ではいわゆる「HYPSM」の五校は合格者わずか数名、前期は0人の大学もあります)、今後也更に厳しくなると予想されています。一般的に競争率が激しい分野として航空宇宙工学やコンピュータサイエンスなどが知られていますが、今後は機密情報に関わるということでAE・CS(Aerospace Engineering, Computer Science)専攻は避けなければいけないといわれている現実を高三の終盤に知り、かなりの衝撃を受けました。自分ではコントロールが効かないラベルによって受験結果が左右されることを覚悟しながら前に進むのは正直のところ非常に苦しく受け入れ難いことでした。

—— 願書全般で心がけた点を教えてください。

受験期に先輩方の話を伺って学んだことですが、いかに「自分」をアプリケーションで表現できるかがポイントだと実感しました。「自分しか持っていないものは何か?」という問いに対する答えをブレインストーミングして個性が強く出るアプリケーションになるように心がけました。また、ジョークなどはさんだりして読者に面白いと思われそうな書き方を意識したエッセイも書きました。

—— Route H でよかった点はありますか?

エッセイのフィードバックの速さや、比類なき生徒一人一人への対応の厚さだけでなく、大学に入ってからのことを考慮して、生徒が良い英文の書き方を身につけられるような指導方法がRoute Hの突出する部分だと思います。直前期になると、講師・スタッフの方々も徹夜で付き合ってください、Route H生が提出したエッセイを、ほんの数時間後にハイクオリティな形でフィードバックをしてくださるだけでなく、直前期でないときも、大抵提出した次の日にフィードバックが返ってくるのが殆どで、おかげさまでライティング力が上達していく成長も実感できました。

Route H のサポートを受けて 2021・2022 年度 米・英トップ大に進学した生徒

進学先	氏名	進学先	氏名
2021年度		2022年度	
Harvard	小野祐	Yale	安部奈穂
Harvard	R.M.	Yale	B.S.
Harvard	A.O.	Yale	貴田悠斗
Yale	棚澤哲	Stanford	保立怜
Princeton	黒田凜	Caltech	池田隼
Stanford	S.Y.	Brown(PLME)	ジャック奈緒美
MIT	長島大来	U Penn	岸野恵理加
Caltech (大学院)	金子生弥	UC San Diego	R.M.
Columbia	田村彰悟	U Michigan	目黒黎
U Penn	石川将	Pomona	加藤愛子
U Penn	金世和	Swarthmore	稲葉慎太郎
Brown	大野綾夏	Wesleyan	熊谷はるか
UC Berkeley	小林新門	ICL (UK)	織井将
UC Berkeley	白石航太郎	ICL (UK)	平田遼馬
UC Berkeley	末廣隆介	ICL (UK)	今井海斗
Johns Hopkins	安藤万留	※Caltechは、カリフォルニア工科大、ICLは、Imperial College Londonのことを指します。 ※氏名は敬称略。イニシャル表記は氏名非公表の生徒。	
Swarthmore	柚木一心		
Grinnell	今西はな		
Minerva	前川岳也		
Harvey Mudd	谷澤文礼		
UCL (UK)	宮本陸央		

**徹底的な
ライティング指導のおかげで、
説得力のあるエッセイを
書けるように!**



デポー大学 (アメリカ) 進学

原田 雄生 さん

受験タイプ 海外大 専願
合格校 DePauw University (デポー大学) / Lawrence University / Knox College / Kalamazoo College / Lake Forest College / Ohio Wesleyan University / Bennington College / Wartburg College
受講クラス ● TOEFL iBT® Test対策 Class Master
 ● SAT® 対策 Class
 ● 海外大学出願パック

受講のきっかけ

実は、国内大学に行き、その後、大学院で海外留学をしようと思っていました。高校1年の10月に進路相談をした際、担任の先生から「日本の大学を選ばなくてもいい」と言われ、高1の1月には独学で準備を始めたのですが、秋田県に住んでいたため海外進学の方法など情報収集に苦労しました。転機は、高2の5月に海外進学相談会に行ったことです。そこでGlobal Learning Centerを知りました。オンラインで受講できるため、秋田にいながらTOEFL iBT®テストやSAT®の対策や出願アドバイスを受けられるのが魅力だと思い受講を決めました。

受講して感じた魅力

GLCを通して日本全国に高い志を持った友人ができたことはすごく良かった点です。授業外でも進路について相談しあうなど、お互いに切磋琢磨して出願準備を進められました。他の受講生の将来のビジョンや課外活動の大きさに鼓舞されて、「自分も負けていけない」と努力し続けることができたと思っています。

**受け身ではなく
常にアクティブな姿勢が
求められる
GLCの授業で実力アップ!**



ハバフォード大学 (アメリカ) 進学

中谷 海渡 さん

受験タイプ 国内・海外大 併願
合格校 Haverford College (ハバフォード大学) / 東京大学 / Colby College / Grinnell College / Carleton College / Vanderbilt University (東京大学理科II類に入学後、ハバフォード大学へ)
受講クラス ● TOEFL iBT® Test対策 Class Intermediate
 ● SAT® 対策 Class

受講のきっかけ

留学に興味を持ったのは高2の4月。最初は単なる海外への憧れみたいなものでしたが、文理選択の際に自分の将来を考えてすごく迷い、専攻も決められなかったのが海外のリベラルアーツカレッジを考え始めたきっかけになりました。受験準備を始めて、TOEFL iBT®テストの対策方法を探していたときにWebで見つけたのがGlobal Learning Centerでした。オンラインの講座であること、週1回のペースで進められること、自宅で夜に受けられること、などが受講の決め手になりました。

受講して感じた魅力

GLCでは、受け身ではなく常にアクティブに授業を受けることが求められました。質問にただ答えるだけでなく、毎回自分がなぜその答えを選んだのかを説明することで、着実に力がついていきました。また、海外大学に実際に出願するまで、様々なサポートを受けられることがGLCの大きな魅力だと思います。出願のノウハウなどを持っているGLCはすごく頼りになる存在でした。

**個人の弱みに沿った
的確なティーチング。
GLCでの学びが
大学でも役立った!**



ウェズリアン大学 (アメリカ) 進学

羽鳥 静華 さん

受験タイプ 国内・海外大 併願
合格校 Wesleyan University (ウェズリアン大学) / Georgetown University / Lake Forest College / 東京外国語大学
受講クラス ● TOEFL iBT® Test対策 Class Master
 ● SAT® 対策 Class

受講のきっかけ

きっかけは2つ。1つは英語ディベートの全国大会で3位に終わり、国際大会への参加機会を逃してしまったことです。もう1つは、アメリカの大学でやるようなアウトプット中心の英語に関する授業があり、その授業が大好きだったことです。通っていた高校の英語のカリキュラムを監修していた大学の教授に、「海外に行きたい」と相談したところ、海外に直接進学する方法について教えてくださいました。その際にベネッセのGlobal Learning Centerも紹介していただいたので、受講を決めました。

受講して感じた魅力

GLCの授業は少人数なので、先生方が各々の弱点を理解し、それに沿ったティーチングをしてくれる点がとても良かったです。毎回の質問が個人の弱みの克服につながるようなものになっており、授業ごとの学びがとても大きかったですね。たとえばSAT®のエッセイの講座で身につけたエッセイの書き方や、自分での読み直し方などは、大学でもとても役に立ちました。

新型コロナの影響でSAT®の受験計画が急遽変更となる中で、アメリカ・シンガポール・日本のトップ大学に合格



文系・理系どちらも幅広く、興味のある分野を学べる柔軟な教育システムに魅力を感じ、海外大の受験を決意

柳井正財団奨学生



自分のやりたいという気持ちを大切に課外活動をする事で大学での学びにつながる興味関心を発見



ペンシルベニア大、スワースモア大、イェール・NUS大、京都大学 農学部・応用生命科学科、国際基督教大学等に合格

松田 花奈先輩 (桜蔭中学校高等学校出身)

—海外の大学を受験してみようと思われたきっかけを教えてください。

Asia Union Leaders Summit (Route H)が協賛しているサマープログラムに参加した際、異なるバックグラウンドの人々と共に作業をしたり、議論をする場面が多くありました。普段は似た環境下で育った仲間と「以心伝心」の生活だったため、難しさを覚えました。ただ、その難しさを楽しんでいる自分がいることに気づいたとき、海外大学で勉強をしたいと思いました。それから、海外大学を調べていくうちに、学生の本気度や、教授の教育に対する情熱に惹かれていきました。

—海外の大学と国内の大学の併願で大変だったことを教えてください。

新型コロナの影響で、TOEFL iBT® やSAT® の受験が当初の予定より後ろ倒しになってしまったため、それらの対策と国内大受験対策を並行して進めなければならない期間が長くなってしまいました。また、高3の2学期に、周りの仲間が国内一般受験対策にラストスパートをかける中、私はひたすらエッセイを書き続けており、不安になることが何度もありました。

—海外の大学と国内の大学の併願にどのように取り組まれましたか。

高校三年間を通して、学校での勉強に集中し、残りの時間で興味のある課外活動に積極的に参加しました。高3になったタイミングで新型コロナの影響で学校がほぼ自宅学習になったので、午前中は勉強に集中し、午後はオンラインで課外活動、と決めて時間を有効活用したのと、毎日散歩やバレーボールなどの運動も欠かさないようにしました。夏休み以降は海外大学出願のためのエッセイをひたすら書く時期が長かったので、冬に海外大学の出願を終えてからは、共通テスト対策をするのと京都大学の過去問を購入し、ひたすら問題演習をしました。

—受講されたお茶の水ゼミナールのクラスの感想を教えてください。

TOEFL iBT® 対策クラスとSAT® 対策クラスを受講しました。先生はグループワークをしたり全員が参加できるようにクラスを運営してくれて、クラスに行くのが楽しかったです。クラスメイトは、非常に英語力が高く、また、視野が世界に開かれていて様々な課外活動をしている人が多かったです。今でも連絡を取り続けている人も何人かいて、刺激を受け続けています。

ペンシルベニア大、ミドルベリー大、早稲田大学 基幹理工学部・政治経済学部

宮原 隼先輩 (女子学院中学校高等学校)

—中高時代に力を入れた課外活動を教えてください。

高2から高3にかけて行ったディベートに思い入れがあります。テニス部を引退した後、有志を集めてディベートの活動を行いました。部活動という枠組みがない中で、教えてくれる先生もあらず、自分たちで練習方法を考えたりするのは、苦労もありましたが楽しかったです。無謀だと思われたディベートの大会に出場し、予想以上の結果を得られ、達成感が大きかったです。

—海外の大学と国内の大学の併願で大変だったことを教えてください。

夏から秋にかけて周りの友人が国内大学の入試に向けて勉強しているのに対し、私はエッセイばかり書いており、置いて行かれるという焦りを感じていました。日本の大学にはどこにも受からないのではと心配している中で早稲田大学の理系と文系の2学部から合格をもらえてよかったです。

—受講されたお茶の水ゼミナールのクラスの感想を教えてください。

SAT® 特有の問題の解き方を教えてくれたり、授業の前後に個別でどのようにすればスコアが伸びるのか、苦手な分野をどうすれば克服できるのかなど相談に乗ってくださったのは、とても心強かったです。同じ志をもつクラスメイトからも刺激をもらい、自分も頑張ろうという励みになりました。また、SAT® の問題など、わからなかったところをクラスメイトと休み時間などに話そうことができ、その中の学びも多かったです。

—受講された海外大進学出願バックの感想を教えてください。

日本語・英語両方のエッセイ指導をして頂いたことは、とてもありがたかったです。大学出願だけでなく、奨学金出願のエッセイを書いた際に、自分では完璧だと思っても、指摘を頂けたことで、曖昧な表現があったり、自分の中で、考えがまとまっていなかったことに気付かされることも度々ありました。指摘をたくさん頂けたことで、確実に良いエッセイになったのではないかと考えています。

東京大学 文科三類、早稲田大学 教育学部・国際教養学部 スミス大等に合格

渡辺 紗於里先輩 (女子学院中学校高等学校)

—海外の大学と国内の大学の併願にどのように取り組まれましたか。

高校三年間を通して、海外大学に提出するGPA (評定平均) を高く維持するため、また国内大学受験の基礎作りのため学校の定期試験を最重要視していました。そのほかに、高1ではTOEFL® のスコアをできるだけ上げきることを、高2では充実した課外活動を意識し高2の冬からはSAT® 対策コースを受講しました。海外大と国内大で気持ちが半々だったため、選択肢をできるだけ増やすということを目標に、シーズンごと月ごとに重点を置くべきことを自分なりに決めてそれに集中しました。

—受験で忙しい高3をどのように過ごされたか教えてください。

TOEFL® やSAT® は、オリジナルの分析ノートを作り自分と解答解説の思考回路の違いや改善点を毎回まとめて、文章や問題のタイプごとに自分が改善すべき部分を明確化しました。11月中旬から東京大学の過去問を解き始めました。12月からは、海外大のエッセイを書きながら共通テストの予想問題を数回解きました。私立の過去問は約5年分、国立は約10年分、弱いところはさらに10年分ほど解きました。

—受講されたお茶の水ゼミナールのクラスの感想を教えてください。

クラスの雰囲気がとても明るく、クラスメイトと話し合う時間も多かったため自然と仲良くなり、先生が真剣に優しく面白く本当に沢山のアドバイスを下さったため、どんなに疲れた日でも元気になって帰ってくるようなクラスでした。

—今、受験を終えてみて、海外大受験にチャレンジしたこと、その経験はご自身にとどのような意味を持っていますか。

国内大への進学を考えている今振り返っても、海外大を受験して本当に良かったと思っています。まず課外活動しようと思ってから、自分のやりたいという気持ちを大切にどんどん新たな世界に足を踏み入れられるようになり、そこで今まで出会わなかったような人に出会い、今にも強く繋がる新たな興味関心が生まれました。また、国内大の準備中は考えるのを疎かにしがちな私自身の personality, passion, potential について、課外活動や特にエッセイを書く過程で上辺だけの考えでなく本当に確かなものを探し掘り下げていく行為は、どの場所で4年間を過ごすかにかかわらずこれからの私の生き方を探求する際の基盤となる大切なことでした。

「Route Hグループ」とは？

日本の高校から12年連続ハーバード大、13年連続イエール大に合格者を出し続けている日本で唯一の進学塾。出願対策×英語テスト対策に加え、各種イベントやコミュニティからの情報提供で日本の中高生のグローバル進路実現をサポートします。



海外トップ大進学塾

オンライン



Route Hがプロデュース

オンライン英語講座
&
海外大学出願サービス

オンライン

中学生

アカデミック英語対策講座を受講する。

全国からオンラインで受講する ⇒ Global Learning Center

話す・書く・聞く・読むという英語4技能を鍛え、「英会話力」ではなく、海外で勉強する際に必要となる「アカデミック英語力」の基礎を徹底的に身につける。

高校1年生・高校2年生

高校3年生

Route Hが主催・共催・協賛する
各種イベントに参加する。
海外進学カウンセリングを受ける。

Essay対策指導、
海外トップ大出願指導等を受ける。

TOEFL iBT® Test/SAT® 対策講座を受講する。

全国からオンラインで受講する ⇒ Global Learning Center
海外大学や国内のグローバル系大学の受験に必要なTOEFL iBT®やSAT®の対策
講座を受講し、早い段階で目標スコアをクリアし、出願の準備を開始する。

海外大出願サービスを利用する。

海外大志望
⇒ 海外大学出願サポート

Challenge Yourself !

終わりのなき挑戦が道を開く

どんなに学力に秀でていても、優れた表現力を持たなければ世界トップレベルの大学に合格することはないでしょう。自分についての何を伝えるのか (What)、なぜそれが自分よりもより他者や大学にとって重要なのか (Why)、いかにしてそれを効果的に書き表すか (How)。この3つの要素をエッセイに託して強烈にアピールしてください。あなたの信念と、それに基づく小さくとも意義ある行動を書き示し、読む人に新鮮な感動を与えて新たな行動を引き起こすこと。表現力とはつまり、人を動かす力。それこそが、最高峰の大学が求めるリーダーに必須の資質ともいえるのです。

このような表現力を身につけるには、徹底した自己分析と訓練が必要です。現状に満足せず、二手も三手も先を読んで自分の考えを突き詰めていく。「Route H」はその手ほどきをする、いわば人生道場でもあります。



海外トップ大進学塾

Essay対策指導

海外トップ大の合否を左右する「Essay」。その対策を1対1のプライベートレッスンで行います。トレーニングを通して、エッセイ作成をサポートいたします。

課外活動・受賞歴対策、テスト受検戦略

入学審査で評価の比重が高い、課外活動・受賞歴の補強対策、SAT[®]・TOEFL[®]などのテストの受検戦略などをサポートします。

- 課外活動・受賞歴の補強対策
- テスト受検戦略

出願指導（主に最終学年）

具体的な出願戦略を始め、奨学金・大学面接対策、高校の先生への推薦状等の依頼の仕方など、特に最終学年で必要なあらゆる項目をサポートします。

- 海外大出願戦略
- 奨学金・大学面接対策
- 推薦状等高校書類の依頼の仕方

各種イベント開催

海外大進学の情報提供や、海外トップ大に在籍するRoute H 卒業生や来日する海外トップ大の学生と高校生の交流会イベントなどRoute Hならではのイベントを開催しています。

- 海外トップ大進学ガイダンス「Route H Info Session」
- ハーバード大生（学部生や大学院生）と高校生の交流会

MESSAGE

米国トップ大の合格率低下の中、前例のない結果を出す生徒も続出

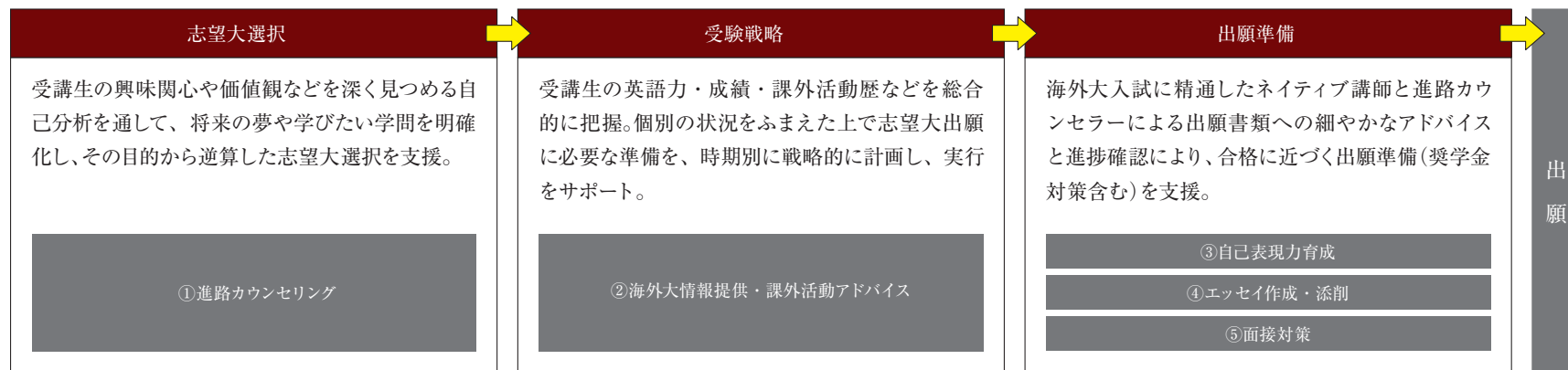
米国トップ大における、出願者増に伴う、低合格率傾向（アイビーリーグの大学、スタンフォード大、MIT等の合格率は3～6%）は変わらず、また、SAT[®]のオンライン化、日本国内での財団奨学金の増加など、さまざまな変化が続いています。

特に、上述の米国トップ大の合格率低下は、「狭き門がますます狭くなっている」ということですが、それにも関わらず、昨年も、Route H生の中には、これまでにはなかったような受験結果を出してくれています。

ある生徒は、約30大学に出願し、18大学（アイビーリーグ5大学、オックスフォード大等）に合格、また、ある生徒は、日米英のトップ大（東大理Ⅲ、スタンフォード大、イエール大、ケンブリッジ大等）に合格、もう1名は、米国では数少ない、学部から医学が学べるブラウン大学の医学プログラム（PLME）に合格し、前例が少なくても、果敢に挑戦する姿勢に、こちらも、今後海外トップ大に挑戦する高校生に、こうした生徒の高校時代の様子も含め、お伝えしつつ、挑戦を促していきたいと思っております。引き続きよろしくご願ひ致します。

「海外トップ大出願サポート」とは、希望の進路実現に向けて志望大選択から出願までオンラインでトータルサポートする出願指導サービスです。

サービス概要



受講対象者

志望大：米国難関大
英語力：TOEFL iBT® Test 100点以上目安 ※1
その他：オンラインで受講可能な方

※1 定員あり(志望大、英語力、課外活動歴、成績等をふまえ受講可否を判断させていただきます)

※1 SAT® スコアが必要な大学を目指す場合は、SAT1450点以上が目安

各プロセスですること

① 進路カウンセリング

- 受講生の興味関心や希望に基づき、具体的な志望大選択を支援
- 志望大の絞り込みや、それに合わせた個別の受験戦略の立案
- 面接準備や推薦状の作成依頼について、個別アドバイス

② 海外大情報提供・課外活動アドバイス

- 海外大進学についての基礎情報を提供
- 課外活動を含め、出願に向けた戦略的なスケジュール作成を指導

③ 自己表現力育成

- 受講生の価値観や長所など、自己理解を深めるための自己分析力トレーニング
- 願書(Common Applicationや推薦状など)作成のための情報収集
- 出願書類全体で自己を最大限に表現するための戦略立案を支援

④ エッセイ作成・添削

- Personal EssayやSupplement Essayなどエッセイの作成ポイントを伝授
- 海外大出願エッセイに精通したネイティブ講師によるエッセイ添削

⑤ 面接対策

- 各大学および奨学金の面接における想定問答作成および面接練習

※その他、海外大や奨学金団体に提出する各種エッセイを個別に添削する「海外大出願エッセイ添削サービス」もごさいませ。詳細はお問い合わせください。

海外トップ大進学

エッセイ添削サービス

エッセイ添削サービスは、世界各国の大学出願で必要となるエッセイ・志望理由書を1通からでも添削する個別添削サービスです。海外トップ大の添削経験豊富なプロのスタッフが添削をいたします。

海外大 エッセイ添削サービス

海外大が要求する各エッセイにつき、ネイティブ講師が Contents Check (エッセイの内容に対するフィードバック) と Grammar Check (文法、語彙選択、表現に対する添削) を行います。



共通願書 (Common Application) で提出必須の Personal Essay、各大学が求める Supplement Essay、そして University of California (UC) が求める Personal Insight Questions が対象です。



共通願書 (UCAS) で提出必須の Personal Statement が対象です。



University of British Columbia など各大学へ提出するエッセイが対象です。

海外大進学 奨学金出願エッセイ添削サービス

各種財団が提供する奨学金制度へ出願する際に必須のエッセイにつき、奨学金合格者を輩出し続けてきた日本人カウンセラーが添削をいたします。

添削対象：

- 柳井正財団海外奨学金
- 江副記念リクルート財団学術部門奨学金
- グルー・バンクロフト基金奨学金
- JASSO 海外支援制度 (学部学位取得型)
- 孫正義育英財団奨学金
- 船井情報科学振興財団奨学金
- 笹川平和財団スカラシップ など

海外大出願個別コンサルティングサービス

日本人スタッフと、1回1時間程度の個別コンサルティングセッションをオンライン (ZOOM) にて実施いたします。出願大学選定、エッセイのトピック出し、願書の作成方法、海外大出願スケジュールなど、海外大を受験するのにあたっての戦略や必要書類の相談が可能です。

英語4技能オンライン講座

当たり前**に**英語4技能を駆使し、考え、相手の言っていることを感じ、ネイティブに通じるようになる。

海外大学の入学審査 TOEFL iBT®Test での目標スコア獲得のために、Route H がプロデュースする4技能実践型のオンラインレッスンを行っています。4技能「読む・聞く・話す・書く」を技能 × 技能の掛け合わせで運用することで、学習効果を生んでいくメソッドです。講師や他受講生とコミュニケーションをとりながら英語力を養成し、「当たり前**に**4技能を駆使し、考え、相手の言っていることを感じ、ネイティブに通じる」ことを実感してください。

Learning Management System

パソコンやスマートフォンを利用することで、いつでもどこでも予習・復習・宿題を行うことができる専用システムです。隙間時間の活用で最大の効果を得ることが可能です。



Route Hがプロデュース

オンライン英語講座 &
海外大学出願サービス



講師や他受講生と近況報告などを行うことでウォーミングアップ。1クラス最大8名の毎週のオンラインレッスンが、英語力向上をペースメイクします。



「わずか15秒で自分の意見をまとめて、短時間で回答する」というテスト本番に向けて、できる限り同じ環境で学ぶことでアウトプット力を鍛えます。

生徒を目標まで導くシステム

厳しい講師採用基準と継続的トレーニングを経た精鋭講師陣、
受講生に寄り添い伴走するチューター達、
そして英語力を正確に測るアセスメント。

応募者に占める採用率は2%以下。英語がネイティブ言語であるだけではなく、講師経験、教育学・言語学での教養や知識、教材開発スキルを重視して、講師を採用しています。また、定期的に英語力を正確に測るためのアセスメントを実施し、その結果をもとにチューター達が面談を実施し目標までのプロセスの明確化、最適な学習環境作りと学習方法のアドバイスを通じ、目標達成へ導きます。

課外活動の支援

海外大・国内難関大総合型選抜で必要不可欠な課外活動を支援。

自分の興味を見つける段階から始まり、課外活動の探し方や参加後のリフレクションを仲間たちとともにに行い、大学へ進学する目的を見つけるとともにユニークなポートフォリオを作りあげます。

Writing ではエッセイを「受講生全員が一斉に書く」という場面も。書く速さや表現の巧みさなどで他受講生を目標にでき、刺激になります。



同じ志を持つ仲間からの刺激

日本全国から集うグローバル進路を志すクラスメイト達。
生徒同士がお互いの力を発揮して協力して学ぶ。

クラスには同じ志を持った仲間が日本全国から集い、「一緒に考え、教え合い、学び合う」コミュニティを形成しています。この環境を最大限生かすことが英語力上達への近道になるとともに、課外活動など様々な情報交換の場となります。



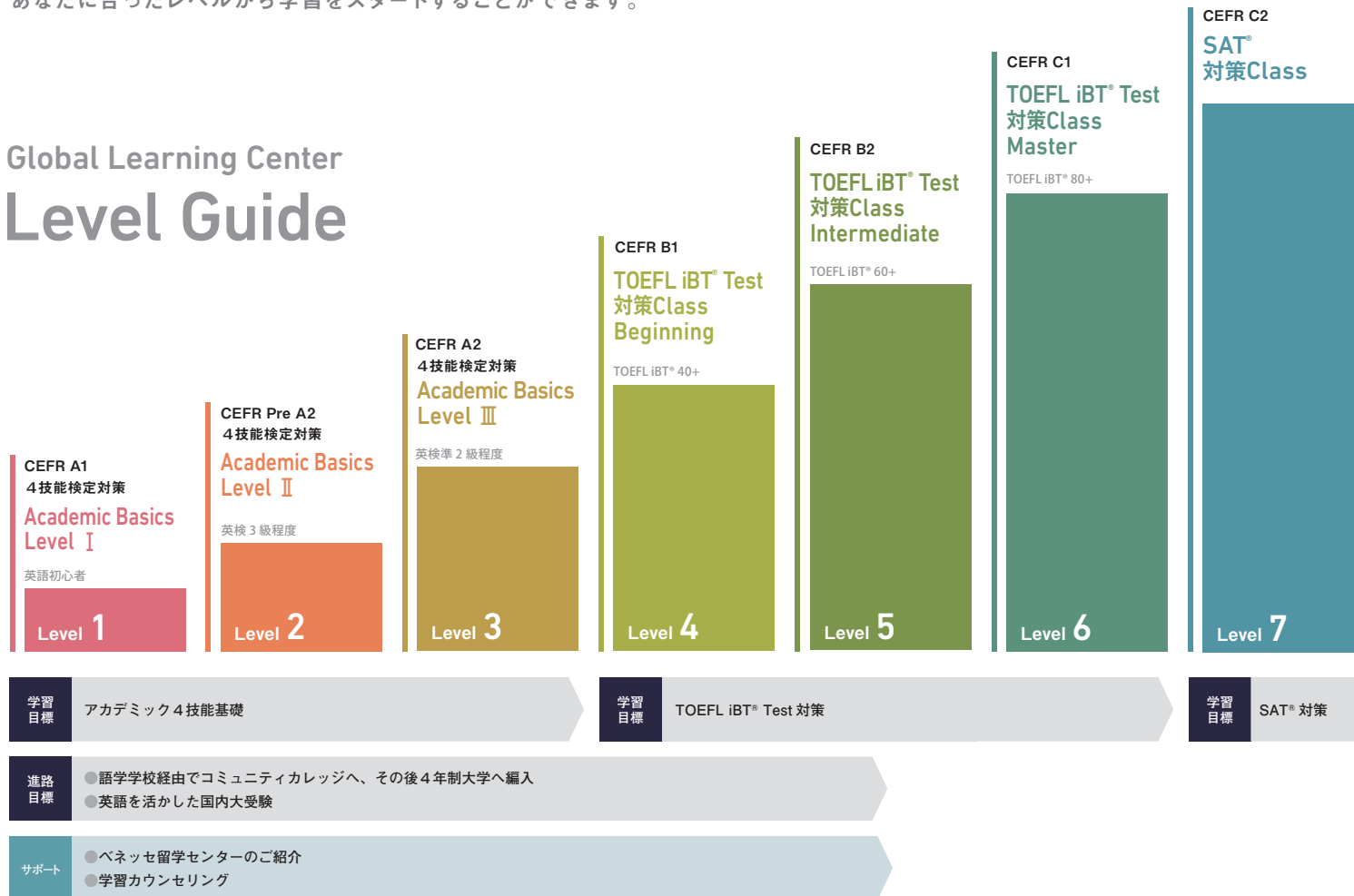
Global Learning Center レベル表

Global Learning Center のレッスンなら

学年、学校の学習進度、受講開始時期に関係なく

あなたに合ったレベルから学習をスタートすることができます。

Global Learning Center Level Guide



※「ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR: Common European Framework of Reference for Languages)」は、欧州評議会が定めた言語の枠や国境を越えて、異なる試験を相互に比較することが出来る国際標準です。

SAT® Test対策class

CEFR C2

120分×月4回

目標 SAT® テストでの高得点取得

対象 TOEFL iBT® Test 80 点以上、IELTS® 7.5 以上

TOEFL iBT® Test対策class

Master CEFR C1 Intermediate CEFR B2 Beginning CEFR B1

120分×月4回

目標 TOEFL iBT® Test での高得点取得

対象 Master : TOEFL iBT® Test 80 点以上、IELTS® 7.0 以上
Intermediate : TOEFL iBT® Test 60 点以上、IELTS® 6.0 以上、英検準 1 級
Beginning : TOEFL iBT® Test 40 点以上、IELTS® 5.0 以上、英検 2 級

講座内容

より速く読み、正確に聞き、論理的に話し、独創的に書く。4技能すべてにおいてさらなる高みをめざす。
TOEFL iBT® Test 対策クラスは、海外難関大や早稲田大・上智大・ICU などの国際教養学部といった、国内でも最難関のグローバル系大学・学部を目指す方々のための講座です。大学入試で TOEFL® Test スコアを活用することをめざし、テストの目標スコア取得を目的とします。「速く読む」「正確に聞く」「論理的に話す」「独創的に書く」など、英語力の高みを目指すことができ、大学入試英語だけでなく、海外留学や海外大進学に必要な使える英語 4 技能を身につけます。

アウトプットの時間を多く取ることで、英語を使いこなすためのトレーニングを行う。

語彙や文法の基礎は既に押さえているものの、それらの知識を使いこなしてアウトプットすることが苦手な受講生が少なくありません。レッスンではアウトプットの機会を多く設け、論理的思考のフレームを用いた思考と発話の練習を繰り返し行います。TOEFL iBT® Test 対策はもちろん、さらに英語 4 技能を使いこなすためのトレーニングを重ねます。

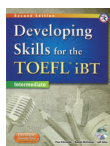
TOEFL iBT® Test対策クラスは、3つのレベル別



Master

Reading: 700 語程度、Listening: 4~5 分程度のパッセージを扱います。内容を瞬時に理解し、構造のかつ論理的にひも解っていく力を養います。

Mastering Skills for the TOEFL iBT
Second Edition Combined Book with
MP3 CD / Compass Publishing



Intermediate

Reading: 500 語程度、Listening: 3~4 分程度のパッセージを扱います。速読力を鍛え、どんな内容でも対応できる応用力を磨いていきます。

Developing Skills for the TOEFL iBT
Second Edition Combined Book with
MP3 CD / Compass Publishing



Beginning

Reading: 300 語程度、Listening: 2~3 分程度のパッセージを扱います。論理的な構造で書かれた学術的な文章に触れ、着実に読み、聞きとる力を身につけます。

Building Skills for the TOEFL iBT
Second Edition Combined Book
with MP3 CD / Compass Publishing

講座内容

海外大出願に必要なSAT®のスコア取得をめざし、高度なアカデミックスキルを身につける。

SAT® Test 対策クラスは、米国大や国内難関大など、出願時に SAT® Test のスコア提出が必要な大学の合格を目指す方のための講座です。Evidence-based Reading & Writing と Essay の対策を通して、速読読解力・論理的思考力・短時間で自分の意見をまとめて書く力など、高度なアカデミックスキルを身につけます。

テクニカルな指導と正解の理由を追求するReading&Writing

テーマに対するアプローチを学ぶEssay

Evidence-based Reading & Writing では、問題形式別の答えの導き方や、素材文のどういったポイントに注目すべきかなど、テクニカルな指導を多く行います。一方で、正しい選択肢について、なぜそれが正解なのかを必ず確認し、批判的に文章を読む力を養います。

Academic Basics class (4技能検定対策クラス)

Level III CEFR A2 90分×月4回
Level II CEFR Pre-A2 90分×月4回
Level I CEFR A1 90分×月4回

目標 英語 4 技能の基礎を統合的に学び、運用する力を身につける
各種英語 4 技能検定試験のスコア取得

対象 Level III : 英検準2級以上 Level II : 英検3級以上 Level I : 英検3級程度

講座内容

Academic Englishの習得に向けて、まずはコミュニケーションな英語力を磨く。

英語でのスムーズなコミュニケーション力を身につけた方や、将来的に大学・高校受験で英語を強みにしたい方、GTEC CBT® や英検、TEAP® などの各種4技能検定試験の準備をしたい方のための講座です。まずは英語で読み・聞き、英語で考えることを重視して基礎を磨き、徐々に応用力の構築につなげます。

各種テストの問題形式に対応。様々な場面に対応できる英語力を養う。

Academic Basics クラスでは、Reading・Listening は TOEFL iBT® Test ベースのテキストを用いますが、Speaking・Writing では GTEC CBT® や TEAP®、IELTS® など、各種4技能検定試験で出題される問題形式を取り入れています。高校受験や大学受験で4技能検定試験を利用する方に、ぴったりの講座です。

Academic Basicsクラスは、3つのレベル別



Level III

200 語~300 語程度の短いパッセージを扱い、より早く読み、聞いて理解する力を磨きます。多様な問題形式に触れることで、応用力が身に着きます。

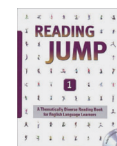
Basic Skills for the TOEFL iBT 3
Reading Book, Listening Book
with Audio CD / Compass Publishing



Level II

150 語~200 語程度の短いパッセージを扱いながら、内容は Level I よりずっと学術的になり、単語の難度も上がります。知識の幅を広げ、英語のレベルを一段引き上げます。

Basic Skills for the TOEFL iBT 2
Reading Book, Listening Book
with Audio CD / Compass Publishing



Level I

学術的なトピックを扱いつつも、難しい単語や文法が用いられており、基礎力を養うには最適です。

Reading Jump 1
Student Book
with Audio CD / Compass Publishing

質の高いサービスと日本唯一の12年連続ハーバード大、13年連続イェール大合格実績により、全国の自治体、教育委員会、学校から信頼をいただいています。

都道府県など行政、自治体、教育委員会、学校への講座提供実績（2022年抜粋）※五十音順

茨城県 様

次世代グローバルリーダー育成

目的

英語に関する高い意欲や能力を有する中高生を対象に、国際社会で活躍できる人財を育成する。

- オンライン英語講座（TOEFL®、SAT® 対策、英会話など）
- リーダーシップ講座
- 思考力講座
- ディスカッション、ディベート、模擬国連
- 海外トップ大生との交流会

熊本県 様

海外大学進学支援

目的

海外進学を志望する中高生を学校の垣根を越えて集い、英語力やエッセイ作成などの海外進学に必要な能力向上を図る場や海外進学に関する情報提供等の支援を行い、海外進学を促進する。

- 学校、オンラインでの英語講座（TOEFL®、SAT® 対策など）
- 思考力講座
- エッセイ対策講座
- 教員研修
- 海外トップ大生との交流会

東京都 様

海外大学進学支援

目的

海外進学を目指す国際バカロレア生、保護者、教員に進学指導に特化した情報及び支援を提供し、進路希望を実現する。

- 学校での英語講座（TOEFL®、IELTS™、SAT® 対策など）
- 世界のトップ大学情報提供
- エッセイ対策講座
- 教員研修
- 保護者会
- 海外トップ大生との交流会

横浜市 様

海外大学進学支援

目的

高校生を対象に海外進学に必要な英語力の向上、エッセイやディスカッションの手法の習得を図るほか、異なる文化や価値観を尊重し、日本や横浜の文化や歴史等について海外に発信する力を養成する。

- 学校、オンラインでの英語講座（TOEFL®、SAT® 対策など）
- 思考力講座
- エッセイ対策講座
- 教員研修
- 海外トップ大生との交流会

お申込みの流れ／無料体験・無料カウンセリング／受講費のご案内

※ご案内の受講費には消費税を含みます。

オンライン英語講座

Global Learning Centerの体験はこちら

STEP
1

無料体験授業にお申し込みください。
右記のQRコード、もしくは公式サイトからお申し込みください。



STEP
2

お申込み完了後、2～3日以内にメールにて、
無料体験日時の調整を行います。

STEP
3

接続の確認とオンライン操作の
ガイダンスを実施無料体験授業を受講

STEP
4

入会申し込み／受講スタート

Global Learning Center受講の注意点

快適にご受講いただくため、ご受講される受講生には、以下の環境を整えていただくことをお願いしています。

- 光インターネット推奨 ※ケーブルTV回線、ADSL、ポケットWi-fiの方は、一部受講ができない場合がございます。
- パソコンOSが受講に最適なバージョン (Windows: Windows 7以上、Mac: OS X (10.4以上))
- Google Chrome、Mozilla Firefox、Internet Explorerのいずれかのウェブブラウザを利用

Global Learning Center 英語講座受講費 月謝

●入会金	33,000円
●SAT / TOEFL iBT® Test 対策 Class	30,800円
●Academic Basics Level Ⅲ、Ⅱ、Ⅰ	19,800円

※解約を希望される場合は、指定期日(毎月20日)までにお手続きいただければ翌期からの退会・休会が可能です。

Global Learning Center マンツーマン英語講座

●ネイティブ講師マンツーマン指導 4回	お問い合わせください。
---------------------	-------------

オンライン海外トップ大出願指導

Route Hの無料カウンセリングはこちら

STEP
1

無料カウンセリングにお申し込みください。
右記のQRコード、もしくは公式サイトからお申し込みください。



STEP
2

お申込み完了後、2～3日以内にメールにて、
無料体験日時の調整を行います。

STEP
3

入会申し込み／受講スタート

Route H 海外トップ大出願サポート 受講費

●(奨学金エッセイ指導あり)	月謝 49,500円
----------------	------------

海外大学出願サポート 受講費

●(奨学金エッセイ指導あり)	月謝 49,500円
●(奨学金エッセイ指導なし)	月謝 38,500円